文學博士内藤虎次郎著

支那論

東京
文會堂書店發行

商人曉然知武王周公之心而君臣上下各止其所無複有怨
懟不平之意與後世之人主一戰取人之國而毀其宗廟遷其
重器者異矣
上古以來無殺君之事也湯之於桀也放之而已使紂不自
焚武王未必不以湯之所以待桀者待紂紂而自焚也此武
王之不幸也當時八百諸侯雖竝有除殘之志然一聞其君之
見殺則天下之人亦且恫疑震駭而不能無歸過於武王此
伯夷所以斥言其暴也及其反商之政封殷之後人而無利
於其土地焉天下於是知武王之兵非得已也然後乃安於
紂之亡而不以為周師之過故箕子之歌怨狡童而已無餘
恨焉非伯夷親而箕子疎又非武王始暴而終仁也其時
異也
最不工書
天生强我自書所作已二年餘矣念其文或有補於
世教故不辭而書之己酉歲八月二十九日顧炎武寧
人

顧亭林先生炎武筆蹟

吾廬萬山中瀑布掛窓
戶布算青松間鏗然當
夜午娛耳有天樂侍側唯
離席不辨景過清所得豈
訓詁讀書五十年撲身牛角
苦山居讀書樂此言不敢
吐乃知才分殊相去寧百
武

贈

箸雷道兄

姚江八十六翁黃宗羲

黃黎洲先生宗羲筆蹟

曾文正公國藩筆蹟

胡文忠公林翼筆蹟

馮景廷先生桂芬筆蹟

熊乗三君希齢筆蹟

自叙

此書のやうなものを書いて見やうかと思ひ立つたのは、昨年の夏秋の際であつたが、其頃朝鮮へ旅行したので、姑らく着手の機會もなかつた。十一月の初めに文會堂主人の懇ろなる勸めによつて、いよ〳〵着手することゝはなつたが、疎懶なる余には、到底自ら筆を執るといふことが見込がないので、懇意なる朝日新聞記者高畠政之助氏に速記を依賴した。高畠氏は我邦に於ける有數の速記者で、亦余が講演は最も數々速記された經驗があるからである。かくて十一月十一日に第一回を演述し、同廿五日に第二回を演述し、十二月二日に第三回を演述し、十二月九日に第四回を演述し、十二

月三十日に第五回を演述し畢つたが、變化の急激な支那の時局は、此の講演の繼續して居る二箇月間にも、目まぐるしき程變轉し、講演が終りて、其の速記録を訂正し、之を印刷して居る間にも、尙更に變轉した。講演を始めた頃にはまだ、熊希齡氏の施政方針も發表せられなかつたが、其の發表されたのを見ると、其の項目の分け方が、自分が論ぜんとして居るのと大差がないので、半途から其の項目に隨ふやうになり、隨つて發表以前に演べた分をも、それと矛盾しないやうに訂正した。又印刷中には、熊希齡氏の總理辭職となり、袁氏の退歩的方針は、益々露骨になつて來て、殆ど變法論の發生せざる以前の淸代に後戻りしやうかと思はれる程になつて、本論の最後に論じた如く、熊氏の施政方針なども眼中になくなつて居るやうである。それ故此書の印行さるゝ頃には、すべて議論が時局に後れるやうになつて居ることは免かれないであらうが、しかし現在の支那に對する余の意見としては、此の目前の時局の變化の爲に、之を改める程の事もないと思ふから、やはりそのまゝ世に問ふことゝした。但だこゝに逆じめ讀者にことはつて置きたいことが二つある。一は此書に述べた意見に、積極的施設に關する考が甚だ乏しいこと。二は此書は支那人に代つて支那の爲めに考へたので、外國の側から、例へば我か日本の如く、支那の事勢によつては、多くの利害を感ずべき國から看た議論の缺けて居ること、是である。

有體にいへば積極的施設に關する意見を建てる程、余が現

在の支那に關する研究が出來て居らぬのである。目下の急務とする財政などに就ても、何種の租稅を整理すれば、幾許の收入があるとかいふやうな事は、今少し支那政務の內情を熟知せねば、到底確實なる計畫を立てる譯には行かぬ。尤も此の如き實務上の研究は、單に外國人たる余が、立て得ぬのみならず、直接支那の政務に當つて居る人でも、立て得るかどうかと疑ふので、熊氏の如き、其の長所は財政に存する人であるが、其施政方針に述べてある財政計畫は、決して我々が考へ得られる以上の精確な者ではない。但し自分は此より以上、精確な調査を爲すべき方法が、目下之なしといふのではない。過去三四十年間の支那貿易の發展を調査すれば、其の國富の增進を測定することか出來る筈であり、又鈔

關其他の財政機關が、外國人の管理に歸した結果、其の收入の增加した割合を調査すれば、支那の實際の租稅負擔力が推算されるのであるが、今自分の手許には、それらの材料が殆ど全くないので、已むを得ず、狀況から判斷される限りの空論に留まることゝなつたのである。しかし古來の自然な成行から、並びに內外の形勢から攷究した結果、支那の如く絕大な惰力によつて潛運默移して居る國情、人爲による矯正の效力を超越して居る國情が、自然に落着くべき前途は、確かに積極的施設の基礎となるべき者で、此の惰力の方嚮を知ることが、目下最も大切なる事と思ふので、一つは枝蔓に涉る細目の議論に及ぶ遑がなかつた點もあるのである。從來支那の經世論を立てた識者の論ずる所に徵しても、我

々に深甚の感動を與ふる者は、其の自ら認めた弊害を救濟する方法として、自ら案出した議論であつて、之には奪ふべからざる權威を感ずる。たとへば顧炎武の郡縣論とか、日知錄とか、黃宗羲の明夷待訪錄とかいふ者は、時勢の窮極して、通變すべき機會が到着しつゝあることを看取した點に、痛切な意義があり、中には支那の尙古思想に薰染せらるることを免かれ難い處から、封建の事實上復古、貴族政治の復古等を夢想する如き缺點もあるけれども、其の改革の精神は今に至りて生氣ある。馮桂芬の校邠廬抗議なども、近年では最も切實なる者であつて、近來の變法論者の如く、單に外國制度の摸倣を以て、無上の政策と考へて居るものとは選を異にして居る。劉坤一、張之洞の變法會奏なども其第二奏たる、支那の宿弊を論じた處は、最も痛切であるが、其他の積極的施設として、外制摸倣を主張した處は、徹底して居らぬ恨がある。蓋し外制摸倣に就ては、支那の識者の智識が外制の根源由來を明らめ知る迄に至らぬ爲に、其の取舍の議論も徹底せぬのであらう。强兵といへば、新式軍隊の增加と解釋し、富國といへば商工業の發達とのみ思ひ、政治の改革といへば、憲法とか國會とかいふことを考へる丈で、外國文明の深い意義を知らぬ、是が徹底せぬ變法論の眞相である。自分は多少此の消息を解する處から、先づ支那の國情が果していかなる程度まで世界政治上の進步に順應し得べき者か現在已に破裂した革命の局面が、いかなる程度で收拾し、さうして其の最も適當な政治上進步の階級に落着くべき者

であるかを概論し、積極的施設の責任を持て居る者に深き省慮を促がしたいと思つたので、積極的施設を說くには不便な自分の地位を强て展開せんとは試みぬのである。

然るに袁世凱などの考では、最近の一時的反動の潮流を、政治上變遷の大勢の發現と誤信して居る傾が歷々と見え、一日々々と其の國運を底なき暗黑の坑に投げ入れんとして居る。從來の五國借欵は、尙ほ自國の財政權の獨立を考へての上の借金で、同じ借金でもソコに苦心といふものゝ味もあるのであるが、近日の油田及び淮河浚渫に對する外資輸入などは、殆ど自己の存立を認めぬ借金である。實は此書に對して起るべく豫想する批評の第二項にもある如く、自分は全く支那人に代つて、支那の爲に考へて、此書を書いたのであるが、今日のやうな狀態では、モハヤ支那の爲に考へるといふ必要は、遠からず無くなるかも知れない。北淸事變の際に、一時天津に都統衙門といふ者が出來て、列國の聯合政治を行つたことがある。第二の大なる都統政治が出現すべき時機は、あまり遠いとは思はれぬ。支那人は大なる民族である。此の民族は民族として統一されて居る。又列國の支那に於ける利權も隨分錯綜して居る。故に支那が急速に分割さるべき者とは、自分も思はない。但し一種の都統政治は何時でも行はれ得るのである。又此の都統政治の方が、國民の獨立といふ體面さへ拋棄すれば、支那の人民に取て、最も幸福なるべき境界である。我等が本論に述べた國防の必要が、こゝに絕對に消滅する。支那の官吏よりは、廉潔に且つ幹能

ある外國の官吏によつて支配されるから、負擔の增さぬ割合に善政の恩澤を受ける。袁世凱を大總統にさへ仰ぐ國民が、都統政治に不滿足を訴へるなどゝいふことは、有り得べき道理がない。それ故自分は日本などの如く、支那の事勢によつて利害を感ずべき國から看て、支那がいかに定まるがよいかなどゝいふ議論は、無益だと考へたのである。支那の人民に聊かなりとも政治上の德義心があつて、自己の存立を念頭に置けば、此書の本論に論じた如き落着を見るべき者、さもなくば第二の都統政治が出現すべき者と、覺悟さへすれば、日本其他の外國が取るべきすべての手段は明白なのである。都統政治には、君主制、共和制の問題も、領土に關する問題も不必要であるから、此書の本論に於ける第三以下だけが、尙ほ攷究せらるべき者と爲つて殘るのである。但し我が日本が此の如き時機が到着した際に、支那の人民を救濟すべき準備があるか。これは政府當局者に問ふのみではない、我が國民に切實に問ひたいのである。

我々は今以て失敗したる革命黨の人々に同情を表する。革命黨の人々は、自から支那の國民性を了解せなかつたので、其の限りなき辛苦の効果を水泡に歸せしめてしまつたのである。支那の國民性は何物を犧牲にしても平和を求める。兵亂の際などには桀驁なる棍徒の横行をも見、良民の代表たる父老(この語の使用されたことも古いものであるが)は屛息して居るが、少し事態が穩かになると、父老の歡心を得ざれば、繼續した統治は出來ぬのである。革命黨は其の新銳

の意氣にまかせて、父老の歡心を得ることを顧慮しなかつた爲に、近い將來に於て事を起す地盤を失つて居ることは、大なる打撃である。其の最初奮起した動機は、誠に堂々たるものであるけれども、其の倏起倏滅した狀態は、李自成、張獻忠の如き諸賊と異ならぬ結果になつてしまつた。此の父老收攬といふことは、其の法制の美惡を問はず、人格の正邪を論ぜず、支那に於ける成功の秘訣である。惡人でも惡法でも、此の秘訣を得れば、必らず成功する、況んや改革論とか、政治上の主義とかいふことの如き、成功の要素としては、父老收攬の前には、何の力もないのである。革命黨は此の秘訣の鍵を握ることを知らないので失敗した。目下袁世凱が知縣試驗に舊讀書人のみを採用するなどは、頗る此の秘訣を心得て居るのである。しかし勿論此の秘訣も國家の滅亡を救ふ爲には何の役にも立たぬ。父老の歡心を得て成功した君主でも、大總統でも、外敵に對して國を滅ぼさぬといふことは、決して保證されぬ。父老なる者は外國に對する獨立心、愛國心などは、格別重大視して居る者ではない、鄕里が安全に、宗族が繁榮して、其日々々を樂しく送ることが出來れば、何國人の統治の下でも、柔順に服從する。長髮賊の李忠王を官軍に密告した者は、鄕人に打殺された、支那に於て生命あり、體統ある團體は、鄕黨宗族以上には出でぬ。此の最高團體の代表者は、即ち父老である。袁世凱は或は此の父老の上に成功した大總統として、支那の國民を都統政治に引繼ぐ大人物であるかも知れぬ。袁世凱の此の如き大人物たることを知

れば、都統政治に處する日本の準備も、容易に了解せらるゝのである。但しその準備が日本にあるであらうか。

余が此書の著述は、平生支那の先識者の著書及び意見に負ふ所少からぬので、聊か記念として卷首に、顧亭林、黃黎洲、曾滌生、胡潤之、李少荃、馮景廷六君及び余が親交ある熊秉三氏の筆蹟を寫眞版として載せることゝした。

此外にも多少補論したいこともあるけれども、這回は先づ筆を擱く。

大正三年三月十二日

內藤虎次郎

支那論目次

二、領土問題

三、內治問題の一

地方制度

四、內治問題の二
財政

五、內治問題の三

政治上の德義及び國是

附錄

支那論目次終

支那論

內藤虎次郎著

緒言

支那の時局は、走馬燈の如く急轉變化して居る。之に對して意見を立てる人々は動もすれば其の推斷の外づれ勝なるが爲に、いかに支那事情に通達した者でも、他の信用をも落し、自らも茫然たる事が多い有樣である。是は支那の歷史が從來、其の變化のいつも遲緩なる例を示して居たのに、近頃の文明の利器の利用は、全く反對の結果を齎らした上に、本來支那人が無節操で、日和見で、勢力に附和して、一定の主張に乏しい處からして、始終グラ〳〵して、傍觀者から全く見當が付

かない爲である。目下勢力の中心たる袁世凱其人にも、特に一貫した政策がない、有名な政論家の梁啓超などが、手の裏を反すやうに其の深讎の下風に立つなどは、いかにしても日本人でも、外國人でも豫想し難かつたことであらう。尤も內閣總理熊希齡などは、其中で一貫したる政策がある人物と云つても可なる人であるが、其の一貫した政策を遂行し得るや否やは、實に目下の疑問であるのみならず、熊希齡の政策も、實は清朝の末年にあつて考へた者を、革命後の今日に於ても、其の儘にやつて見やうといふやうに見える。熊氏とは余も懇意の間柄であり、十年前には當時の支那の救濟策としては、多少所見を上下したこともあつて、其識見をば認めて居つたのであるが、あの時は西太后も在世なり、頭が古くても張之洞なども一代の人望を繫いで居り、云はゞ壓力の中心があつたのであるから、此の壓力を利用して、平和的に諸問題を解決するといふ見込も立ち、隨て中央集權も可なり、藩屬統一も可なり利權回收も或程度までは行はれ得る筈であつたのであるけれども、今日の如く一旦革命が突發してしまひ中心たる壓力が全くなくなつた以上は、袁世凱のやうな生溫い統一策の實行と同時に、急激な緊肅政策を成功させやうといふことは甚だ覺束ない次第である。此は熊氏などの大に考へねばならぬ處で隨て支那と直接の關係ある列國も、この形勢と政策とのドコ迄一致し得るかを綿密に觀察する必要ありと思ふ。世界の政治上、經濟上、其他の變遷は、近代になるほど、人間の力を超越して居つて殊に文明の普及は人間の能力を平均させる方に傾いて來て、異常の天才が出難くなり、如何なる國家、如何なる人民でも、一の天才の範疇に容れて新しい型を作るといふことが六ケしくなつて居る以上、支那の如く特に數千年前からして、已に國土人民の廣大な自然發動力が爾來の有名な治者の能力を超越してしまつて居つた國が、今日に於て、其の自然に傾い

て行く惰力に順つて、政策を立てる以上の事を何人か爲し得るであらう。さうすれば今日支那を統治すべき最善の政策は、其の國情の惰力、其の國土人民の自然發動力が、如何に傾いて居るか、ドチラへ向つて進んで居るかといふことを見定めて、それによりて方針を立てるより他に道あるべしとも思はれぬ。此の惰力、自然發動力の潜運默移は、目下の如く眩しいまでに急轉變化して居る際に在つても、其の表面の激しい順逆混雜の流水の底の底には、必ず一定の方向に向つて、緩く、重く、鈍く、強く、推し流れて居るのである。此の潜流を透見するのが、卽ち目下の支那の諸問題を解決すべき鍵である。

余は敢て自ら僣して此鍵を握つたとは言はぬ。但だ余等の如き歷史を專攻する者に取つては數千年來の記錄が示して居る所の變遷の中で、最も肝要な一節が、目前に一齣の脚色として演出されて居るといふのは、此上もない興味あることである。多少は昔の名優の型も朧氣ながらに聞覺え、見覺えがあるので、此の舞臺に對して見巧者といふ程にはいかぬまでも矮人觀場といふ譏りを受ける迄にも至るまい。それで思ひ附た脚色やら技藝やらの評判をして見るといふことも、自ら興味あるのみでなく、同じ見物人の參考ともならうも知れぬと氣まぐれを起したが、其の氣まぐれの中には、多少の世の爲人の爲にする婆心も籠つてあるので、試みに目下最も重大視せられて居ると思ふ幾つかの問題を提げて看て、それを一々かの大惰力、自然發動力の標準によつて解釋をして見るといふのが、此の小册子の出來る由來である。支那の革命亂が起つた際には、我が京都大學の特別講演として、淸朝衰亡の原因を論じて見たが、後に以文會から出版されたのがある。あれは衰亡の豫斷であるから、淸朝一代に其原因を求めて、それで解釋が略ぼ濟むのであるが、此度のは破壞された淸朝の跡へ、新しい時代を建設する方から看た立論であるから、支那の古來殊に

近世の大勢を統論せねばならぬ處からして、覺えず冗漫に渉るやうになつたのは已むを得ぬ次第である。

一、君主制か共和制か

將來の支那が君主制となるか共和制となるかは、最も重大な問題であつて、之を解決するには、歴史の精神に通達し又歴史の形跡を超越するの作用を要する。歴史家は常に時代を區劃して、上古、中古、近世等の名稱を立てるが、それは單に今の時代からして遠い時を上古とし、其の次を中古とし近い時を近世と云ふやうな、單純な意味ではなくして、其の時代の分け方に各々内容がある。西洋でも近世と云ふものゝ意味を、文藝復興の時代以後、つまり一般民衆の勢力が加はつたとか、新しき土地の發見により、經濟上の變調を來したとか、社會組織が變形して來たとか云ふ所の内容を有つたものを稱するのであつて、日本でも若し同樣な區劃をする時には、其の意味を以て區劃するの

が穩當であるとは、有力なる歷史家の主張となつて居る。それで單に此の開國五十年來が近世と云ふのではなくして、社會組織の根柢が漸々變つて來た所の時代、卽ち武家の勃興からして、それから平民の勢力が加はつて來る時代までを近世と謂ふべきものであつて、或は之を足利の末期からとする說もあり、或は溯つて鎌倉時代からとする說もあるのである。

支那に於ても矢張り同樣の見方を以て區劃を立てることが出來る。それで單に明代若くは淸朝以後を稱して近世と云ふのは、普通の素人考へであつて、若し歷史上の見地から、近世と云ふものに內容あり、意義あるものとして考へると云ふことになると、更に溯つて、唐の中頃から、五代、北宋の時に及ぶまで、卽ち今より一千百年前頃より八百年前頃までの間に、此の近世紀と云ふものが漸々纏つて來たと見る方が穩當である。それで其の間に於ける歷史上の變化が果してどう云ふ風にして、近世と云ふものを形作つたかと云ふことを考察すると云ふと、簡單に云へば、第一には貴族政治からして君主獨裁政治に傾いて來たと云ふやうなことが、重大な事實になつて居る。それより以前に在ては、支那の政治は獨り貴族の團體の把握する所であつて、平民は勿論全く之に與からない。さうして天子と云ふものも、其の貴族の中の或る一家族が、時々代り合つて其の地位を占めるのであつて、君主の地位と云ふものは、貴族よりも特別に懸け離れた所の、侵すべからざる神聖のものと云ふ意味にはなつて居らなかつたのである。是は此本の附錄にも有名なる黃宗羲の明夷待訪錄を引いて說いてあるが、其の根本は孟子の說から來たので、孟子は周の時の制度を論じて『天子一位、公一位、侯一位、伯一位、子男同一位、凡五等也』と云つて居る。是は封建制度の時に、天子が直轄の土地卽ち邦畿と、侯服卽ち諸侯の領分との間の關係を云つたので、詰り天子が外諸侯に對する

地位を説明したのである。それから又孟子は斯う云つて居る『君一位、卿一位、大夫一位、上士一位、中士一位、下士一位、凡六等』是は天子が（諸侯でも、略ぼ同じ）其の領土の中に於ける官爵ある者に對する關係を説明したのであつて、卽ち内に對する地位を云つたのである。之を要するに内外共に天子の地位と云ふものは、この幾等の階級ある貴族制度の上に、單に其の一階だけの高さを占めて居るのであつて、例へば公が侯に對し、侯が伯に對し、伯が子男に對するだけの一級の差等を、天子は最上の公に對して有つて居るに過ぎないのである。それで此の各諸侯の上に特別に擢んでた絶大の力並に地位を有つて居ると云ふのではない。それから内部の方でも卿が大夫に對し大夫が上士に對し上士が中士に對し中士が下士に對すると云ふだけの差等を、君は卿に向つて有つて居るに過ぎないのであつて、百官の上に超越した大勢力、並に優れた地位を占めて居ると云ふのではない。それであるから天子の位と云ふものは、内外倶に非常に重大なものと云はれない。孟子は又或る時に斯う云ふことを言つて居る。齊宣王が卿と云ふものゝ位のことを問ふた時に、孟子が答へて、貴戚の卿あり、異姓の卿あり。貴戚の卿と云ふものは、君に大いなる過ちある時は諫める。反覆して聞かれざる時は、位を易へると云つて居る。卽ち天子の同族又外戚として卿の位を占めて居る所の貴族は、天子の位をも代へるだけの力を有つて居り、又さう云ふことが許されてあるのであつて、君主は貴族に對して絶對の支配權を有して居るのではない。是は先づ云はゞ大體上古の事であつて、封建制度で列國が分れて居る時のことであるが、秦漢以後、統一政治の世となつても、未だ全く此風を脱しない。但し秦漢以後は此の貴族政治に幾らか君主獨裁、並に平民政治の意義を加味して居つたことは事實であるけれども、是は戰國の後を受けた實力本位時代の餘波と、並びに其時に產出した政治上の

理想で加味するのであつて、其の實際に於ては、矢張り何時でも權力は貴族の手中に在るのである。それで例へば前漢の、時代に外戚が非常に盛んであると云ふやうなことも、即ち日本の藤原時代に於けるが如く、貴族の勢力が盛んになつた結果である。殊に六朝に至つては重もに皆名族の政治であつて、東晉の時に王謝二氏が主として政權を握つて居るのも、名族の爲であり、范陽の盧氏、博陵の崔氏などは、常に第一流とせられて居る。此の時代は全く名族が交る〳〵出て政權を握るので、世族でなければ、大官に選擧される資格がないのみならず、天子の系統が幾度代つても、名族は依然として其地位を失はない。士大夫の族は其家固有の權利で、天子から命ぜられるのではないと云つて、寧ろ王統の代る毎に、天子から世族に媚びる爲に官階などを進めたものである。唐の時になつても、天子の外に矢張り名族と云ふものがあつて、太宗が之を破壞しやうとしても行はれない、其時作つた譜牒にも、崔氏は第一で太宗は第三たるに過ぎぬと云ふ程であつた。斯う云ふ名族は、多く互に相結婚して、天子の家もしくは外戚の家とでも容易に結婚をすることを允さない程で、況んや其外の普通の人間に對しては殆んど結婚もせず、全く特別なる地位を占めるやうな形になつて居つたものである。尤も其の際に屢々民間から起つて天子になつた者もないではない。例へば漢の高祖とか、それから六朝の時の宋の武帝とか云ふやうな人は、皆微賤から起つて居る。併し漢の高祖の起つたことに就ては、事實は微賤から起つたに相違ないけれども、それが天子になつた所以の理由としては、矢張り支那に昔からある所の一種の神祕的傳説に依つて解釋をして居る。それはどう云ふ事かと云ふと、例へば堯の母が電光に感じて孕んだとか、周の先祖たる后稷は其母姜嫄が巨人の足の母指の跡を踏んで、それが爲に孕んだとか、それから殷の祖の契の母簡狄は玄鳥の卵を落したのを

呑んで、それが爲に孕んだとか、皆何等か神祕の傳説があつて、神靈に感じて生れた人が、卽ち一天下を支配する所の天子になるのであると云ふ考があつて、其の當時は感生帝といふ名稱があつた。是は支那のみならず、東洋諸國一般に行はれたことであつて、例へば扶餘並に高句麗、百濟の國の元祖と稱せられて居る東明王などは、其母が日光に感じて卵を生んで、それから出たと云ふやうなことを言つて居る。それが又遙か後世まで、蒙古種族とか、滿洲種族までに類似した説が遺つて居る。是が當時に於ける帝王の元祖に對する普通の考であつたから、漢の高祖も其母が交龍の瑞祥があつて、さうして生れたとも云ひ、又殊に其の血統が堯の後裔であるとも云はれて居つて、單に微賤なる平民から出たとは信じて居なかつたのである。實際微賤から出た者ですらも、斯の如く解釋してあるが、同時に貴族の多數も亦皆神明の冑であるから、君主の地位が之に對して格別優秀として認め

られぬと云ふのが其時代の思想であつた。しかも此の名族と云ふものは、自然に其の血統上持つて生れた所の資格であつて、例へば上古の周の時に、諸侯が天子から命を受けて、さうして其の封土を得る。是は日本で例へば德川時代の大名が、將軍から封土を貰つて、さうして大名になる。若くは古くからある大名は、德川家からして本領安堵の御墨附を貰ふと云ふやうなのとは譯が違つて、例へば近年までの朝鮮の兩班と同じやうで、官爵も領土も共に無くとも、依然として名族は名族であつて、何時まで經つても其の名族の資格を失はないのが其の本義である。斯う云ふ名族の組立と云ふものはどうかと云ふと、是は矢張り近代まで朝鮮では依然として存續して居つたのであるが、皆其の名族の譜牒と云ふものを有つて居る。卽ち日本の系圖であつて、其の一族の者は如何なる遠隔の處に居つても、皆同一の族譜を有つて居るのである。是が卽ち純然たる意義ある家族制度であつて、

支那では殊に又それに特別なことは男系を重んずることである。相續の順序を重んずることである。それで其の一族の或る一つの家が相續者が絶えても必ず其の血統のある一族からして相續者を搜す。さうして相續をするのには、必ず其の前の亡くなつた人の卑屬のものでなければならぬ。卽ち其の人の系圖の順から計算して行つて其の人の子若くは孫以下に當る所のものでなければならぬ。それで若し適當な相續者が無くして、其の人の兄弟の列に在る者、例へば從兄弟とか或は二從兄弟とか、三從兄弟とか云ふものであり、若くは其の人の父の列に當る者例へば直接の伯叔父であるとか、或は從父であるとか云ふやうなもの卽ち尊屬の者が相續をすると云ふことになると、其の系圖に於ては其の相續した尊屬の人は、系圖上正當の相續の地位は占められぬことになる。さうして前の當主の卑屬の者の地位に至つて、始めて正當の相續をすることになる。それは近世までもさう云ふ事が嚴重であつて、例へば近頃に於て清朝の同治帝が亡くなつた後に、光緒帝が立つて居る。併し光緒帝は同治帝の從兄であるからして同治帝の相續人としては立つことが出來ないから同治帝の父の咸豐帝の相續人として立つたのである。それで光緒帝が死んで、宣統帝が立つと云ふと同治帝か光緒帝かどちらか一人は系圖上の正統を占めることが出來ぬことになるので、宣統帝は同治帝の相續人として立つたのである。是は其の家族制度に伴ふ所の祭祀の制度が嚴重であつて、昔は先祖から昭穆の順を逐うて廟を立てる。天子は宗廟を七つ立てる。それから以下五つ立てる者もあり、三つ立てる者もあり、一つ立てる者もあるのであるが、其の廟主と云ふものゝ制度がやかましいので、それは必ず昭穆と云ふ順を數ふる時は段々一級下の卑屬の人に相續をさせるのであつて、其の中間の人と云ふものは、詰り廟主になることが出來ぬ。斯う云ふ譯で家族制度と云ふも

のは、系統上から正確なる意義を成して居るのである。是は近頃日本で謂ふ家族制度などゝ云ふものゝ、無意味なのとは遙に異つて居る。尤も西洋に於ては支那よりは幾らか寛大な點はあるけれども、西洋でも男系の外に女系をも認めるだけであつて、血統の無い者の相續と云ふものを認めない。其の點は日本よりかも遙に家族制度の意味を成して居るのである。日本では家族制度と云ふものゝ意義を正當に知らずに、單に家名の慣習を家族制度と誤解して居るのである。支那の名族は此のやうな嚴重な家族制度の意味を有て、相續して來たのであるから、それで官爵も封土も無くても、依然として名族の地位を維持して來たのである。六朝から唐代には譜學と云ふものが、一科の學問になつて居つた位で、新唐書には唐代の宰相は門族を尙んだからと云ふので宰相世系表と云ふ歴代の正史にない例を開いて居る位である。さうして天子と云ふものも理想として其の間から立つ。例へば唐の天子は隴西の李氏と云ふ世族が君位に立つたので、支那にそこら中に散らばつて居る名族の中で一時君位を占めた家と云ふのであつて、唐の高祖の語に家を化して國とすると云ふことがあるが、是は世族が一家を治める方法、即ち家族制度のやり方を國に應用したに過ぎない。それで君主は其の自分の一家族並に其の外の名族と共に、一般人民を隸屬として治めて行くに過ぎないのである。斯う云ふ有樣であるから、君主の地位と云ふものは、各階級の上に超越した所の絕大の權力でもつて各階級を支配すると云ふのではなくして、詰り貴族の間に居つて、さうして貴族と共に天下を有つて居ると云ふやうなことに過ぎない。それだから君主は大きく言へば、貴族階級の私有物、小さく言へば、其の一家族の私有物のやうな地位でこの一家族中には其の奴僕婢妾までも包有して居り、即ち漢唐の代などには、一時宦官即ち天子の奴僕が實際上天子を私有して居つた

時代もある。それで例へば外戚が盛んな時には、外戚からして君主の位を廢されもし、又は殺されもし、又宦官が權力を握つて居る時は、其の力に依つて、君主の地位がいかやうにも動かされもする。さうして貴族が勢力のない時でも、士族を庶民と同樣に待遇するなどと云ふことは、社會が允さなかつたのである。唐の時の天子が、臣下の上奏に對する批答は、今も遺つて居るが、總て同輩の扱ひ、友誼的の言葉使ひで、明代などのやうな奴僕扱ひは、決してせぬのでも、當時の情態が分るのである。

此の形勢が一大變化を來したのは、唐の中頃からであると云つて宜い。是は日本に於ても藤原時代の貴族政治が、近世的の政治に變る時には、必ず先づ武家、武士と云ふものゝ勃興を來したのであるが、唐の時代も頗ぶる其の傾きがある。尤も日本の武家は、元來は王族の分れであつて、幾らか貴族の意味を有つて居つたのであるけれども、此の武家に屬する家人と云ふものは、皆地方に土着して居つた者から成立つのであつて、是が既に民主勢力の根柢をなして居るのであるが、支那に於ては此の武人の勃興と云ふものは、日本とは違つて、大抵は卒伍から出身して居る。元來武官を卑しむで、名族はそんな職業はせぬのと、北朝以來、蕃夷から武人が多く出たので、微賤な者から武人が出ると相場が極るやうになつて來た。唐で武人の勢力の盛んになつたと云ふのは、所謂藩鎭の制度の結果である。卽ち各地方に置いた所の節度使が、内亂に依つて段々勢力を占めて來て、さうしてそれが到頭官職を世襲する傾きを生じて來たのに基因して居る。勿論日本でも此の武家の勢力を得たと云ふのは、各地方に亂が起つて、それを武家が征伐をして、其の時に各地方に家人と云ふものを造るやうになつた結果であるが、唐の時も同じやうな結果であつた。但し唐の藩鎭は、日本の武士などよりは遙に大いなる地方を支配して居つたので、

それが戰亂の結果から徵發しない所の兵、卽ち常に蓄へて置く所の兵を有つことになると、其の當人が死んだ時に、其の跡に立つ者は、新たに朝廷から命ぜられて來たものでは納まりが着かぬ。そこで其の藩鎭の節度使の子のあるものは、其の子を留後とすることを朝廷に願ふ。若しそれが聽かれなければ、朝廷に對して命令を奉ぜず、其の地方に割據して獨占の權力を振ふことになる。若し又其の相續人に子が無いと、其の軍中で前の節度使の幕下に居つて人望のあつた者が、其の代りに立てられると云ふやうなことが起つて來た。其の際から幾らか親分子分の關係を生じて來て、さうしてそれが到頭養子制度のやうなものになつて、遂に家族制を打ち壞す原になつた。それで親分子分と云ふ者、支那で謂ふ義兒とか乾兒とか云ふことが此の時分から生じたのであつて、詰り藩鎭の武力相續からして始つたのである。唐の時にも聰明な天子があると云ふと、此の藩鎭の弊害を打ち壞さうとして、盛んに征伐をして、一時はそれを打ち壞したこともあるけれども、間もなしに其の勢力が又元に返つて、益々此の乾兒制度が盛んになつた。それが五代の頃になると、遂には天子にまでも、其の習慣が應用されて來た。例へば後唐の明宗と云ふ天子は夷狄の出身であるが、是は先代の李克用の養子になつて、それが到頭軍隊に推されて天子の位に卽いた。いはゞ羅馬時代の皇帝のやうな者である。それから尙激しいのになると、後周の太祖は郭氏であるが、其の養子の世宗は柴氏であつて、それが天子の位を相續して居る。苟くも天子と云ふものが養子を以て相續をすると云ふことは、殆ど昔から無いことであつて、是は支那のやうな家族制度を尊ぶ國としては、非常な社會上の變化である。此の如き風習が一時盛んに行はれた爲に、一般に支那の社會の根柢を成して居る所の家族制度と云ふものを破壞した。

勿論支那のやうな歷史の古い國と云ふものは、世の中が泰平になる

と、又幾らか其の形勢が後戻りをすると云ふことはある譯である。けれども兎も角一時の大變を來して、支那の家族制が此の爲に全然失はれたと云ふではないけれども、漢魏六朝以來の名族は、此の爲に根柢から打ち壞されて譜學と云ふ者も此時に絶えて、名族と云ふ者は殆んど意味の無いものになつて仕舞つた。尤も其の後でも名族と云ふものゝ名前だけは遺して居る。例へば宋の天子になつた趙氏は、天水郡の趙氏と云ふ。それは即ち昔から謂ふ所の郡望と云ふものゝ名前だけが遺つて居るが、實は宋以後はただ趙氏と云ふ家があれば、是は天水の郡望の氏とするのであつて、實際天水郡の趙氏が昔から續いた血統を有つて明確なる譜牒を所持して居ると云ふのではない。單に現在ある所の氏姓に依つて、それが昔の名族の血統であらうと想像するか、或は粉飾するかに過ぎないのである。

是が即ち名族の滅亡した原因であつて、此の名族の滅亡は、一面に於ては君主の地位に一大變化を與へた。即ち君主の形を漸々獨裁的に傾かしめて來た。君主と云ふものは、從來は貴族の中の一人が政權を執るに過ぎなかつたのを、貴族が無くなつたので、其の結果として君主は萬民の上に超越した地位になつて來た。さうして事實上萬民の上に君臨すると云ふやうなことになつて來た。それで天子になるものは、古の感生帝と云ふやうなもの若くは名族の血統であるものでなくとも、微賤の者から起つても、天子になれると云ふことが明かになつて來た。そこで明の太祖などが起つた時は、明の太祖の苗字は朱氏であるので、或る人は其の系圖を有名な宋の學者の朱子からして引くことを勸めたものがある。併し明の太祖は自分の先祖は何處の馬の骨か分らぬものであると云ふことを認めて、それを改めなかつた。是はもう天下を救ふものは、如何なる種類の人でも天子になれると云ふことの理想を實行して居るのであつて、其の君主と云ふもの

の資格が大いなる變化を來した結果であつた。

そこで君主の地位が變つた結果として隨つて其の下に立つ所の臣僚の地位と云ふものも變つて來た。從來は天子は自分の家族を私有して、其の家を擴めて國とし、天下として居つたのであるが、今度はもう頭からして君主は天下を私有することになつた。天下と云ふものは自分の私有財產のやうな形になつて來た。從來天下と云ふものは、天子が名族と共に之を有つて居ると云ふ形は茲に失はれ、そこで其の下の臣僚と云ふものも、如何なる微賤のものでも或は試驗で登用されるとか或は功勞で登用されるとか何かで、天子に對して忠勤を勵み、天子の寵眷を受け國家に對して功績を立てた者は、誰れでもなれることになり、隨て名族でなくとも其の地位を占められると云ふことになつて來た。其の代りそれは皆一代或は同一人であつても一時のことになつて來たのであつて、其の位を失ふと云ふと、其の人は殆んど平民と異らぬことになる。又古代に貴族だけが臣僚の位を占めて居つた時には、其の臣僚と云ふものは天子の輔佐役であり、相談相手であり、決して天子の奴隷ではなかつたのであると云ふ黃宗羲の說の通りであつたけれども、今度は一人の天子に萬民が隷屬すると云ふことになつて居るから、其の大臣と云ふものも單に獨裁君主の祕書官であり、其の他の以下の臣僚と云ふものも、獨裁君主の召使であると云ふに過ぎない形になつて來た。それで是等の意味は官制の上などにも現はれて來た。支那で官制の最も完備した時代は、唐朝であつて、唐六典とか又唐令とかと云ふものは日本などの官制の根柢にもなり、東洋各國の官制の手本になつたものであるが、此の時の官制には、天子の祕書として命令を其の通り行ふものには中書省と云ふものがある。それから天子の命令を尙再應考へて、さうしてそれに對して異議がある時には、それを反駁する權力を有つて居つた者

には門下省と云ふものがある。當時政治の實行法としては、政治堂に於て中書と門下と相會して、相談をすると云ふことになつて居つた。それで宰相と云ふやうな實際の權力のある者を、唐の時には中書門下同平章事と云ふのである。其の相談する場處も元は門下省にあつた。天子が詔勅を下す時には、必ず其の一番眞先に門下と云ふ言葉を入れてある。卽ち門下省を經て一般に發表することになつて居る。中書省は單に天子の祕書に過ぎないから、門下省の如く公の地位を有つて居らぬ。門下省を通らなければ、天子の命令は絕對の權力を以て發表することは出來ぬやうになつて居つたのである。詰り中書省が天子の命令を持つて來ても門下省が不可と認めたものは、それを反駁すると云ふことになつて居つた。所が斯う云ふ官制は唐以後になつて漸々廢れて行つたのである。五代の時卽ち武人が最大の權力を有つて居つた時は、殆んど是は全廢されて仕舞つて居つた。宋の時になつて門下省の官である所の給事中の封駁を復したけれども、詔勅は中書省から下るやうになつて、唐代のやうな門下省の組織を回復しなかつた。明に至つても矢張り六科給事中と云ふ官だけは殘して居つたけれども門下省の長官は全く無くなつたのみならず、殊に明の太祖は宰相をも途中から廢して仕舞つた。宰相と云ふものがあれば、天子のする事の責任を幾らか分けることになつて居るのであるが、明の時には六部の尙書が直ちに天子に隷屬して、總理大臣の無い内閣のやうな形になつて、天子は六部の尙書に直ちに何事でも命令をして居つた。此の六部の尙書は唐代では尙書省の中にあつて尙書令の下に分職を持つて居たのを、明では最高の官とした。尤も明の制度も後になつてからは、内閣大學士と云ふものが出來て、是が宰相のやうな形を成したけれども、内閣大學士と云ふものゝ本來の性質は、實に天子の祕書役を勤めるだけに過ぎないのであつて、西洋の近代

の大臣をセクレタリーと云ふ本義と類して居るが、唐の時の中書若くは門下のやうな性質は有たないものである。詰り獨裁君主が直ちに各省の事務を一々見て、さうして天子は昔の天子と宰相との位を兼ねたやうな形になつて居る。それが清朝になつても益々其の權力を君主に集める方に傾いて來て、清朝では雍正乾隆の朝に、戰亂が起つた爲に、其の軍機を取扱ふ場所として軍機處と云ふものを置いた、所が戰亂が治まつてからも其の儘存續して、軍機處に詰合ふ大臣と云ふものは、唯天子の命令を奉じて、祕書役を勤めると云ふに過ぎない職務であるのに、それが到頭內閣よりも以上の實權を占めることになつた。詰る所政治上の最高機關と云ふものが、漸々獨裁君主の祕書役と云ふ意味になつて來た。さうして君主の權力と云ふものが益々大きくなつて來た。

此の獨裁制度が益々擴張される結果として、近代の清朝に於ては殊に各部の尙書を滿漢各一名づゝ、卽ち二名を置き、侍郎を滿漢各二名づゝ四名を置く、又地方官などに至つても總督と巡撫と並び置く省があるけれども、巡撫と云ふものは總督の下僚ではなくして、各々獨立した官であつて、共に天子に直屬して居る。それで何か事件があつて、總督と巡撫とが天子に上奏する時には意見が合すれば、會同して申出でるけれども、若し意見が異なれば又單獨に各々上奏することも出來る。同じ省城に居つて同一の地方を支配して居りながら、上官下僚の差別が無いのである。天子は如何なる官吏の上にも自分のみ獨裁權を有つて居つて其の大官は單獨で責任を負はない者がそこら中互に相牽制して、さうしてそれが皆天子に屬して居るのである。それであるから此の總督巡撫などと云ふ地方官は隨分大きな地方を支配して其の地位に居る時には非常な權力をも占め、榮華をも極めて居るけれども、是が唯天子の一片の命令で何時でも免官させる

ここが出來るやうな位置のものになつて居る。獨裁制度としては、この支那の近世、即ち明清以後の制度と云ふものが、理想的の完全なる者と謂つても宜いのである。

近世の天子の政治上の地位は此の通りであるが、天子の地位が斯樣になつた結果として、天子は天子の一家族の私有物でもなければ、貴族の仲間のものでもないのであるから、此の時からして天子の地位は、多少神聖侵すべからざるものゝやうになつて來た。それで天子の廢立若くは弑逆と云ふやうなことは、此の時から益々減じて來た。其の著しい徵候を云ふと、宋以來外戚と云ふものゝ權力が、大變に無くなつて來た。それで宋の時、天子が若かつた時に、母后若くは祖母たる太皇太后が、政事を見たことがあるが、それ等の人は皆賢明で、さうして外戚に權力を有たせなかつたと云つて居るけれども、是は單に其の人々が賢明であるのみならず、其の政治組織が自然にさう云ふ風になつて來たのであつて、天子が壯年になれば獨裁權を揮ひ、母后の一族でも權力を假さないのが常例となつて、政治は皆天子が自分の祕書役たる大臣等と相談してやると云ふことが當り前のことになつて來た。それで宋代まではまだ宰相を置いたが、北宋時代には制度も確立して居り、天子が十分なる宰相の黜陟權を持て居つた。南宋では秦檜、韓侂胄、史彌遠、賈似道など、一時權力が宰相に歸したやうな時もあるけれども、皆其人一代限りで權力を失ひ、外戚其の他家族的關係からして、權力を恣にした者は、宋以後は無くなつたのである。

例の支那に特有な宦官の狀態も、此際から變つて來た。宦官は貴族政治時代に、天子が名族、若くは外戚を抑へつけやうとする時に、いつでも權力を占めるので、後漢の時、唐の時は皆同一理由で盛んであつた。それから後には明の時にも折々專橫のものが起つたのである。併し後漢の時、並に唐の時、即ち貴族制度の時代には、一家族の家長たる天

子を其の召使たる宦官等が私有して居つた形で、其の權力の盛んな時には、天子も之れを如何ともすることの出來ないやうな姿になつて居つたのであるが、これは天子の地位が開放されて居らぬ爲で、明の時には同じく宦官が跋扈したと云つても、是れとは全く狀態を異にして居るので宦官が天子の寵を得て居る間は、非常な專橫を極め、跋扈することが出來るけれども、如何に專橫な宦官でも、一旦天子の氣に入らないと云ふ時になると、直ちに馘ねられ若くは貶されても、如何ともこれに抵抗することが出來ないやうな狀態になつて居つた。卽ち汪直とか劉瑾とか魏忠賢とかが、一時手をあぶれば熱するほどの勢焰が、忽ち消滅したのを見て知るべきで、唐の宦官が代々の天子を左右して、定策國老門生天子の語があつたやうなのとは全く異なつて居る。これは宦官のみならず、大臣、宰相でも同樣であつて明の時に大臣宰相の權力を占めたと云ふやうなものは、矢張り是れも單に天子に諂つて、天子の氣に入つて居る間だけの勢力であつて、一日でも天子の機嫌に逆ふと、直ちに退けられるやうになつて居つた。有名なる嚴嵩などが、其の最も適當な例である。

支那の近世史は、益々後になるに從つて、獨裁君主の力が强くなつて、君主の感情次第で如何なる事でも之を處決することが出來るやうになつて來たのである。それで天子の臣僚に對する位置は極めて安全であつて、斯う云ふ時代に天子の位置を覆すと云ふのには、元、明の末に人民の一揆騷動が大きくなつて、流賊となつて覆したとか、近頃の淸朝が革命亂と云ふやうな民間の騷動からして、天子が位を退くとかいふやうになるので、宮廷の事情若くは貴族の間の勢力でもつて位置の動いた古代とは、全く別の形になつて來たのである。それで又其の代り政治上の爭ひと云ふことも、段々意味が別になつて來た。唐以前の爭ひ、例へば漢の時でも、六朝の時でも、爭ひがあるとすれば、

それは貴族の間の權力の爭奪であつた。併し唐の晩年からして朋黨と云ふものが出來て、李德裕と牛僧孺の黨派が權力を爭つたことがある。それ等は多少貴族の權力爭奪とは色彩を異にして、各々政治上に於て好む所の人材を集めて、さうして權力を握ると云ふやうな形に變つて來た。それが北宋の時になると、益々此の政治上の朋黨が行はれて來て、殊に盛んであつたのは、王安石の黨派卽ち熙寧黨人と司馬溫公の黨派卽ち元祐黨人との爭ひであつたが、それ等は皆政治上の主張と云ふことに重きを置くことになつて、殊に王安石と其の反對黨の爭ひは、內實には私情の混ずる事があつても、其の大いなる名義は政治上の主張にあるので、其の間に支那では政治上に道德の意味を混ずると云ふことが古來の習慣であるから、君子とか小人とか云ふことで、反對黨を攻擊することがあるけれども、大體は政治上の主張に基いて居る。是れは支那近世の政治上の爭ひの一種新らしい意味である。

近世君主の獨裁權力の施行は、清朝に於ては帝位の繼承のことにまで及んで居る。清朝でも初めは皇太子を立てゝ居つたが、康熙帝の時に皇太子たる理密親王が失敗をした爲に、其の後には皇太子を立てなかつた。其の時に康熙帝に對して、隨分死罪を冒してまでも、皇太子を立つる方が古來の正當なる慣例であると云ふことを上言したものがあるけれども、天子は更に聞入れなかつた。それではどうして帝位の繼承者を定めるかと云ふと、天子の亡くなる時の遺言に依るのが極りである。若し突然の崩御などで、遺言の出來ない時の用意としては、宮中にある所の正大光明殿に正大光明と書いた額があるが、天子が自ら帝位の繼承者となすべき子の名を書いて、それを箱に入れて、其の額の裏に隱して置く。天子が卒然遺言なしに死んだ場合には、それを開いて見れば後嗣者が極まるやうになつて居る。それで天子

の皇子と云ふものは長男次男三男に拘はらず幼少の時から皆一樣に宮中の南書房といふ處で同等の教育を受け同等に滿洲固有の騎射をも學び、さうして同等の地位で生活して居つて、天子の遺言があるまでは、誰が相續者になるかと云ふことが分らぬやうにしてある。清朝の天子で歷代甚しい暗君の出なかつたのは、さう云ふ習慣の結果であつて、天子が自分の相續者を極めることにも努めて秘密主義の獨裁權を用ゐて、さうして皇子中の或る者に固定した位置を與へないやうにして居るのである。

前に言うた所を概括すると、君主の地位と云ふものは、初め貴族の中の一つの位に過ぎなかつたのが、萬民に君臨する超越した地位になつて、獨裁的になつて來たと云ふのであるが、併し此の完全なる獨裁制にも伴ふ弊害が無いではない。其の弊害に就ては此の附錄にも書いてある黃宗羲の明夷待訪錄に論じてあるので、天子が天下を私有すると云ふことになつたからして、之を失ふ時には又其の天子の自分の一身も全く失はなければならず、又自分の一家も悲慘なる最期を遂げなければならぬと云ふことになつて來る。それで天子は天下を私有して居るから、それに代つて天子になる者は前の天子を滅亡させると云ふことになつて來たのである。以前の貴族の相持ちの時には、或る貴族が位を失つて他の貴族が位を得ても前の貴族の家は家族制度で維持されて、亡びないことが出來るけれども、今度は天子と云ふ個人が天下を私有して居るから、朝代が易ると云ふ時には必ず亡びる。さうして別のものがそれを奪ひ取ると云ふことになつて來た。是は天子の家に取つても極めて悲慘な運命を來すべき原因になつて居ると云ふことを黃宗羲は論じて居るが、一方から云ふと又天子が何處までも獨裁權を握つて、官吏と云ふものが一つも獨立した權力を有たないのであるから其の官吏の職務と云ふものは皆無

責任になつて來ると云ふ傾きがある。それで清朝の政治などは前に言つた通り、獨裁政治としては理想的であるが、其の臣僚と云ふものには何人にも完全な權力が無い代りに、完全な責任も無いのである。是は支那が海外に交通をせず、一國だけで幸に明君賢相があつて、失敗もなくして居る時には、君主の地位を保つ方法として、極めて安全な者であつて、大なる內亂外寇でも起らなければ、是より安全な方法はないのであるけれども、一旦內亂外寇が起ると既にそれを支へる力が無くなつて來る。明末に於ても、其の地方官と云ふものが皆完全なる權力を有つて居らぬから、完全なる責任を負はない。其上に統兵官は幾人も同じ地方に置かれて權力が分たれ、尙其上に宦官が兵權を握つて天子の爲に監督するといふ名義で、統兵官を掣肘する。それで或る地方に一揆が起ると、自分の管下さへ荒らさなければ宜いと云ふので成るべくそれを他の管下へ移すやうなことばかり考へる。どうかすると流賊に賄賂までやつて、自分の管下から他の管下へ移すやうにして居つて、極力それを征伐して禍亂の根本を去ると云ふ考はない。甚しいのは賊を滅してしまへば自己の發達する前途がなくなるので成るべく逃して跡ばかりを追ふといふ方針を取る。其の間に流賊は雪を轉ばすやうに漸々に大きくなつて到頭抑へきれなくなつて、天子がそれが爲に亡びると云ふ事になる。天子が亡びると云ふ時になつても、殉死したものは唯だ一人の宦官あるのみであつた。詰り自分の召使が之に殉死しただけで、其の外の大臣などでも、禍に迫つて自殺したものもあるけれども、天子と共に職務に斃れたと云ふものは殆んど一人も無いのである。是は天子が權力を一人で握つて臣僚に全く權力を與へない所の結果である。清朝の乾隆嘉慶の間に陝西、湖北、四川三省に亙つた民亂が七八年も平定しなかつたのも同一の理由で、結局地方人民が官兵に便らず、自治團體の力で賊を

禦ぎ、各々堅壁清野の方法を取るまでは、鎭定しなかつたのである。其後清朝の晩年には、外國の關係が滋して來た。外國との關係が出來ると云ふと、十分に責任の無い地方官が外國人を相手にして、成るべく自己一身に越度のないやうにばかり計らつて居つて、國の爲に自分の地位を犧牲にして、其の發生したる事件を處理すると云ふ考がない。日本人などは支那人の此の無責任の態度を老巧とか何とか感心したりするけれども、其實結果は皆屈辱を來すに過ぎない。支那人でも李鴻章などは、いつでも軟弱に見えて、國論から攻擊されたが、矢張り不名譽を一身に引受けても、早く結末をつけることを好んだ、此人だけは他人の及ばぬ卓見があつた。阿片戰爭とか、英佛同盟軍の北清侵入とか、其の他近年に及んでも續々起つた所の外國交渉の難件は、皆當局大官が責任を完全に負はずして、さうして一時遁れをする爲に、其の事件が大きくなつて、到頭其の爲に國力が弱つて、清朝が滅亡するやうになつて來たのである。

支那の國が弱いと云ふけれども、實際軍事上の經驗ある人の言によると、何も其の兵卒の素質が惡るいと云ふのでなくして、唯だ責任の無い所の長官に支配されて居る爲であつて、兵卒の素質などは大變に優良だと言はれて居る位である。詰り此の獨裁專制と云ふ政治上の組織が、今日の支那の弊害を持ち來したのであつて、一方平時に於ける理想的の獨裁政治は、內亂なり外患に對する上に於ては、殆ど救濟の出來ないやうな弊害のある政治であつたのである。かの黃宗羲なども、此の國家の顚覆、卽ち明室の亡びると云ふやうなことは、君權の餘りに强大なる結果として出來たと云ふことを既に認めて居る。

今日でも清朝があのやうになつたと云ふのは、全くそれと同樣な原因であつて、殊に近年の事に之れを徵して見ても、西太后の末年以來、權力を益々中央に引締めることを努めて、さうして最後に宣統帝の

時卽ち醇親王の攝政政治の時には、有らゆる臣僚からして權力を奪つて、之れを近親の宗室にだけ集めることにした。又さう云ふ者でなければ政治上の責任を負ふものが無くなつた。其の結果何も關知せぬ幼帝が位を退かなければならぬやうなことになつて來た。支那の君主獨裁と云ふものゝ弊害は右の如き變遷を經て來たのであるから將來に於ても君主獨裁の政治が再興すると云ふことになると、又同樣の弊害に陷らなければならぬのである。

今日革命以後の實情は、一時又獨裁政治に傾かんとして居る樣子であるが、是は支那のみならず、昔佛蘭西の革命の後でも、矢張り同樣なことがあつたので、佛蘭西では、又一時は其の上に種々の軍事上の意味などが加はつて、共和政治が後戻りをして帝王政治になるまで轉化した。併し結局それでは前に革命をした根本の意味が無くなるのであるから追々國民が覺醒すると又共和政治に立返ることになつたのである。支那の獨裁政治の弊害も既に數百年來重なつて來たのであるから、一時之れが又獨裁政治に復ることがあつても結局それは永續すべき者ではないと思ふ。

それから又話が元に戻つて、此の中世の貴族の滅亡の結果として、一方に君主の權力が增加すると同時に、又一方には人民の力と云ふものが認められて來て居ると云ふことを忘れてはならぬ。唐の時までは、或る天子の系統が國を支配すると云ふことになると、一國の人民は其の天子の家族並に名族の奴隸と云ふやうな姿になるのであつて、其の人民には私有權と云ふやうなもの、それから身體の上にも個人の自由の權利を認められて居らぬ。唐が一統した時には、天下の田地は悉く之を朝廷の有として、班田の制度といふことで、之を人民の口數に割當てゝ、それを耕作させて其の地代を納めさせると云ふことになつて居る。支那のこの時代に於ける地租は、私有地から取る所

の稅ではなくして、國から借りたものに對して納める地代と云ふやうな意味を有つて居るのである。勿論其の天子の下に立つて、官吏たる所の位は、大體は貴族の私有で、制度の上では庶人も學問をして試驗に及第した者がそれに參加することを得ると云ふのであるけれども、事實之は行はれない。全く天子と貴族とが私有權なき人民を支配して居つたのである。所が宋の頃になつてからは、幾らか人民の私有權を認めるやうになつて來た。それで王安石が稅務の制度の改正を爲し、其の他政治上の大改革をしたのは、青苗錢といふのも、市易法といふのも、共に人民に貸附をして其の利息を政府が取ると云ふやうなやり方であつて、殊に市易法とは、人民の田宅、又は金帛を抵當とすることを謂ふのであるから、明かに規定として人民の權利を認めては居らないけれども、多少人民の財產私有と云ふものを認める意味になつて來たと云ふことが出來る。それから又力役の徵發と云ふものは、宋以前は差役と云つて、一年に幾日かは人民は力役の徵發をされるのである。官吏其の他資格のある家で特別に其の力役の服從を免ぜられたものでなければ、皆之れに從事しなければならぬのであつた。王安石の新法では貲產のある者は、錢を出して人を雇つて代理をさすることを許し、之を免役とし、又元來無役の者も錢を出すことにして、助役といつた。是は詰り財產と勢力との自由を幾分か認めるやうな傾きになつて來たのである。支那のことで、總て法理づくめで行く譯でないからして、十分に人民の權利を認めると云ふことは現はれて居らぬが、人民の實力を認めるやうになつて來たと云ふことは、爭はれないのである。

又もう一つ人民、並に人民に直接に關係して居る階級の勢力と云ふものが認められるやうになつて來たのは、其の起原は隨分古いことである。隋唐の時代に鄕官を廢してから、官吏が皆渡り者になつて來

た。それは有名な韓退之なども云つて居るのであるが、昔は官吏をする者は、皆各々自分の家があつて、官吏を罷めれば自分の家に歸つて暮らせるものであつた。それは家族制度が成立つて居り、名族が存立して居るからである。所が隋唐の時代からして既に官吏が渡り者になつて、官吏が官を以て自分の家とするやうになつた。官を罷められると何處へも歸つて行く家が無いやうな有樣であると云つて居る。それから韓退之は又或る時は、地方官などが比較的上官である所の縣丞には更に勢力が無くして、其の下に居る所の主簿尉などの方に勢力がある。主簿尉は人民と直接に關係して居つて、定まつた分職があつて、常に民事を取扱つて居るから、それの言ふことを何でも縣丞が聽かなければならぬ。それで愈々權力が、人民に直接して居る所の吏胥に移ることになり、上官は單に盲判を押すといふやうなことをも言つて居る。是は唐時既に其の萠芽を有つて居つたのであるが、後世になるに從つて是が益々盛んになつて來た。殊に元の時、金からしてさうであるけれども、元の時に蒙古人に支那全部を取られて仕舞つた。蒙古人は、殊に南方人をば信用しなかつたので、各行省の長官は勿論、各路府以下の地方官でも長官には、總て蒙古人若くは支那の中でも中原人を使ふ習慣であつて、南人は長官にしない。佐貳以下の低い官吏にだけは南方の者が使はれる。所が低い官吏に使はれて居つても、人民に直接して居つて、稅務の事やら何やら取扱ふと云ふ者が、自然に實際の權力を占めるやうになる。それで殊に元の時のやうに、種族の異つて居る者が長官になつて居ると云ふと、其の地方の人で人民に接觸して居る者が實權を握ると云ふことは免れないことであるから、益々低い方の官吏、詰り謂はゞ資格ある官吏卽ち品官でなくして唯々人民に接觸して居る未入流の吏役が權力を占めるやうになつて來た。尙又明の時になると、科擧で及第した者が官吏になる。

明の初めの制度は、必ずしも科擧ばかりで人才を取るのでなしに、學校で養成した者に役所の事務を見習はせて、其中から官吏になる者を拔擢すると云ふこともあるけれども、明一代の傾向は、末になる程、科擧で進士になつた者が總て官吏になるやうになつた。科擧の準備としては、詩賦を作つたり、四書文やら、策論を作ることを稽古する位であつて、實際民政の上に就ては少しも研究をしない。それが官吏になると、自分が少しもやつたことのない民政を扱はなければならぬと云ふことになる。それで益々官吏は、地方に居つても中央に居つても、盲判を押すと云ふことになつて、實際の權力を握る者は、事實品官の資格の無い吏役が、歷代の記錄を握つて居つて、時としては其の記錄を有つて居る株を賣買すると云ふやうな有樣で、それが實際上の民政を知つて居つて、權力を握ると云ふことになつて來た。此の胥吏の弊は、清朝のみならず、前からして屢々注意ぜられたことで、官吏が

直接に政務を視ないといかぬと云ふことは已に論究せられたが、近年に至るまで、其の弊害が十分に改革されなかつた。併し之れを大勢の上から見ると、吏胥に權力がありとは云ひながら、又一方からは人民に接觸する者に權力があるとも看ることが出來るのである。人民はそれが爲に尙非常な害を被つて居つて、胥吏が人民と官吏との間に蟠まつて居つて私腹を肥やすと云ふことは、弊政には相違ないが、詰る所人民に近い者が勢力が加はつて、上級の者に實際の勢力が無くなつて居る。それで人民の命脈を握つて居る者は、直接に人民に接觸して居る所の、資格の無い低い胥吏であると云ふことになつて居る若し其の人民に近い一階級を排除すれば、直に人民に勢力が歸着すべき瀨戶際になつて來て居つた。日本でも德川の末世には、どう云ふ者が勢力を占めて居つたかと云ふと、矢張り人民に直接に接觸をする所の下級の士族が勢力を占めて居つたのであるが、明治の改革と

云ふものは卽ち其の下級の士族で之れを成し遂げた。封建制度が破れて、其の下級の士族が衰へると、直ちに平民が頭を擡げて來て、今日の立憲政治を成し遂げたやうな譯である。支那の近世も矢張りそれに類似した形を有つて居るのである。尤も日本の士族よりかも支那の胥吏の方が、遙に弊害が多いのであつて、日本の士族のやうな教育も受けず、又士流としての品格を有つて居らぬのである、けれども兎に角人民に近附くものが勢力を得ると云ふことになつて居るから、是れがモウ一歩進むと人民が勢力を得るのである。併し現在ではまだ一般人民が其處までの程度に至つて居らぬ。今日でも地方で勢力を占めて居る者は、矢張り平民ではなくして、舊と仕宦の家柄であると云ふやうな者が鄉紳として、人望と勢力とを占めて居るので、一般人民には政治思想などは無いのであるけれども、併し唐以來の變遷を考へて見ると、人民の自由、若くは私人の權力が、絶對に認められない時代からして、漸々にその力が認められると云ふ時代にまで變つて來て居るのである。それで結局は人民が政治上の要素になると云ふことに變るべき傾きを有つて居る。所で黄宗羲の明末に於て書いた議論などでは、君主の權力が過大なのが近來の政治の弊であるから、之を昔のやうに、官吏と君主との間に權力の甚しい相違が無いやうな世の中に復さう、詰り昔の貴族制度に復さうと云ふ議論になつて居るが、これは時代の變遷と云ふものは、さやうに全然舊態に復ることを許さないといふことを考へない支那流の結論である。一體世界の大勢の變遷は、或る時には幾らか舊に復るやうな形があつても實は皆新しく形られた勢力の中心に向て、新らしい局面を開いて行くものであるから、君主獨裁政治の弊が極まつて、又貴族政治に復ると云ふよりか、他の政治に變ると云ふことが、大勢の自然であると見るが至當である。其處へ持つて來て支那は近來外國に接觸し、外國に

留學生をも出したが爲に新らしい時代の進歩した政論を聞くことになつて遂に共和政治と云ふやうな政體を知り始めた。そこで黃宗義などの考へた貴族政治に復るべき大勢が、今度は一轉して共和政治に向つて來たのである。

一方には人民の力が漸々伸びる傾きになつて來て居る。其處へ共和政治の思想が入つたのであるから、實はまだ人民の政治上の知識の準備としては、共和政治を組織するには十分ではないけれども、兎に角元の貴族政治に復るよりか、新らしい政治に入る方が自然の勢ひなので、それで今度の革命と云ふものが支那の狀態から見ると突飛なやうであるけれども、新しい局面に向つて進んで來たのである。是は大體世界の大勢であると云つても宜いから、此の間に一時の變化で獨裁君主のやうなものが又起つて、或は袁世凱のやうな人が帝王の位に卽くとしても、それは大勢には背いて居るので、今の所では漸々民主的勢力と云ふものが伸びて行き、さうして貴族と云ふもの、復興が到底出來ないと云ふ以上は、結局共和政治のやうなものに變るより他の途があるまい。勿論國の狀態に依つて、共和政治と云つても、元々同等な人民からして組立てられた亞米利加のやうな國の共和政治と、佛蘭西のやうな獨裁政治からして變じて組立てられた共和政治と、其の國々で特色があるのである。殊に佛蘭西のやうな一時獨裁政治の時に國民の非常な誇大なる野心を滿たしたことがあり、又軍事上で大に勢力を占めたことのある國などは、共和政治になつても國民は國力の盛んであつた獨裁政治の時代を思ひ出すことを免かれないので、それで今でも佛蘭西の人民の理想と云ふものは、時とすると軍事主義に流れ、帝國主義に傾き、さうして共和政治などを蹂躪せんとするやうな兆があるのであるけれども結局いろ／＼やつて見ても、共和政治より外に安全な政治が無いので、今も相續して

居るのであるから、況んや支那の如きは、當分軍事上で國威を輝かす見込も無し、又其人民には、國自慢の考が非常にあるとは云ひながら、又極めて平和を好む國民であつて、國力發展に對する激しい野心が無い以上、それから又或は軍事上で國威を輝かすことを、昔からして一種の政治上の戒めとして、之れを忌むやうな傾きのある國民である以上は、佛蘭西ほどに獨裁政治に對して之れを渇仰する情も無い筈であるべきのみならず、袁世凱にしても、其他の現存人物にしても、又軍事上の天才があつて、大に國威を輝かし、積弱を囘復すべき見込がない處から、結局は共和政治で落着くと云ふことは、大勢上豫め判斷することが出來ると思ふ。

二、領土問題

支那が現に遭遇して居る問題の中、頗る困難な者の一は領土問題である。革命軍の初めて起つた時、其の中心たる人々は、まだ此の問題に注意する程の暇も無かつた時に、一人の年少の學生があつて、早くも此に着眼した。其人は、湖南の出身で盛先覺と云ふ、札幌の農科大學の留學生であつたが、清朝の末年からして、既に支那の異種族統治問題に注意して、獨學で蒙古語などを研究した。革命亂の起ると同時に支那へ歸つたが、革命軍が十分に成功しない中に、早くも此問題の爲に一度日本へ來て、自分を訪問して、此領土問題に就て、どう處分したら宜からうと云ふことを相談した。勿論此の人の考は此の革命亂の爲に、從來支那が異種族を包含した絶大の領土を有つて居るのを土崩

瓦解さしてしまふのが殘念だから、其の統轄を引續けたい、それに就いては、どうかして西藏の達賴喇嘛に關係を附け、其の力でもつて西藏並に蒙古問題の處分をしたいと云ふので、達賴喇嘛に會ふが爲に西本願寺の法主の紹介を得たいと云ふ考であつた。是は固より支那人の立場として、殊に革命亂が未だ纏まらない最中に、斯の如き事に注意すると云ふことは、餘程其の卓見を現はして居るものである。自分は今の所でまだ何も實際上、着手すべき手段もあるまいから、兎に角異種族を統轄するに就て、漢人が之れを一視同仁に取扱ふと云ふことを、革命政府が早く宣言しなければならぬ。隨分革命亂の最初に於ては、滿洲人を讎敵として之れを虐殺したと云ふことなどもある次第であるから、さう云ふ事から異種族の感情を害すると云ふことは不利益であらうから、異種族を從來の清朝が待遇したより、決して惡い待遇をせぬ、其の安全を圖ると云ふことを宣言するに如くはあるまいと云ふことを言うてやつたことがある。其の宣言書も自分に書いて吳れと云ふ賴みであつたけれども、それは自分が書くべきものでないと思つたから承知しなかつた。それが國へ歸つた頃、果して其の主張が行はれたかどうか知らぬけれども、五大民族の共和と云ふ議論が支那に於て起つたのである。今日でも此の五大民族の共和と云ふことは唱へられて居つて、袁世凱の新政府でも其の主義を放擲して居ると云ふことはなからうと思ふけれども、併し事實上漸々異種族の統轄力を失ひつゝあるやうである。是れは誠に已むを得ぬことであつて、何れの國でも內部に大變な變革のあつた時には、さう云ふ運命に會ふものである。現に日本の明治維新の際に、內部の政權を握る者に變化があつた時も、之に類似した事が出來て居る。卽ち一方に於て露西亞との間に國際問題で懸案になつて居つた所の樺太を一時抛棄することになつた。征韓論の起つた時でも、之れに對し

て有力な反對論があつて到頭行はれなかつた。琉球の處分に就いても、當時木戸公などの如き最も深慮ある政治家と謂はれて居る人が、矢張り内治に全力を注ぐことを主張して、琉球問題を迅速に解決しやうと云ふ考は無かつたのである。併し其の當時日本の維新の精神は、暗暗裡に民族の發展を意味するやうな潮流があつたので、既に我が領土でもない朝鮮を征伐するといふ議論も起ると云ふやうな風で、まだ解決もせられない琉球の爲に、其の人民が臺灣で虐殺せられたからと云つて、臺灣の生蕃征伐をも起したのである。斯くの如く一方に於て内治を專らにすると云ふ議論が行はれて、有力なる領土を拋棄すると云ふ傾きがあつたにも拘らず、一方に於ては又民族の海外發展の踏出をするやうな傾きも見えて居つたのである。所が今日の支那に於ても、日本の當時の一面の有樣である所の、專ら内治に傾く所の議論が益々勢力を占めなければならぬやうな情勢になつて來て、熊希齡氏の施政方針にも、其の意味が見はれて居るが、併し支那民族の發展として、他の一面に於ても亦日本の維新當時の他の一面の如き状態がありや否やと云ふことは、今日疑問である。元來支那の領土は、從來に於ても支那の國力に對しては或は過ぎて居る位龐大であるから、今日に於て此の民族發展論が勢力を得べき理由がないかも知れぬ。五大民族の共和と云ふのも、單に保守的な、從來の領土を維持したいと云ふ考であつて、一方に於て支那民族の發展を企圖すると云ふやうな積極的の思想は、まだ出來て居ないのではあるまいかと思ふ。此の問題の結局はどうなるか、或は支那の現状に取つて、之れをどう處置すれば宜しいかと云ふことを決するのは隨分重大な事であつて判斷の標準として、此の問題に關する古來の沿革を一通り知る必要がある。そこで之れを歷史上から考へると、二樣に看ることが出來る。一つは卽ち異種族間の感情問題である、又一つは異種族

が生活して居る所の廣漠たる領土を支配する政治上殊に財政上兵力上の問題である。

先づ其の異種族間の感情問題を考へて見ると、支那で著しく領土の發展をした時代は、古くは秦漢の時代に始まつて居るのであるが、是は二千餘年も以前の事であつて、今日とは種々事情を異にする場合もある。併し或る點までは其の時代の事情を今日に引合して考へられることもある。此の時は其の重もなる異種族の敵、卽ち匈奴との間の感情問題であるが、最初の漢民族と此の匈奴との衝突點は、矢張り風俗習慣の異る所からして、感情に於て甚しく融和し得なかつたのである。漢から匈奴へ使者に行つて反つて匈奴の有力なる參謀になつた中行說と云ふ者が說く所を見ると、匈奴の風俗と支那の風俗と云ふものは、全然異つたものである。漢民族が貴ぶ所の繒絮食物なども匈奴に取つては旃裘の完善で、湩酪の美なるに如かずとし、其風俗なども匈奴が壯者を尙び、父兄が死んだ後其の妻を取て己れが妻とするにも、それ〴〵理由がある。衣帶の飾などは、人種を弱くするばかりで、何の效能もない。固より匈奴の良いとして居ることが、漢民族には詰らぬこともあるが、此の兩民族は全然感情を一にすべきものでないと云ふ見方であつた。それも事實であつたので、此の兩民族が雙方とも同時に民族發展の時期に際會して、各々盛んな潜勢力を有つて居つたから、玆に一大衝突を起したのであるが、其の後數十年間繼續した衝突に依つて兩方とも感情が却つて融和される傾きにもなつて來たのである。卽ち漢から匈奴の方へ降參して行つた者が匈奴の習慣に從ふと同時に、又匈奴の方に漢の習慣をも傳へ、それから又匈奴の方から漢に降參をして來た者が、漢の習慣に從ふと同時に、又其の性質の良い所も認められて、金日磾などの如く漢の武帝の遺言を受けて、霍光と共に跡に遺つた幼君を輔佐する役目にまで命ぜら

れたものもある。結局は漸々支那と和睦をして、支那から公主などを嫁に貰ふことになつて、兩方の習慣が交換されて、其處に感情を融和する點が見出されて來た。前漢の宣帝以後、呼韓邪單于などの頃から、匈奴は漢に對して害を致さなくなつて異種族間の問題が一時落着した。併し是は漢が領土として異種族を支配し、異種族の土地を所有するのではなくして、異種族の獨立は其の儘に保存されて、唯其の間の衝突を避けたに過ぎないのである。

其の後になつて又支那で大きな領土を支配して、國力が盛んであつて、さうして異種族と關係を有つたのは唐であるが、此の時は漢とは又幾らか樣子が異つて居る。唐は其の始めて興る時に於て、既に異種族との調和が成立つて居つて、支那を一統するに就ても、既に異種族の兵力を借用して居つたのである。それで唐の時には異種族の者が、唐の天子の親兵にもなり、生きては唐の天子の護衛になり、死んでは唐の天子の陵に陪葬する所の墓を賜はつて、非常に優待を受けて居る。支那に於て古今を通じて唐の時ほど異種族を優待もし巧みに利用もした時は他に無いと謂つて宜いのである。それで或る時は隨分大いなる征伐をも起して居る。例へば唐の太宗が大軍を起して、高昌を討滅し、又高勾麗の征伐を爲し、引續き高宗が百濟並に高勾麗を滅ぼしたこともある。併し其の滅ぼした國々をも、矢張り其の國王の子孫などは之れを優遇して、漢人同樣、或は夫れ以上にも優遇をして、さうして異種族との融和が極めて巧みに出來て居つた。西北方に於ても、吐蕃突厥などに遠征軍を發して、或は成功し、或は失敗に了つたこともある。或る部分でさう云ふ衝突があつても、全體に於ては異種族の待遇は最も良かつたと云つてよいので、支那の内部から興つた國として、唐朝ほど巧みに異種族を懷柔した時代はない。尤も國の興る時には、多少何時でも斯う云ふ傾きがあるので唐ばかりに限らず、明

の時などでも幾らかさう云ふ事があつて、明の興つた初めには、明の太祖なども暦の改正の爲には中央亞細亞の人などを使ひ、又、元の天子を逐ひ斥けて居るにも拘らず、蒙古人を、殊に宮中の宦官などに其の儘使つて、極めて天子と親昵な位置に置いたことなどがあるが、併し此は其の初年にのみ行はれて、唐の如く始終を通じて外國人を優待したと云ふことはないのである。

以上は支那の内部から興つて統一した方から考へたのであるが、異種族から入つて支那を統一したものゝやり方は、又どうであつたかと云ふと、それの重なのは遼、金、元並に近頃の清朝である。けれども遼、金などは實は此の問題の材料としては幾らか乏しいのである。初め契丹の興る時には、矢張り韓延徽などの如き漢人の重もな謀臣が居つたのであるが、其の盛んな時は、漢人の立てた宋と對立をして居つたのであるから、大體は元來の漢人は、宋の方に集まり、異種族たる遼などは、矢張り其の種族のものだけで國を立てゝ行かなければならぬやうな傾きがあつた。さうして稀に支那人を用ゐたことがあるに過ぎない。金に至つては最も其の傾きが激しかつたので、此時に於て殊に異種族の人の思想として著しい事の起つたのは、金人の間に國粹思想の起つたことである。金の世宗などは、專ら其の考であつて、この異種族が漢人の風俗習慣にかぶれると、それが爲に弱くなつてしまふ、成るべく漢人の風俗習慣にかぶれないやうにするのが、自分の民族の本質を維持し、其の强さを保つて行く所以であると考へた。元來金は其の起つた最初からして、餘り漢人の參謀を用ゐなかつたのに、中頃斯う云ふ天子があつたので、金一代は比較的漢人と融和しない政策に於て一貫して居る。

其の次に元になつて、蒙古から起つて支那を一統したのであるが、是れも其の民族政策の出發點は矢張り餘り支那の文明にかぶれない

方であつた。最初元の太祖が興つた時、既に支那即ち金に侵入をしたのであるが、其の時に勿論金人で成吉思汗の參謀になつた耶律楚材などのやうな有名な人もあつたが、兎に角蒙古人の思想は、矢張り蒙古人の國粹を維持して行くと云ふ考が强かつた、或人は、支那の土地を取つても、漢人は國に益がない、厄介なものである、漢人は穀物などを作つたり何かして、土地を荒らしてうるさいものである、こんなものは皆打殺してしまつて、其の土地を野原にして、蒙古人が其處を牧場にしてしまふが宜いと云ふ考を眞面目に有つて居つた。此時此の如き政策の爲に虐殺さるべき幾百萬人民の生命を濟つたのが耶律楚材であるが、耶律楚材が成吉思汗に說て、漢人もさう役に立たぬものではない、それには役に立つ證據を見せて上げやうと云ふので、成吉思汗から漢人の土地を任せて貰ひ、さうして一年間に銀五十萬兩、絹八萬匹、粟四十萬石と云ふ租稅を上げて見せた。租稅が上つて利益があると云ふことが分つて見ると、成る程漢人と云ふものも蒙古人の爲に役に立つものであると云ふことが分つたので、それで支那の土地を牧場にすると云ふことも成立たなかつた。併し兎に角其の時からして已に蒙古人は蒙古人のやり方をもつて、それで宜い、支那人は支那人のやり方でやつて行くべきものであると云ふ考があつた。殊に蒙古人は支那本部を征服する前に、既に中央亞細亞から歐羅巴に掛けての諸國を早く征服したが、是等の國には支那に劣らない所の一種の文明を有つて居つた。それで蒙古人は支那へ入つて來ても、遼、金などが全く野蠻人から支那へ入つて、支那の文明に眩惑すると云ふやうな傾きは無かつたのである。蒙古人は支那人とか或は外の國から考へれば、文字も無く、遊牧的生活を送つて居るけれども蒙古人自身はそれで立派な長所があると信じて居つたのである。それから又中央亞細亞や歐羅巴などの文明國を討ち平らげた所からして、

それ等にも特色の文明があると云ふことを見て居つた。それから支那へ入つて來て見ると、支那にも夫れ相當の文明があると云ふことを認めた。かく是等の國は各其の特色の文明があるので、其の特色で治むべきものであつて、是は別々に取扱ふべきものであると考へた。それで蒙古人が亞細亞を一統して居つた時には、人種を分けて、蒙古を一つとし、色目と云ふ卽ち中央亞細亞などの人種を一つとし、それから漢人を一つとし、斯う三樣に分けて居つた。漢人の中で又漢人と南人とを分けて、金の國から入つたものを純漢人とし、宋の國のものを南人と稱した。勿論其の間に幾らか階級を附ける思想もあつたので、蒙古人をば之れを天から降つて來た世の中を一統すべき貴い人種として居つた。其の次には何を貴んだかと云ふと、色目であつて、中央亞細亞から歐羅巴に掛けての人種を貴んだ。それから漢人を幾らか下等に見て居つた。又漢人の中でも宋から入つて來た南人を最も下等に見て居つて、之れを蠻子と云つて居つた。元の時代に高麗王が代々元の公主の婿になる例であつたが、高麗は矢張り漢人の一種として待遇されるので、高麗の忠穆王は色目に列して貰ひたいといふ上表をしたことがある位である。宋人は蒙古人を北虜だと考へて居るが、蒙古人は矢張り又宋人を南蠻と考へて居つたのである。兎に角さう云ふ風にして蒙古の事は自分の一族の者が之れを支配する。それから漢人の事は耶律楚材などが之れを支配する。それから色目人の事をば、鎭海と云ふ人に支配を命じて、さうして各々別々に之れを管轄して居る。それで支那全部を統轄した時でも、矢張り其の各々の風俗習慣に依つて之れを治めたので、元代の裁判の判決例のやうなものが、元典章と云ふ本に現はれて居る所から考へて見ると、漢人と色目人との間に訴訟があつても、漢人は漢人の法に從ひ、色目人は色目人の法に從ふと云ふことにして居つたのである。是れは實に漢人

と異種族とを同時に治める方法としては、一の新らしいやり方で、從來漢代とか唐代とかのやうに、異種族との關係は兩方互に風俗習慣を共通するやうな所まで折合つて、さうして融和するので、風俗習慣の相違から來る所の惡感情を除き去つた結果、兩方か仲好くなると云ふやり方とは全く違つて、今度は各々其の特色を保持せしめたまゝに、それを統轄すると云ふことに變つて來た。是は異種族統治上から云へば、一つの進歩とも言へば言ひ得るのであるかも知れぬ。反つて蒙古などのやうな極めて單純な文化狀態に在るものが、異種族を統轄するに就て、自分の習慣を他に強いないのと、他の方にも一種の長所があると云ふ所を認めると云ふ所から考へ出したから、容易に行はれたのであるかも知れぬ。

清朝になつては、女眞即ち滿洲と云ふ異種族から興つて、さうして蒙古を取り、支那を取り、それから進んで西藏を支配し、更に又一部の土耳其人を支配するやうにまでなつたのであるが、其の統治の方法は大體に於ては蒙古人の方針と變らないやうである。併し民族の自重心即ち我が特色を保持する考に於ては、蒙古民族よりかも遙に劣つて居る點がある。滿洲人の理想とする所は、まだ支那に乘込まない中から、既に金の世宗の國粹保持主義を理想として居つたのである。併し蒙古の如く支那を平らげる前に、中央亞細亞以西の文明國を先づ平らげて、さうして支那の文化に驚かないまでの素養を造ると云ふことが出來なかつた。矢張り滿洲の山中で野蠻の生活をして居つたものが、一足飛びに支那の都に入つたので、其の文明に幾らか眩惑せざるを得なかつた。それが爲に自分の國粹を力めて保持すると云ふ精神は、殊に乾隆帝の時代などに於て盛んに起つたのであるけれども、其の實其の議論を主張する所の乾隆帝と云ふ人が、既に支那の文明にかぶれて居る所の著しい一人であつた。詰り支那の文明を標準

として、其處まで滿洲人の文化の度を達しさせたいと云ふ考が本になつて居る。それで其の後になつて全蒙古人を支配し、一部の土耳其人を支配し、又西藏をも支配しては居るが何時でも支那の文明が本位になつて居る。清朝でも康熙帝の時などは反つて歐羅巴人を盛んに利用して其の學問藝術を輸入しやうと務めたのであるが、それさへも乾隆帝以後に至つては、其の精神も衰へて、矢張り支那の文明を基礎にして、總ての他の文明をば單に副食物として之を取ると云ふ位に過ぎなかつたのである。それで蒙古人を支配する上に就ては蒙古の習慣を重んずると云ふことで別に理藩院に於て蒙古人を支配する規則を拵へて居る、土耳其民族即ち回々教人を支配するには、又回部則例といふやうな特別の規則を作つて居る。西藏なども詰り其國の習慣たる宗教政治を其の儘持續して、之れに監督官をやつて置くに過ぎない位の仕方であつたのであるけれども、蒙古時代の如く總ての文明の民族を平等に扱ふのみならず、寧ろ支那の文明を、西域などの文明よりかは重んじない傾がある程な、思ひ切つた思想は無かつたのである。それで滿洲人は支那を統轄して居る二百餘年の間に、漸々支那の文明にかぶれてしまつて、遂には支那人と全く變らない所の感情を持つやうになつて來た。但だ清朝に於て異種族を支配すると云ふ考は、漢人を本位として立つて居る國が、他の異種族の者を懷柔して、領土をも擴め、種々の國語を使つて居る人種を統轄して居ると云ふことを以て誇りにしやうと云ふ考であつたので、蒙古人の如く種々なる民族を皆自分の手で支配して、各其の特色を持たせながら、世界を統一して行かうと云ふやうな雄大な規模が無かつたと云つても宜い。

東洋に於て異種族間の感情を基礎にして、大なる領土を統轄した思想と云ふものは、以上に述べたやうに、或る文明國を基礎として、さう

して他のものをそれに同化させやうと云ふ考の下に起つたのと、それから各種族の文明を獨立させて、さうして、それを統一しやうと云ふ考から起つたのと、二つに分けて見ることが出來るのであるが、今日以後に於ても、支那が若し五大民族を統一しやうと云ふことゝになると、此のどちらかを採るより外に致し方がないのである。所が今日の革命と云ふものは、勿論漢人を基礎にして起つた。縦令革命を起した所の南方の者が敗北して、さうして却つて横から出て其の功績を奪ひ取つた袁世凱が、愈支那を支配することになつたにしても、兎に角漢人本位で成立つたのが今回の革命の本質である。此の漢人本位で成立つた新らしい國が、どう云ふ意味でもつて五大民族を支配しやうかと云ふ事を、一つ考へて見なければならぬのである。南方の革命軍が起つた初めは、殊に其の革命思想を吹込んだ有力なる人として、章炳麟などの考は、一方に於ては漢人が曾て支配した土地を皆恢復して之を統轄しやうと云ふ考も無いではなかつた。例へば安南の如き、朝鮮の如き、さう云ふ土地までも恢復しやうかと云ふ考もあつたのである。けれども兎に角革命と云ふ理想を強く南方の人々に吹込む根本としては、詰り滿洲人に對して反抗すると云ふのが一つの主張であつた。それで最初の間に於て革命軍は滿洲人の虐殺をも行ひかねないやうな勢ひであつた。今の五族共和論が起つて、最初の理想が幾らか變化して居るけれども、併し漢人と云ふものが自己の文明を誇り、自己の能力を頼む餘りに縦令五大民族を統轄しても、五族各々平等なものとして、それ等の風俗習慣若くはそれ等の文化を尊重して、さうして自分と同等のものとして扱ふと云ふ考になり得るや否やと云ふことは餘程疑問である。詰る所漢人を中心として、それに外の民族が附屬して、統轄されて行くべきものであると云ふやうな理想になつて居るに過ぎない。それで今日でも一方には五

族共和と云ふ說を立てるけれども、北京に在る中央政府に於ては、重もにどう云ふ人を使つて、其の上に政府が成立つて居るかと云ふと、悉く漢人である。勿論滿洲八旗などの殘つて居るものに對しては、それを支配する爲に幾らか滿洲人を都統などの官に任命して居ることもあるけれども、今度新らしく興つた國の政治と云ふものを、異種族と一致してやつて行かうと云ふ考はないのである。古の蒙古人などのやうに、大なる領土を統轄するに就いて、其の異種族に各々其の特長を發揮させて、さうして公平なる眼を以て之を支配して行かうと云ふやうな、雄大なる規模を持つた人は到底今日の中華民國の主たる人物間にはないことが明かである。さうして見るとどうしても漢人中心と云ふやり方である。其の結果としては、自然に他の各種の民族がそれに對して反抗心を起して、各々獨立の考を有つやうになることは、是は已むを得ざることであつて、滿洲人の如く既に大多數を擧げて支那の內地に入つてしまひ、さうして自分の元の根據地は、却つて支那の移民の爲に奪はれてしまつて居ると云ふやうな民族に在つては、已むを得ず支那人の中に同化して、さうして其の生存を圖らなければならぬのであるけれども、蒙古とか西藏とか、それから土耳其種族と云ふものになると、從來清朝の時に於て支那に服從して居つた所の、自分の頭の上の重みが緩むと同時に、忽ち獨立心を起すのは當り前のことである。元來が蒙古人でも西藏人でも支那に服從して居つたと云ふのは、卽ち滿洲の天子に服從して居つたので滿洲の天子と云ふ者が統一して居ればこそ、之に服從もして居るのであつて、漢人が打立てた國に服從すると云ふ考は最初から無かつたのである。それで滿洲の朝廷と云ふものが倒れると同時に、各異種族の領土と云ふものは解體してしまふのが當然の事である。蒙古人が獨立を唱へ、西藏人が英吉利に賴ると云ふやうなことは、當然是はあ

り得べきことで或は今の內蒙古のやうな支那の本國に近い部族或は北京などに來て始終生活して居つた者が、それ等の感情からして、急に離れにくいと云ふやうなこともあるであらうけれども支那の政府と云ふものが益々民主的に傾いて行くと同時に、益々異種族の統轄力をば失つて行くべき筈である。今日に於ては五族共和と云ふことも事實上殆ど意味が無いのであつて、或は袁世凱などが一時の政策として、蒙古の王とか西藏の喇嘛とか云ふ者などの機嫌を取つて、さうして個人的に其の關係を繫ぐと云ふことは出來るかも知れぬけれども、大勢は既に解體する方に傾いて居るのである。さうして是等の民族と云ふものが、若し自分で獨立して國を成し得れば格別であるけれども、成し得ない以上は、詰り近い所の强國に賴つて、さうして其の國を一時成立たせると云ふやうな傾きを生じて來る。即ち外蒙古が露西亞に賴り、西藏が英吉利に賴ると云ふやうなことになつて來るのである。尤も支那と云ふ國は異種族の領土を統一するに就ては、どの時代に於ても極めて寬大な取扱をしたものである。歐羅巴などの諸國が殖民地を有つて、さうして其處の各種族を統轄するのに、自分の本國の利益、即ち詳しく言へば、本國の經濟上の發展などを目的とするとは違つて、支那人は異種族の土地を包括して其版圖とするに就ては、更に經濟上の利益と云ふことを考へない。何れ不利益と云ふことを初めから覺悟してやつて居る。それで外國から種々貢物を持つて來ると、必ずそれより以上の賞賜と稱して返禮のものをやると云ふやうな例になつて居る。蒙古人でも或は其の他の人種でも、自分の獨立と云ふ多少の名譽心を捨てゝ、さうして支那の封爵を受け、永く之に服屬して居つたと云ふのは、皆此の經濟上の利益から割出されて居るのであつて、支那は宗主國としては他の國に見難い程寬大なる國である。それで今日以後西藏が英吉利に支配され、そ

れから蒙古が露西亞に追々支配されるやうになつて來ても、それ等の國が果して從來の支那くらゐに優待をし、永く續き得るかどうかと云ふことは疑問であつて、或は其の土地に産業上の利益があるとでも云ふことになれば、其の土着人にして勢力の有る者をば優待して、其の土地から利益を收めると云ふことで埋合せをしてやることが出來るかも知れぬが、餘り其の土地に利益があると云ふのでもない處に於ては、昔の支那くらゐ寛大、寧ろ放漫に近い寛大であつて、少しも干渉がましいことをしない政策を續けると云ふことは、餘程むづかしいかも知れぬ。其の時になつて、昔支那に支配されて居つたことを思ひ出して、又支那に賴りたいと云ふやうな考が出て來ぬとも限らない。併しさうなつて來ると、それ等の各異種族の人民が支那の文明に同化すると云ふことも甘んずる時期になつて、さうして東亞細亞の方は殆んど皆一つの支那民族と云ふものになるやうな姿に變る時でなければ、再び漢人が異種族を統轄すると云ふことは、漢人の方から考へても、又異種族の方から考へても出來ぬことゝ思ふ。どちらかと云へば當分は是等の種族の者が一時皆支那から解體すると云ふことは自然の成行きである。五大民族の共和と云ふことは、一時の權道としては大に面白いやり方であるけれども、結局是は實行の出來ぬ所の政策である。

以上は異種族間の感情問題から見た考へやうであるが、一つは支那を中心にして立つた國の政治上の實力、即ち兵力とか財力とか云ふものから考へると、今日に於て異種族統轄と云ふことの支那に取つて不可能なることが分る。是も古く漢代に溯ると云ふと、漢は匈奴のやうな强敵を擊退けるのに勉めたが、是は勿論異種族を統轄すると云ふ意味ではなしに、單に之を邊塞附近から逐斥すると云ふ目的であるが、之が爲に絕大の努力を要して居る。それから漢の時には南方

に於ても漸々領土を擴げて行つた。是等の土地は擴げるに從つて、それ相當の利益も擧つて來べき筈の處であるけれども、但し此の域外發展と云ふことの爲には實に莫大なる費用を要したのである。幸ひに漢の武帝が非常に英明な人で、又其の時には將軍にも衞青、霍去病以下、有力な人物があり、長い間の訓練で弱い支那人も隨分良い兵士になつて、邊境の防備も匈奴に乘ずべき隙を與へないやうになつて來たのである。それにも拘らず、武帝の晩年は、費用の爲に追はれて、有らゆる新稅を起し、有らゆる專賣事業をやつて、それでも殆んど國力が續かない位に疲弊をした。漢民族の發展としては、古來漢の武帝ほどに大成功をした人は少ないにも拘らず、又漢の武帝の域外發展の政策と云ふものは、支那では代々國力疲弊の上から一つの戒めになつて居る位である。唐の時に此の域外發展をやつたのは、重もに初代の最も盛んなる時に止まつて、唐は其の後に國內に於ても兵力を擁して、朝廷の命令に服せない藩鎭などが殖えて來たので、中葉以後は域外發展と云ふことも全く絕えてしまつた。國の初期には何時でも經濟の餘裕を生ずるものであるから、漢でも文景兩帝の後、唐でも高宗の頃などに域外征伐をやつたのであるが、唐が域外發展の爲にどれだけ國力の疲弊を來したかと云ふ證據は、却て漢ほど明瞭に分らない。併し回紇種族などを兵士として連れて來て、それを利用した結果と云ふものは、隨分それ等の者が驕慢なのに苦しんで、或は結婚政略を以て慰撫したり、或は遙に吐蕃の邏娑へ使者をやつたりして、異種族との融和を圖つて居つたのである。元の代に於ては、其の大なる領土の中心は支那に在る譯ではない。最も經濟力の無い蒙古に中心を置いて、さうして經濟の力の有る支那とか西南亞細亞とか云ふものをば支配して居るのであるから、其の大なる領土を有つた爲に、其の國力の疲弊と云ふことは明かに現はれて居らぬ。併しそれにして

も元の世祖忽必烈が少しでも海外發展をする、即ち日本を征伐するとか、瓜哇を征伐するとか云ふ事をやると、非常に國力の疲弊を感じて、西域から來た阿合馬と云ふ宰相は、種々の專賣事業を起して非常な負擔を人民に課し、それを軍費に使つたのである。さうして元の末年には結局經濟力の無い處を自分の根據地として居るのであるから、經濟力の有る地方が之に對して叛亂を企てると、國力が支へきれぬと云ふ譯になつて來る。元は世祖以來、成吉思汗が平定した西域の諸國をば、實際己に其の領土として支配して居らぬ、元の宗藩國の中で元と最も仲の好い伊兒汗國などに於ても、單に婚姻の關係を續けて居ると云ふだけで、事實上之を支配しては居らなかつた。時としては同族の中で仲の悪い國例へば太宗の裔たる海都などは屢元と戰ひを交へた位である。元の末になつて元が支配して居る土地の東亞細亞の一部の方では、最も經濟力の有る即ち支那の江南地方が盛んに叛亂を惹起したので、大都即ち今の北京さへも持ち切れずに、到頭蒙古に逃込んだのである。是は詰り中心力の置き所が違ふのであるけれども、即ち過大なる領土を有つて居ると、其の經濟力が漸々薄弱になつて來ると云ふことは明かである。明の時はもう支那本部の漢人の方にだけ立籠つて居つて、異種族に對しては之を防禦するに止まつたのであるけれども、明の國力も結局其の防禦に勞れて、最後には日本との戰ひ並に滿洲防禦の爲に非常なる出費をして、其の爲に內地に叛亂が起つて、其の內亂と外寇との爲に亡びると云ふやうなことになつた。

それから清朝は最初の間滿洲からして蒙古の一部分を取つて、次に支那を取り、更に外蒙古、新疆、西藏と云ふ方に漸々發展を爲し得たと云ふのは滿洲のやうな文明の程度の低い處に、平民同樣の生活をして居つたものが支那の都へ入つて、從來の簡素なる生活を幾らか維

持して居るから明の如く宮廷の費用が更に掛らない。是はよく清朝の盛德として、清朝人が屢稱揚した所であるが、初め康熙帝が宮廷の中に在る十三衙門を廢して、それから宮廷の費用を非常に節約して、數十分の一と云ふものに縮小し、宮廷で使つて居る宮人、宦官は、明の時の十萬餘人を四五百人に減じたと云ふやうなことで、兎に角從來の滿洲に於ける簡素なる生活を幾らか維持して居つたので、其の初期には屢戰亂が續いても、其の儉約の力でもつて到頭支那を十分に統一することが出來るやうにもなり、又康熙年間は中央政府の收入と云ふものも非常なる增加を來さぬのであるけれども、矢張り儉約の力でもつて、康熙帝が蒙古を親征し、國力の發展をするだけの基礎は成し得たのである。乾隆帝の時に至つては十全記と云ふものを自分で作つて、さうして國力發展をやるに就いて、失敗なしに大領土を支配するまでに立至つたと云ふことを誇つて居るのであるが、是は實を言へば皆財政に餘裕があつたからである。支那と云ふ國は戰亂さへ二三十年以上も無ければ、其の國土が非常に肥沃で、物力が豐富であるが爲に、財政に餘裕を生ずる國である。戰亂が續けば其の爲に荒らされるので、一時疲弊をするけれども、戰亂が止みさへすれば、急に經濟力の發展を來すことは、何朝の時代でも同樣である。康熙六十年の間に、天子は割合に儉約に暮らして居つたのであるが、其の間に於て人民の方の富力大に增進して居つたので、末年已に國庫に數百萬の儲蓄を生じた。康熙帝の次の雍正帝は又非常に財政上の緊肅に長じた人であつて、從來官吏の懷ろに入つて、人民の利益にもならず、又朝廷の收入にもならなかつた、所謂中飽といふ事を禁じて、皆之を朝廷の手に收めることにしたので、財政は急に豐かになつて、其の末年には銀六千餘萬兩の剩餘を生じた。其次の乾隆時代は清朝の極盛に達した時で、人民の富力も最上點に達して居つて、國庫の收入は餘

る一方であるから、此時代には幾度も征伐をやつた。例へば新疆を開くに就いて二千餘萬兩を使つたとか、四川の奥の兩金川の土人を征伐するが爲に七千餘萬兩を使つたとか云ふやうなことで、征伐のある毎に大變な銀を使つて居るけれども、其の度毎に財政の缺乏を告ぐると云ふことは決して無くて、何時でも國庫に餘裕があつた國庫に餘裕があつた爲に、内部に於ける兵隊の給料をさへ増すと云ふことになつたのである。此の如く國の富力の最上點に達した時であつて、十分に征伐も出來るし、又征伐をした後、異種族の者を歸服させるに就いても、金づくで懷柔することが出來ると云ふ譯であつた。

是れが即ち清朝が元に次ぐ程の大領土を持つやうになつた由來であるからして、國の富力と云ふものが減退しさへすれば、それを維持することの出來ぬと云ふことは明かに知れて居る譯である。前にも云ふがごとく乾隆の末に三省に亘る一揆の騷動があつて、八九年間も繼續した。さうすると其の次の嘉慶の代には大變に國庫に缺乏を來じて、前に兵隊に増してやつた給料の一部分を減じて、原額に戻すと云ふやうなことにまで及んで居つた。それから以後と云ふものは、清朝の國力は益々下り阪になつて、收入も益々減じて來る。其上今度は單に支那の周圍に在る所の蒙古とか、西藏とか云ふ未開種族との關係のみでなく、遙に歐羅巴强國との關係を生じて來る。英吉利と阿片事件に關して戰爭を開くとか、引續き英佛同盟軍の爲に北京の附近を荒らされると云ふやうなことが生じて來て、之が爲に單に軍費として金を使ふのみならず、幾千萬と云ふ償金を取られるやうになつて來る。清朝の國力が疲弊した最大原因としては、魏源などは兵隊の給料、黄河の工費、宗室の食祿、租税の未進等の項目を擧げて居るが、要するに此等の原因から、已に内部で富力が弱つて居る所へ、海外との關係で、非常に金を使ふことが生じて來たので益々經濟力の窮乏

を來して居る。咸豐から同治に掛けて長髮賊が南方に起つて國力疲弊の極に達した時などは、其の龍興發祥の土地であるといふ滿洲の地方に於てさへ馬賊が横行したり、封禁地を侵して幾百萬畝の私墾をした者などあるのに、殆ど度外に視て居るより外に致し方がなかつた。幸に蒙古とか新疆とか云ふものは、從來長く恩惠を與へた惰力で、是は急に謀叛をするものもなし、又隣り合つて居る露西亞などの國の力も、まだ甚しく支那を侵害するまでにはなつて來て居らないから、異種族の統轄を無事に維持して居つたとはいふ者の此の騷亂の間に出來た新疆地方に於ける露西亞の侵入は、遂にかの伊犁問題を生じた。即ち髮匪捻匪の内亂が治まると同時に此の伊犁問題が起つたり、安南の宗主權を放棄して、佛蘭西の保護に移して、手を切らなければならぬやうになつて來て居る。清朝の末年に於ても、既に異種族に對する統轄力は、實際上此の如く弛んで來たのである。若し此の時に蒙古人などが叛亂を企てたならば、迚も之を征伐して統轄する力は無かつたのである。元來蒙古の征伐は、支那人に取つては餘程困難なことであつて明の永樂帝も一度は斡難河まで進んで兵糧に窮した事があり、一度は清水源といふ處から師を班して居る。康熙帝が蒙古を親征した時でさへも、其の戰略兵糧の運搬などの爲には、非常な苦心をした。康熙帝は人に勝れた獨創力があつて、自分の考を廻らして新らしい方式を立てゝやり通す人であり、沙漠中では親しく水草の地を見定めて、宿營の指圖までして、士卒と甘苦を共にし、辛うじて準噶爾親征の成績を失敗なしに擧げたのである。若し蒙古が清朝の末年に叛亂を企てたならば、既に成功して居つたのであらうけれども、蒙古人は初めに滿洲の天子の爲に征服された其の威力と、それから長い間服屬して居つた恩惠とを忘れないので、此の革命の起るまでは安全に經過したのであるが、今度の革命が起つて、さうして清

朝と云ふものが倒れた自分が從來服屬の目的にして居つたものが無くなつて見ると、支那の人民に服屬すると云ふ考は最初から無いのであるから、それで今日に於て外蒙古の獨立と云ふやうな騷ぎが出來る。又西藏地方は蒙古などのやうに戰端を開いても獨立すると云ふ程の力があるのではないが、是は宗教の爲に各地方に關係を有つて居るので、世界の強國の勢力に對しては、非常に機敏な感情を有つて居る。昔からさう云ふ實例があるので、元の時にも彼方から喇嘛教で有名な帝師となつた八思巴と云ふ人が來て、元の世祖の非常なる尊敬を受けて、それによつて其國を巧に維持した。明の時でも太祖成祖が支那の內部を統一したと云ふ事を聞くと、之に關係を附けて、冊封を受けて國を維持して居つた。それが明末になつて、餘り近くない土地即ち滿洲に國が興つたと云ふことになると、其勢力がまだ支那を統一する程盛んにならない時で、僅に蒙古の一部分を征伐して成功したと云ふに過ぎない時に、既に非常に銳敏なる感じをもつて、滿洲の天子は文殊菩薩の化身であつて、世界を統一すべきものであると云ふ文書をよこして、之に關係を附けて居る。斯う云ふやうに或る點に於ては、世界の有力者に對して非常に銳敏な感じを有つて居るから前からして露西亞の方に關係を附けやうとして、清朝の末年から其の間に交通があつたのであるが、最も近い所は英吉利であつて、英吉利の方から考へれば貿易上の關係などもあるので打捨て置かれぬことであるから、露西亞に先んじて之に遠征軍をも出し、さうして今日の關係を生じて來たのである。斯の如く存外銳敏な民族であるから、將來支那に賴つて國を立てやうと云ふ考は到底起り得るとは思はれない。是等は皆支那から分離することは、將來の運命として明かに分つて居ることである。

滿洲の土地は幾らか是れとは違つて、滿洲朝廷の興つた根據地であ

ることは云へ、今日では全く山東、直隷あたりの移民地になつて居つて、滿洲に居る者は殆ど大多數は漢人ばかりであるから、是はどちらかと云ふと、其の感情の上からは、支那の本國と一緒になるべきものであるやうに考へて居るかも知れぬけれども、かの日清戰爭、日露戰爭以來、其の自分が住んで居る所の土地が戰地になつて、勢力がどう云ふ風に傾いて居るかと云ふことは、滿洲の土著の人民には最も明白に呑込まれて居るのである。それで日露戰爭以前に於ては、滿洲に於ける支那人は、殆んど皆遠からず、露西亞の支配を受けなければならぬものと覺悟を極めて居つたのであるが、日露戰爭以來又スツカリ形勢が變ると云ふと、日本の兵隊の强いこと、又日本人は淡泊な人民で、之に服屬しても一向差支ないと云ふことを飽までも承知して居るので、土著の人民と云ふものは日本人に對して何の惡い感情も有つて居らぬのである。唯一つは日本の當局の不用意でもあるが、日露戰爭以後に、かやうに大勢上外國の勢力に服從しなければならぬものと覺悟をした人物を以て滿洲を支配させずに、日清戰爭の經驗も、日露戰爭の經驗もない所の支那の南方人、殊に近來變法自强などと云ふ意味の新敎育を以て養成された所の南方人を多く滿洲の官吏として移入して來た。是は日本の當局に於て、目先が見えてそれを防禦する遠識があれば、確かに防ぎ得たのであるけれども、其の義にも及ばなかつたので、詰り何にも從來の關係、それから大勢の如何をも知らずして、何でも外國人を排斥さへすれば、國家の獨立が維持されるもののやうに妄想して居る新らしい書生輩を以て、滿洲の官吏にさしてしまつた。それが爲に日露戰爭以後、滿洲に來た所の官吏の日本に對する感情、政策が、非常に日本に不利であつたと云ふことは免かれない。今日でも一般の人民は日本の勢力と云ふものを認め、又滿洲に於て馬賊などから成上つて、さうして日清日露の戰爭以來の實

際の事を知つて居る軍隊の頭目などと云ふものは、何事があつても日本に頼らなければ危いと云ふことを深く呑込んで居るのであるけれども、そんな事を知らない官吏の爲に邪魔をされて、日本と滿洲との關係が段々氣まづい傾きを來して居る。今日でも其の歴史を知らない南方人の官吏さへ逐退けてしまへば滿洲の事は、日本との間に何等の惡い關係がなしに、圓滿に行くべき筈である。それであるから是は蒙古とか西藏とか云ふやうな、支那が異種族を統轄する意味とは違ふけれども、詰り兵力、財力等から看た領土問題として、之をも支那が結局見切らなければならぬやうになるかも知れぬのである。

從來滿洲の財政も、決して其の土地からの歳入を以て、其の支出を全部供給することは出來なかつたのであつて皆支那の內地から補充をして維持して居つたのであるが、近年になつて奉天省の財政が非常に發展をして、殆ど其の土地からの收入によつて政費を支辨して、猶多少の餘裕があつて、どうかすると吉林、黑龍江二省の費用までも補助した上に、又中央政府にも金を仕送ることが出來るやうに成り來つて居るが、是は果して何等の原因からさう云ふ事になつたかと云ふと、全く日清、日露戰爭以後、日本並に露西亞の資本が入つて來たのみならず、日露の鐵道でもつて、土地の產物が海外に輸出するので、滿洲の富力を增したが爲に、さう云ふやうに財政が發展をしたので、もしも日露の勢力を引去つてしまふと滿洲は依然として貧乏の土地に止まるのである。それゆゑ單に支那の財政上から考へると滿洲を切り離す方が利益で、今日の財政ではこれを持つてゆくだけの實力は無いのである。要するに今日の中華民國の成立ちは、今袁世凱が政務を執つて居るとは云ひながら、南方の革命軍の興つた爲に今日の形勢を來したのであつて、謂はゞ漢人の天下で、漢人が支配するのである。漢人の天下で漢人が支配すると云ふことになると、支那本部

の財力でもつて支那を支配すると云ふことを根本の主義として立てゝ行かなければならぬのであつて支那の根本の財政に害こそあるけれども利益にはならぬと云ふやうな土地をば切り離してしまふ方が財政の理想上から云ふと至當の事である。

支那の今日は非常に財政の窮乏を告げて居つて中々支那の本部だけの財政を整理して行くにも將來非常な努力を要し、外國から借款を圖つたり何かして、それで財政の基礎が立つか立たぬかと云ふことを、今非常に心配して居る最中である。今日に於ては迚も財政上損にこそなれ利益にならない土地の支配を維持すると云ふことは出來ないのである。尤も支那民族の發展と云ふことから云へば、是は又別問題であつて支那の國力發展とは少し譯が違ふ。蒙古などでも、從來支那人が追々多數入つて蒙古人の產業がそれが爲に奪はれて、即ち從來遊牧生活をして居たものが、農作をする支那人の爲に漸々其の土地を侵害されると云ふことになつて來て居るので、今度の蒙古獨立なども、一つはさう云ふ意味からして移住支那人排斥の爲に出て來たのであるが、支那人がそこら中異種族の土地を侵害すると云ふことは、一方から云へば漢民族の發展とも謂ふべきものであるから、日本の明治維新の當時に、一方に樺太を失ふと同時に、又一方には征韓論が起り、臺灣征伐をしたと云ふやうな侵略的精神が、支那の人民の方からして起つて居るべき筈と云ふことが認められないこともない。併し今日の支那人の發展、即ち蒙古地方へ移住などするといふことは、全く平和的に經濟上から發展すべきであつて、是は新政府が計畫すべき國力發展と云ふやうなものとは意味が違ふ。それで將來若し人民の實力さへ續けて發展して行けば蒙古の土地が誰の領土にならうとも、西藏の土地が誰の領土にならうとも、滿洲が誰の領土にならうとも、漢人の平和的發展は必ずしも妨げられない。今日に

於て國力即ち兵力とか財政力とか云ふものからして維持することが出來ない土地は政治上から之を切り離してしまつて、單に將來の經濟上の發展を圖る方が至當である。

此の觀察點からして行くと、支那の領土問題は政治上の實力の方から考へて、今日縮少すべきもの、五族共和と云ふやうな、空想的議論に支配されずに、實際の實力を考へて、寧ろ其の領土を一時失つても、內部の統一を圖るべきものと云ふことになつて來る。今日支那の領土問題を論ずるに於て、以上の二つの點即ち種族感情と、政治上の實力とが最も注意して考へられなければならぬ所である。

三、內治問題の一

地方制度

支那の內治問題に在て現今最も重大に視られて居る者は、地方政治と財政の二つであるが、此の中地方政治は既に改革に着手されて、一部分は既に實行され、一部分は將來の實行を期せられて居る。此の地方政治に就ては、從來は隨分階級の多い制度であつて、州、縣、廳の上に府若くは直隸州、直隸廳があり、府の上に道があり、道の上に省があり省の中には又巡撫及布政使按察使等の階級があつて、一省若くは二省三省を總督が管轄することもあつて、中央政府に統屬することになつて居つた。此の階級の過多なる制度が宜くないと云ふことは、前から議論のある所であつて、此度の革命を機會として、上の方では總

督巡撫を廢して、一樣に都督として下の方では、府、廳州縣の階級を廢して、一樣に縣とし、直ちに省を以て地方政治の小區畫を一樣に統一することにした、是丈は既に實行されて居る。今日に於て尙ほ問題として殘つて居るのは其の省を廢して道を以て第一級とし、之を以て縣を綜べんとする者で、或は全國を八十三州に分けるといふ說もあるが、要するに地方政治の大區畫を析いて數を多くし、小さくすると云ふに在るのである。是は今日に始まつた議論ではなくして、十年前に既に康有爲氏が之を唱へて其の著官制議の中に論じて居り、熊希齡氏も別に著書はないけれども同樣の案のあることは、余が親しく同氏から聞いたことがある。康氏の說は今の道の區畫を以て地方政治の最大區畫として約七十餘道とすると云ふので、縣を第二中區とし、其下に第三小區として、自治團體を置くことゝし、其の組織の理論も頗る詳密を極めて、凡そ行政官の數は多い程人民を治めるに都合の好いものと云ふ說である。それで古來支那の制度では、どれ程の官吏があつたとか云ふやうなことを列擧して、其の學問上の主義としては、康氏が反對すべき筈の周禮をも暗に引用し、現在歐米並に日本などの制度をも參考して、官吏增加說を唱へ、官吏が增加して直接人民に接觸する機會が多くなれば、從つて民間の事情が分り、政治の實績が擧がる。それから省の數を多くして、比較的小さい區畫の長官が、直ちに中央政府に其の意見を上達することが出來るやうになれば、敏活に政務が行はれると云ふやうな說である。併し是等は尙大に愼重に審慮すべきことである。成程既に實行した所の府、廳州縣の階級を無くしたのは、或は其の當を得て居るかも知れぬ。併し是から實行せんとする省の區畫を多くして小さくすると云ふ論は、理論としては宜いけれども實際それが見込通りに治績を擧げ得るや否やと云ふことを考へなければならぬ。實は其の府、廳州縣の階級を無くした

のでも、其の階級を減らすことを實行すると同時に、或る地方に於ては今日の縣をモッと大きくしなければならぬかと思ふ位である。現在の行政區畫の實際を考へて見れば、支那の縣は日本の郡に當り、支那の府は日本の縣に當るのである。是は土地の面積ばかりから考へると、必ずしもさうはならぬけれども、其の人民の數、租税の上り高などから考へると、大抵それ位に見るのを適當とするのである。今日の日本に於ても既に郡制廢止などと云ふ議論が起つて居るのであつて、其の階級を少なくすると云ふことに於ては同様であるけれどもそれは詰り人民の負擔を輕くして、直接に町村の自治團體と、最高の地方官とを接觸せしめると云ふ意味から出て來たので、單に官吏の數を多くすれば、人民を治めるのに便宜だと云ふ爲に考へられて居るのではない。況んや日本に於ても、交通機關の發達した結果、既に今の府縣の區域が小さ過ぎると云ふので、之を合併してはどうかなどと云ふ議論さへ出て來て居るのである。併し日本の方から考へると、實際は行政區畫の大小を論ずるよりかは、其の組織の根源に溯り、繁文を省き、事務の簡捷をさへ圖れば、必ずしも區畫の大小は問題にならないのである。支那に於ける現在の政治論は、草創の時代であつて、まだ細かい地方政治の根本の理論にまで立入る時期になつて居らぬから、或は其の粗大な點から考へて、大小區畫などを論ずるのは、機宜に適した者であるかも知れないけれども、康氏などの如く、單に行政區畫を多くして小さくすることが、地方行政の最も善い方法と考へるのは、或は誤つて居りはすまいかと思ふ。

之に就ても從來の歷史を切實に考へなければならぬのであるが、周禮などのやうな政治上の理想制度は、別問題として、其の信據するに足る者では、前漢の時の郡が凡そ百三あつたのが、今の新らしく造らうと云ふ道、若くは州の區畫の大きさ位のものである。是は勿論民政

に取つては便利であつたと云ふことは、古來の沿革で證明されて居る。併し支那のやうに地方行政官が司法の事をも兼ね、或は又軍政をも兼ねるやうな處にあつては、一概に民政ばかりを標準として議論を立てられない。それのみならず漢の時には百餘郡の太守の上に十三部の刺史を設けて、六條の條件で各郡の監督をして居つたが、是は妙な制度であつて、其の十三部の刺史たる監督官は、天子から勅命でもつて派遣されるのであるけれども、各郡の太守よりかは官階が卑いので、太守は即ち二千石の秩であるのに、刺史は六百石である。今日の日本で云へば恰も督學官などが學務に關して地方官を監督するやうな狀態になつて居る。然るに此が前漢の末になると卑いものが尊い者を治めるのは、春秋の義に合はないといふ論があつて刺史を秩二千石の州牧に改めたことがある。唐の時は各州の刺史と云ふものが即ち漢の各郡の太守と同じやうな者になつて、其數も亦增して開元の盛んな頃には三百餘になつた、即ち清朝の知府よりも數が多いのである。然し此等の變化は名目だけの事であつて、其の上に監督官として矢張り採訪使、又は觀察使を置いて、之を支配して居る。其の採訪使、觀察使の分配は、天下を十道に分けて、それに又多少の派分をして十五の採訪使を置き、漢と同樣に六條で各州を監督して居るのである。此の採訪使、觀察使は、要するに朝廷の欽差の職であるけれども、唐では兵亂の結果、更に節度使を置くやうになつて、地方に固着した職に變じてしまつた。其の沿革から考へて見ると若し今日の支那に於て、省の區畫を小さくして、道又は州とし、之れを七八十位にしても、矢張り其の上に其の監督官のやうなものを必要とすることがないかと考へられるので、已に常設官にあらざる巡按使を設けるなどの說もある。日本のやうに行政の分科があつて、稅務の方は稅務官があり、遞信の方は又遞信の官があり、軍隊は軍隊で獨立して居つて、地

方官は單に地方の民政ばかりを掌るものであれば、府縣ぐらゐの大きさが中央政府に直隷して居つても格別差支はない。併し支那に於てはどちらかと云へば地方官の主要な職務は稅務と詞訟とで、其の他のものは皆それに附屬したやうな事になつて居る。稅務官とか、裁判官とかは日本でも民政官たる府縣の數と必ずしも同じだけの數を要する者ではない。それから又唐以後の沿革を考へて見ると、小さい區畫の上に大きい區畫を立てる傾きが益々强くなつて來て居る。宋の時代は州縣の守令にさへ權知即ち一時假りに司どる意義の官名を附ける位、すべての地方官制が定着せぬ時代であつたが、矢張り大體は二十三路に分けて府州を配屬せしめて居る。元の時は其領土が非常に大きかつた爲に、天下を十一の行中書省に分け、其中で今の支那の本部をば九省に分けて、各路の上を更に統轄することになつて居る、この行中書省といふのは、即ち中央の中書省の出張所と云ふやうな意義で、實は地方官と云ふ性質ではない。明の最初の制度としては、全體を十三布政使に分けて居るのであるが、是も其の名義から云ふと中央政府の出張官のやうな意味を有つた使の字を用ゐた官であるが、明では最初から之を地方官として制定した。さうして明の時には、中央政府では前にも云ふ如く、六部が皇帝に直屬して、徵稅權、兵權、司法權は別々に獨立した職務になつて居るが、地方官でも布政使は財務官、按察使は重に司法官、又都指揮使は軍務官と云ふやうな分離した立て方であつた。併し明一代の沿革は、結局此の三權分立の制度から漸々變つて、後には三權を一人で握つたやうな總督、巡撫が、布政使、按察使の上に出來ることになつた。總督、巡撫も元來は漢代の刺史に類した巡按御史からして、事變のある時臨時兵權、並びに糧餉徵發權を併有した職務に變形して來たので、矢張り中央からの出張官であるが、之が淸朝になると、布政、按察兩使と一樣に固定した地方

官の姿になつてしまつた。

それで支那の地方官制の變遷を通じて考へると州郡の守令即ち支那を七八十乃至百から三百四百に分けた者の上にはどうしても九とか十とか以上二十前後までの監督官を其上に置くことになり、又各種の政務の科目を分けられてある官職からして後には之を綜合した者になる方に傾いて行き、昔は中央政府の特派官であつて純粹の地方官でなかつた官吏が、漸々純粹の地方官になると云ふ傾きになつて行つて居るのである。此の如く自然に傾いて行く結果は、勿論政治上に種々弊害があつて何時でも創業の君主、中興の時代などには官制の意義を元の通りに引き戻さうとするので、今日に於ても改革論の出來るのも無理のない次第である。併し此の政治上の弊害と云ふものは、どう云ふ處から出て來て居るか、單に制度が惰力で變つて來た、即ち分科の行政を綜合行政にし、特派官の制度を固着の地方官にし、地方行政區畫の小さいのを大きくしたと云ふ處から弊害が出て來たのであるか、或は根本に弊害があつて、其の弊害に對する已むを得ざる救濟策として後來の大行政區が出來たのであるかと云ふことを考へなければならぬ。支那の政治の弊害を論じた人は、昔から多いのであるが、其中明末清初の際に於ける顧炎武、黄宗義などは、痛切に弊政の慘烈なる結果をも目撃し、其の胸底にも根柢ある經綸を抱いて居つたので、其の言ふ所は、最も耳を傾ける價値あるものであるが、此の二人は共に地方鎭撫の方針としては、行政區畫の大きくして權力の强いのを寧ろ弊害とはせずして、それが即ち朝廷の安固を維持する所以だとする傾きがある。此二人は從來唐の時代には藩鎭が盛んで、地方に兵權を有つたものが跋扈することになつたからそれで衰へて亡んだと云ふ論に反對の意見を持つて居る。それは地方に兵權を有つて居るものが多くあるのは、中央政府の薄弱な所以

であつたけれども、地方に兵權を有つて居るもの、全く無くなつたのは同時に中央政府の滅亡を來す所以となつた、此處を考へなければならぬと云ふ議論である。支那のやうな社會狀態の歐米若くは日本などと異つて居る國に於ては、一概に歐米文明國の政治の外形に摸倣して、其國が治まるべき者であるか否かと云ふことも考へなければならぬ。文明國の政治でも、其の起源は矢張り其國特有の沿革から由來して居るので、理想から割り出された者でないことも少くない。さういふ制度は一國若くは數國に於て利便であつても、之を他の國々に應用することの出來ない者もある。康有爲が擧げて居る英國其他の小行政區制度でも、實は歷史的發達を尊重して、之を保持する風習から來て居るのと、古い風習が不經濟不便利でも之を維持する丈の富力があるといふ點からも出て居るので、此が理想的良制とは云はれない。現に二百六七十藩を三府四十餘縣に合併して、好成績を擧げた日本の實例を以ても證明されるのである。それだから支那は支那丈の從來の政治上の利弊として、識者に考へられて居つた所の事をも十分に考へなければならぬ。

今日此の省を廢して行政區を小さくすると云ふ說は、康有爲其他が唱へ出してから清朝の末年に於て既に當局者に考へられたことであつて、即ち中央集權の實行に伴つて必要とせられたのである。それで總督巡撫は、權力が過大であるから、地方官を小さくして統一に便にしたいと云ふ考なのである。併し支那の如く非常に國土が大きくて、其の交通もまだ十分に敏活には行かず、それから一體人民が國に對する感じが頗る遲鈍であつて、一方に激烈な騷亂があつても、一方の人民は一向平氣で居ると云ふやうな國にあつて、若し此の小區畫制を實行したならば、思ひの外の叛亂若くは外國の侵略があつた時に、それに對する防禦が出來るかどうかと云ふことが、又一つの問題

である。近年の事に考へて見ても、既に北清事變の際に、北京に外國兵の侵入したが爲に、光緒皇帝と西太后とが蒙塵して、陝西地方へ走り去つた、其の時に於て支那の國を維持したものは重に南方の二總督即ち劉坤一張之洞とそれから山東巡撫袁世凱との三人の力である。殊に南方の二總督が少しも北方の騷亂の影響を自己の管轄區域に及ぼさせずに安全に根據を占めて居つて、一は陝西に逃げた兩宮の聲援をもなし、一は兩宮に對して實力を以て改革を要求した爲であると云ふことが出來る。若し是れが南方に小さい行政區畫のみが分立して居つて、大きい勢力で統一して居ることがなかつたならば、斯う云ふ場合には土崩瓦解の狀態に陷いつたに違ひないと思はれる。

內治を整頓して、小さい行政區畫で政務を敏活にやらうと云ふ國は、先づ第一には政治組織の完全し、國民の程度が高くて、內亂の憂の殆ど無いこと、第二には國防も完全して、外國の侵略に對しては、之を國境以外で防禦し得らるゝこと、第三には國民の愛國心が强烈で、國の獨立に對する感覺が銳敏で、如何なる事變に遭遇し、又之を放任して居つても自然に統一の出來ると云ふやうなことを必要とするのである。今日の支那に於ては何れの點に於てもまださう云ふ場合に達して居らぬと思ふ。それに此の大きい行政の區畫の施設も、既に數百年の因襲を經來つて居る。元の行中書省を設けて以來、既に六百年、明の布政使設置以來としても五百年を經て居る。それで其の中には江南と江北の地方を一省の區域に入れた舊の江南省、今の江蘇、安徽兩省のやうなものがあり、浙東と浙西を一省の區域に入れた浙江省のやうなものがあり、內江、外江を併せて一省にした四川省のやうなものがあり、地方天然の山河の形勢から生じて居る區畫を無視し、若くは禹貢の分州、其後にも唐の分道の精神を失つて、險要の利用が出來ないやうな事になり、それが爲に元明二代の末路は內亂の防禦に非

常の不便を感じ、亡滅を早めたといふ非難もあるが、しかし大體に於ては各省の區畫にはそれ相當の理由があつて、其の不自然な處は他の何等かの政務上の管屬に於て、多少の矯正が出來て居る。即ち江蘇省に二布政使を置て南京と蘇州との兩中心を保持するやうな類である、其の外に於ては地方の形勢並に民族等によつて、自然に分たれて居るので、多少の修正を加へさへすれば、完全な區畫になり得べき者である。それだから縱令新制度に遵て之を小區畫に分けても、恐らく經濟上若くは政務上に於て、現在の省を成して居る區域内のものは、聯合を要することになる場合が多からうと思ふ。一例を以て言へば、現在支那の貿易商などが廣東省のものは一の廣東會館を機關として居る。若し新區畫に依ると廣東一省が五州位に分れる筈であるけれども、將來とも行政區畫によつて、五箇の會館に分れるだらうとは想像されない。福建も新設區畫では三州に分れる筈であるけれども、商人などが一の福建會館から分離することも思はれず。それから寧波から上海其の他の附近まで及ぶ江蘇浙江の大なる地方は其方言などが、大方共通するが如く、商業團體も三江會館で統べられて居るが、是とても二省に新設せらるべき六州に分れてしまひさうにもない。山西省のものが何處へ行つても一種の銀行業を營むと云ふやうなこともあり、山東省のものは何處から出たものでも、多く勞働者として認められて居るやうなこともあつて、兎に角今日の大行政區と云ふものは、大體に於て地勢並に風俗からして、自然の道理に適つて居るのである。さうして見ると、今日それを小さく分けても、從來からの大きい區畫内には、又何か共通の仕事を以て聯絡しなければならぬやうになりはせぬかと思ふ。單に官吏を增せば政治が敏速になるとか、行政區を增せば中央政府の威令が行はれると云ふやうなことは、北京の中央政府に强大なる權力を占める君主の如きものがあつ

て、中央集權を決行しやうと云ふ場合ならば或は宜いかも知れぬ、我々も清朝の末年に於て皇帝が存在して、政治上の改革をやると云ふ上からは、此の小區畫說にも理由があるものと思つたのであるけれども、今日は既に共和政治になつたのである、何の政治でも統一を必要とすることは勿論であつても、中央政府の權力の非常に大なることを要する理由は餘程無くなつたのである。今日に於て清朝末年と同樣なる行政區畫の改革論を主張するのは、或は間違つて居りはしないかと思ふのである。但し支那の人民の程度が更に進んで來て、其の愛國心が非常に盛んになり、內亂の憂も全く無くなると云ふ場合になれば、それは又別問題であつて、其の時は今日の行政區を又改革しても宜いのである。

但し其處に尙どうしても考へなければならぬことは、官吏を增せば行政が行屆くやうになると云ふ議論である。是は何處までも誤りであると云はなければならぬ。康氏などは臺灣の例を擧げて、臺灣は元は支那では僅に一府を置いて、それに僅少の縣を附屬させて治めた處である。然るに日本ではこれに總督を置いて、多數の勅任奏任の官吏を置いて、非常に綿密な行政をして居つて、其の爲に治績が擧つて居ると言つて居る。併し是等は又別の點からも十分に考へられるのである。英吉利などのやうな殖民政治を執る國で見ると云ふと、多少種族の異つて、而かも特有の文化を所有せる人民を治めるには、多く其の種族の自治に任せて、多數の本國人の官吏を派遣しない。それが却つて殖民政策として成功を告げて居るのである。日本が實行して居る殖民政策は歐羅巴諸國などゝは頗る同じからざる點があつて資本が有り剩るが爲に、其の下し場所を求めるので殖民地が要るとか、又歐羅巴の或る國から亞米利加などへ盛んに移民の行く如く、人口の過多なるが爲にそれを捌く必要上から殖民地が要るとか工業

が盛んで生產品が過剩を來すが爲に、殖民地が要るとか云ふのとは幾らか違つて居る。勿論其の中人口の過多を捌く方法としては、日本にも同樣の理由があるのであるけれども、臺灣などに對しては其の割に多數の日本人が入り込んでは居らぬ。日本の現今の殖民地に對する實狀は、教育を受けた人間が有り剩つて、それを使用するに困る場合が多いので、多くの官吏を製造して、それを殖民地に捌いてやると云ふ方針と云ふではないけれども、確かにさういふ傾向になつて居ると言ひ得るのである、是は殖民地を見事に治めるが爲に多數の官吏を要求するのではなくして、官吏になる人が多數なので殖民地にも多くの官吏を用ゐるの已むを得ざるに至つて居るのである。臺灣の治績が清朝の時より擧つて居るとか、朝鮮の土人が韓國時代よりも經濟上幸福になつて居るとかいふのも事實ではあるけれども、是は他に理由があるので、官吏の多數なる結果ではない。現に日本に於ても屢冗官の淘汰が問題になつて、一つは財政の上からも來るのであるが、兎に角官吏が多きに過ぐると云ふことが問題になつて居る。それで之れを外國の行政の整頓した國々に較べると、官吏の才能が不十分にして、さうして數ばかり多くする行政の仕方を日本は執つて居るのである。是等の事は今後の支那に於ては何も學ぶべき必要の無いことである。

且つ支那に於て斯う云ふ多數の官吏で支配すると云ふ方法を學ぶと、其利益を享くる前に、忽ちに非常な弊害を生ずる憂がある。日本は、誠に官吏が多數であるけれども、官吏の收入は非常に少ない。それで今日に於ては官吏以外の職業を求めるものゝ方が非常に多くなつて、さうして官吏は多くても、其の爲に一國の經濟に影響することは、大したものではないのである。勿論行政財政の整理をする時には何時でも官吏を減らすけれども、是は整理の仕方に依つては、別の方法

を執ることも出來るし、又從來日本は官吏が多きに過ぎたので、今減らすのが當然だと云ふ道理にもなり、寧ろ今日では行政整理の根本問題は、官吏の多少よりかも、能力ある官吏が、他の職業に從事すると同樣に、安心して生活し得るかどうかと云ふことが問題になつて居る。然るに支那に於ては官吏の生活は、日本よりも遙に豊かで、名目はともかく、事實は非常に收入の多いものである。それで官吏の數を多くするが爲に、今までの官吏の收入を減らして、日本の如く極めて貧乏な官吏を造り得らるゝものであれば、多數出來ても國家の經濟には大した差は無いけれども、官吏は收入の多いと云ふことが原則になつて居つて、さうして其の上に數多く之を造ると云ふことになると、さなくとも收支相償はない支那の現在の財政狀態では到底堪ふべからざるものである。

支那の官吏の收入の多過ぎると云ふのは、是は積年の弊であつて、共和政治になつた今日などに於ては、其の弊害を釐革する必要があることは勿論である。そこで若し改革の時機が到着して居るからと云ふので、官吏の數を殖やすと共に、其の收入を減じやうと云ふことであれば、是は謂はゞ政治上の根本改革の問題である。支那の官吏の習慣として、其の大多數は、知縣の如き小さい官吏からして、其の職務の取扱ひ方に通じて居つて、之を處置するものがない。中央政府が六部に分れて居るが如く、知縣の下にも矢張り六房を分けて、幕賓が各々其位置を占めて、實務を取扱つて居る。此の幕賓若くは官吏の品流に入らないで、一種の官吏の下働きをする職業、即ち胥吏と云ふやうなものがあつて、實際の政務を執つて居ることは、上は六部から、下は知縣衙門まで共通して居るので、此胥吏が又代々世襲しても居り、又其の株をも賣買して、動かすべからざる程に盤踞して居るので、顧炎武は古人の言を引て、官に封建なくして、吏に封建ありといひ、黃宗羲も

同様の事を言て居る。此の胥吏を廢して、士人を用ゐるといふ宿論を實行しやうとは清朝の末年からして已に試みたのであるが、要するに是は官吏が實際政務を知らぬでも盲判を押せばそれで務まると云ふ習慣が全く改まらない以上、恐らく實効のないことゝ思ふ。しかし此は尙ほ弊害の小なる者で、政治教育の如何によつては漸々に革新の途がないでもない。但だ今一つ重大なる事は官吏の政治的德義の問題である。實は是は何れの問題にも關係し、又何れの問題の根柢ともなることであるが、支那の如く數千年來政治上の弊害が重なつて、官吏と云ふ者には殆んど政治上の德義が麻痺して、其弊害と云ふことをも自覺しないやうになつて居る國に在つては、此の問題を解決することは容易ではない。しかし日本の維新の實例を研究すれば、此の問題解決の曙光を認め得られないとも言へない。日本に於ても德川時代の末路には、德川家の領土內でも、各藩でも、官吏の政治上の德義は、甚だ低くなつたもので到る所に腐敗を來して、何事でも賄賂で以て成功すると云ふやうな有樣であつた。此の腐敗を代表すべき一種の公然たる名詞さへ出來て、即ち役德と云ふことに就ては、世間はこれを以て必ずしも不德義と考へない程度までに下落して居つたのである。明治以來、言論の自由といふことが認められて、政府とか、官吏とかを攻擊することが、公然自由になつたので、新聞其他の言論の機關が、明治時代以後官吏の不德義過失に關する攻擊を無遠慮にする外形のみを見ると、明治時代の官吏の弊害が前代よりも甚しくなつたやうに見ゆるけれども、近年まで生存して居つた德川時代の故老の經驗によると、實は明治時代の官吏は德川時代に比して遙かに德義が上進して居つたと云ふことを認めるのである。詰り言論が自由になつた結果、不德の事があるとそれを遠慮なく摘發するので、自然表面に現はれる所の惡事の數が多く見えるのであるが、德川時

代に於ては惡事の摘發の機關が無い所からして、總ての事が皆泣寢入りになつて居つたのである。それで歴史に昧い者が動もすれば德川時代の封建の世の中には何時でも武士道と云ふものが十分に行はれて、上級の武家即ち將軍とか大名とか云ふものからして、下は槍一筋の平武士に至るまで、武士道を以て生命として居つたかの如く空想するのであるけれども、實は武士道と云ふものは單に德川時代の理想であつて、講釋師などの談を聞けば時々えらい人があるやうであるが事實行はれて居つたことは極めて稀であつて、一般には腐敗を極めて居つた。但だ德川の末年に國歩が艱難を來してから始めて人心が奮起して、今まで細身の大小を帶して居たものが、講武所風とかいふ太いものを帶して歩くと云つたやうになつたので、それが明治になつて外國との關係上、何れの階級にも愛國心が普及することになつた。今の人が謂ふ元祿武士とか云ふ其の元祿時代にはどちらかといへば武士道の衰へて居る時で、赤穗四十七士などの盛んに稱揚されるのも、其の腐敗した世の中にアレだけの人間が幸ひにもあつたと云ふことが珍らしかつたので其の外の世間は腐敗を極めて居つたのに對照しての賞讃と見る方が事實である。然るに明治の世の中になつて、一と度大改革を經ると云ふと、比較的官吏の德義が上進して、尤も今日に於ても多少の弊害が無いと云ふことはないけれども、併ながら判任官とか巡査とか云ふものが、低い給料を貰つて生活難に苦しみつゝも、支那の吏胥などの如き非常な不德をせずに、齒を食ひ縛つても自分の品位を維持して行かうと勉めて居るやうな有樣は維新の改革から産み出された所の新らしい現象で、此の點から云へば明治の世は、確に所謂昭代として差支ないのである。

改革と云ふものは斯の如く人心を一新するの效能があるものであるから縱んば支那の如く數千年の積弊を有つて來た國であつても

眞正に改革が行はれさへすれば、政治上の德義と云ふものも再び回復することが出來ないとは限らぬと思ふ。併し是は改革の仕方に在るので、其の點に於て袁世凱が、若し某博士などの言ふが如く、清朝からして主權を繼承して、治者の地位に立つたので、革命に依つて與へられた地位でないと云ふやうな解釋が眞實であるとすれば、人心の一新と云ふことは、非常に困難を覺えるのであつて、支那の爲には大いなる不幸を悲しまざるを得ない次第である。是は必ずしも某博士の解釋を待つまでもなく、袁世凱の現在の地位は實に此の人心を一新すべき改革の時機をみす／＼逸して居るやうな傾きを明かに認めるのである。それは例へて言へば此の本の附錄にも書いてある通り德川將軍が政權を奉還しても、其の儘德川家が又引續き事實上政權を握つて居つたと同樣な形に在るのが今の袁世凱の地位である。それであるから袁世凱を始め其の部下の官吏も、矢張り清朝時代の官吏生活の因習から脫却し得ないのである。日本でも德川の時代には士族以上の階級、尤も下級の士族は隨分苦しかつたものであるけれども、上級の士族以上の社會は、國民の程度に比較して非常に贅澤なる生活を送つて居つた。日本には二百幾十藩の諸侯があり、それから德川と云ふ大きな覇者がある。其の當時の德川家の生活を考へると云ふと、畏多いことであるけれども、今日の皇室よりかも遙に贅澤な生活をして居つたらしい。それから二百幾十藩の諸侯は平均して今日の縣知事よりかも遙かに小さい地方を管理して居つたのであるが、其の生活は今日の縣知事などの夢にも思ひ及ばざる贅澤をして居つたので、其の代り百姓と云ふものは生きないやうに死なゝいやうにと云ふ德川の元祖家康以來の方針に依つて、支配されて居るので、其の汗水流して取つた所の收穫の過半と云ふものを皆治者たる武士に取上げられて居つたのである。若し日本の國がモツと小さ

くて、德川の初年以來開墾すべき餘地が無いものであつたならば、此の一種の不具の制度からして、既に破產をすべきものであつた。幸ひに德川の初年から三百年近くの間幾らか新らしい土地を開墾すると云ふやうなことで、日本の富が漸々增進して行つたから、百姓の方でも武士の壓迫に幾らか堪え、武士の方でも其の子孫が殖えては新家庭を起し、一種の耕さないで食ふ階級が漸々增加して行くにも拘らず、其の生活を維持して行つたのであるけれども、德川の晚年に於ては既に此の制度の不都合な結果を餘程實際に現はして來て、各藩の大名は皆大阪の商人に向つて、少なきは幾萬兩多きは幾百萬兩の借金をしないものはなかつた。德川幕府の旗本が藏前の札差に對する關係も同樣であつて、悉く借金でもつて經濟を維持して來て居つたのである。唯是が總て內國債であり、事實上それを返濟をせぬでも、兎に角融通の機關でもつて、大阪の商人並に藏前の商人と云ふものが正金を握らない名義上の富の增加に依つて、此の一國の借金政策を維持して來たのであるが、明治維新と共に大阪の商人並に藏前の商人は、其の爲に大多數皆潰れてしまつて、日本の財政の非常に不具な組織から來て居る所の總ての弊害は、此の商人等の財產が犧牲になつたので總てに對して結末を着けることが出來るやうになつたのである。支那の今日も幾らかそれと類似したやうな事があるけれども、是は從來の弊害を打切りにするに就ては、明治維新時代の日本よりかは遙に困難な地位に立つて居るのである。支那の官吏は、其の制度から云へば、所謂王侯將相何ぞ種あらんで、日本の封建時代のやうに、士族と平民と云ふやうな階級は無いのである。併し不思議なことには、支那の官吏は種として貴族ではないけれども、官吏の位置さへ得ると云ふと何人も亦少なくとも貴族の生活をせぬものはない。支那の知縣は日本の郡長ぐらゐの低い行政官であるが、それを三年

もやれば兎に角其の一家族が一生食ふだけのものが出來ると謂はれて居る位である。勿論中には清廉で、さう云ふ風に出來ぬ人もあるけれども、一般には地方官をした者の子孫で相當の財產を持つて居らぬものはないのであつて、支那で財產家の出來ると云ふ一つの要素は、其の一家族の中の或る人が、立派な官吏になることを以て最も重なることゝして居る。從來商業などに依つて產を作つたものでも、鹽商などのやうな、半官半民の關係を有つて居る者の外は、如何なる商人でも、官吏をする程大きな財產を作ると云ふことは出來ないのである。況んや農民などに於ては、アレだけの大きな國であつて、土地の肥沃平衍なることも、非常なもので、幾らでも兼併をすることが出來るやうな狀況に在りながら、日本の農民ほども大きな財產を持つたものが無いのである。詰り有らゆる職業の中、官吏ほど產を積むに最も便利なものがないと云ふ所から考へて見ると、日本の封建時代の武士と違ふは、唯世襲でないと云ふだけであつて、其の一代は貴族生活を送り、或は其の子孫も餘澤を蒙る點に於ては、日本の上級の士族以上の地位を皆有つて居ると云つても宜い。日本では封建時代の破滅と共に上級士族の多數が勢力を失つて、さうして總ての政治上の弊害を一掃し、新たに之に代つた者は、三百年來上級士族の壓迫を耐へて、其の腦力、其の體力を鍛錬して居つた下級の士族、若くは上級の農民で、それらの者が此の立憲政治の根本とも稱すべき中等階級を形作ることが出來、それ等の者が又新時代の政治上の實際の權力を握つたのであるから、中には華族などで大官になつた人もあるけれども、其の華族の大半たる公卿華族と云ふものゝ生活も、昔は上級の士族ぐらゐの生活をするものは餘程良い方であつて、中には殆ど下級の士族よりかも、其の爵位の空しく高いだけに困難な生活を送つて居つたものもあるのであるから新らしい時代に是が官吏とな

つて、餘り多からざる俸給を貰つて、それに滿足して、其の多年鍛えて來た所の腦力體力を發揮して、又それに伴ふ所の德義心を維持して、新時代の政治を執り行ふことが出來たのである。所が、支那に於ては官吏が貴族生活を送ることは日本の封建時代と相類して居るが、此度の革命に依つて袁世凱の政府に官吏となつた者が、矢張り依然として清朝時代の官吏と同樣に、官吏となれば貴族的生活を送られるものと云ふ考が少しも拂ひ去られないのである。近頃大總統の年俸を定めたと云ふことであるが、俸給と手當を合して二百萬元に近い。淸朝時代の各地方の總督などの收入は隨分大きなものがあつて、昔しは廣東の粵海關の監督などは、恐らく大總統の收入以上の收入があつたのであるから、支那一國の大總統として是れ位のことは不思議ではないけれども、日本の明治維新の頃は勿論、今日の總理大臣の收入に之を比較しても其の過大なることを認めざるを得ない。從つて、それ以下の官吏でも、例へば北京に於ける各部の長官とか、それから新らしく出來る所の各州の長官とか云ふものなども、從來の支那の同階級の官吏と同額以下の俸給に甘んじて、極めて簡素な生活を爲し、其の割に極めて堅固な政治上の德義心をもつて、さうして政治を執り行ふことが果して出來るかどうかと云ふことは非常なる疑問である。日本の維新に依つて新たに政治の局面に立つた官吏は、俸給も自分等が最初下級の士族として生活して居つた時よりか豐かにされたには相違ないけれども、其の德義心の根柢と云ふものは、其の俸給にのみ關係すると云ふやうな譯ではなかつたのである。所が支那の從來の官吏は、詰り有らゆる職業の中の最も割の良い者と云ふことを認めて居つたので、今日新らしい共和政府の官吏としても其の考を脫し得るや否やと云ふことは疑はしい。併し是は其の周圍の空氣にもよるので、一國の人心が皆革新の氣分になれば、官吏とても

新らしい氣分になれぬとは言へぬと思ふ。卽ち袁世凱の共和政府では、舊來の淸朝の政治組織を其の儘に承け繼いで、其の官吏も舊來の淸朝時代の官吏を主腦として用ゐたのであるから、それで昔風の官吏生活を送らなければ、官吏たる體面を成さないやうに考へるかも知れないけれども、若し此の改革事業が全く革命黨の人々に依つて爲され、さうして日本の下宿屋にころげて居つたやうな白面の書生が天下を取つて潑剌たる意氣を以て政治の局面に當つたとすれば、恐らく從來の官吏の如く贅澤をせぬでも、極めて簡素なる生活に依つて低い俸給を受けて、支那のやうな大きな國家を料理して行くことが或は出來ないとも限らぬのである。是は政治上德義の革新に就て單に一端の議論であるけれども、此樣な狀態は總ての事に渉るのであつて、若し此改革の際に總ての古い狀態を皆打壞して、新らしい國家を其處に打立つるのであれば隨分思ひ切つた方法に依つて一刷に刷新することが出來るのであるけれども、今の儘では昔の政治組織を其の儘承け繼いで、徐々に其の弊害を除いて行かうと云ふのであるが、行政上の弊害といふものは之を徐々に除くと云ふことは反て容易ならざることである。もし此が徐々に除き得るものであつたならば、何も淸朝が倒れぬでも濟む譯である。政治上の弊害は積み重なる時にはどこ迄も一方に積み重なつて如何に之を救濟しやうとしても出來ない樣になつて行つて到頭其の惰力で引つくり返るまで押詰つて引つくり返つた所で新らしく局面が開いて、又初めから組立てると云ふやうな形になるのが常である。それで淸朝の末路に種々の方法で新政治を試みたけれども、其の新政治は總て淸朝の衰亡を救ふだけの效力が無くて、遂に顚覆するに至つたと云ふのも、卽ち其の故である。是は日本の維新の例ばかり必ずしもさうだと云ふのではないので、支那に於ても既にさう云ふ事が前からある。

明清の易姓によつて、政治上の組織は殆んど變つた處はないが改革の効のあつた著しい例を擧げることが出來る。明代の朝廷の財政と云ふものは、帝室卽ち宮中の財政が非常に大きくて、表の政府卽ち府中の財政は非常に小さい。それで政府は始終財政の困難に苦しんで居るけれども、帝室は何時でもそれ程に苦しまない。明の末年に大きな征伐でもあつて、金の要ると云ふ時には、政府に金が無い際には何時でも御手許金卽ち內帑の下附を請求して居る。又帝室の內部に於ては宦官とか宮人とか其の外のもので、北京の宮城の中に又一つの國を組織したやうなものを形作つて居つたのであるが、一旦明が亡んで清朝になつて見ると、清朝は滿洲の片田舍から興つて、極めて簡素な生活をした夷狄が急に成り上つて支那のやうな大きな身代の主人になつたのである。それであるから清朝は制度に於て明代の形を踏襲して居るにも拘らず、明の制度に就いて根本からの改革を加へたのは宮中の制度であつた。其の事は康熙帝なども屢々自慢のやうに之れを言うて居るのであるが、此事に就ては既に前の領土問題の條中にも略ぼ說いて居る如く、宮中の十三衙門を廢したとか、其の費用を幾十分一といふ程に節約したとか云ふやうなことは、清朝の記錄にも載せてあるので、清朝の初めには始終征伐の爲に軍費が多く要るので、政府の財政はいつでも歲入不足に苦しんで居つたのであるけれども、別に民間から增稅をもせずに、全く唯帝室の費用の節減のみでもつて、其の困難なる財政を支へて來たと云ふことを言つて居る。かくの如く帝室と政府との關係だけは、清朝が明朝に代つただけでも斯の如き著しい改革を成し遂げることが出來たのであるが、唯清朝の一般の政治組織は明朝の舊に依つて、其の儘地方を安堵させるやうな方法を執つたのであるから、明以來弊害を殘して居つた所の地方行政など〻云ふもの〻、改革は到頭出來ずにしまつたの

である。併し清朝一代を通じて兎に角帝室の經濟の縮少せられて、それが爲に人民に租税などを増徵せずに濟み、或は實際の効能は無かつたと云ふけれども、康熙、乾隆の間には幾度か租税の免除をも行ふことが出來たと云ふのは、詰り清朝と云ふ田舍の小さい身代のものが、明朝のやうな大きな身代の家へ乘入つたから行はれたことである。それで今日でも革命黨のやうな一介の書生共が空拳にして天下を取つたのであつて、生れてから贅澤の味を知らぬやうな者が政治上の中心になり、大總統にもなれば、或は重もなる官吏にもなると云ふのであれば、或は其の政治組織を一變して、之れに低い俸給を與へても、それに滿足をして、さうして極めて縮少されたる經費でもつて、行政を維持して行くと云ふことが出來るであらうけれども、袁世凱並に其の部下の如く、清朝時代に於て既に官場の弊習が身に染込んで、半貴族的生活を送つた者が中心になつて居る行政であつては、到底此の數百年來或は數千年來の積弊を一掃すると云ふことは思ひもよらぬことである。

康有爲は從來の地方政治の弊害は、官が人民の爲に政治をして、人民の自治を許さない、爲であると云ふけれども、此の論も亦別の方面から更に一考して見ねばならぬのである。卽ち支那では隋唐以來人民の自治は存在して居るが、官吏は自治の範圍に立入らずに、唯文書の上で執り行ふ所の職務だけを行つて居る。どちらかと云へば官は人民を治めないと言ふことも出來る。此の弊害の由來も久しいものであつて、昔は名族が盛んであつた時は、それらが地方に各根據を有つて、その勢力で自然に地方が治まり、民政の最も行屆いたと云ふ漢の時などは、縣の下に鄉官、又は鄉亭の職と云ふ、卽ち其の土地の名望で任命される官吏があつて地方行政をやつて居つた。三老といふのは教化を掌り、嗇夫は訟を聽き賦税を收め、游徼は賊盜を循禁するといふ

ので皆郷官である。それで郡縣の守令は其の地方の名望ある者の言を聽き、又地方から自から屬僚を選んで任命し、首尾能く民政を治めるやうにしたのであるが、隋の文帝が郷官を廢してからは、官吏といふ官吏は皆渡りものになつて其の制度の美意が全く崩れたのである。殊に近代の制度としては、何人でも其の生れた地方に於て官吏となることを許されない、必ず自分の生れた以外の地方で官吏をしなければならぬと云ふことになつて居る。渡りものゝ官吏の常として、其の任期の間だけ首尾能く勤めて、租税を滯りなく納め、或は盜賊も出ないと云ふやうなことで濟めば宜いとしたのであつて、地方の人民の利害休戚と云ふやうなものは念頭に置かないのである。其弊害が積り積つて來て、地方官の重要職務たる徴税權を利用して耗羨其他名からして陋規といふ不都合の規定により、人民から手數料を徴收して、官吏を勤めて居る間に一種の金儲けをするのが、公然の秘密になつて居る。それで一期三年位の間に於て、一族が一生食へるだけの財産を蓄へると云ふことを目的として居る。それでも自分で直接に民政に當つては惡い事をするのに多少氣が咎めもするが、其の間に胥吏とか、幕賓のやうな便利な機關があつて、慾望を達するには都合よい行政組織になつて居る。それが爲め、地方の人民と云ふものは、全く官の保護を受けると云ふ考は無くなつてしまつた。地方の人民に取て總ての民政上必要なこと、例へば救貧事業とか、育嬰の事とか、學校の事とか、總ての事を皆自治團體の力で爲ると云ふことになつて來た。近年までは府學の教授、縣學の訓導なども、其の職は單に學問をして郷試などで及第はしたが、知縣以上の職務を得ない者の食扶持を得る處だけになつて、少しも教官たる實務を行はない。教官たる實務を行ふ者は、皆地方が立てた書院の方に在る。前に述べた通り救貧、衛生其の他の義務的の事業も、皆地方の人民が勝手に經營して居

るのである。甚しきは警察の仕事までも、各自治團體で自治區域の兵を養ふ、卽ち多くは無賴漢に一方に職務を得させ、さうしてそれを以て又無賴漢を防ぐ方法を執つて居るのであつて、總ての政務と云ふものは皆地方の自治團體が自ら之を行つて居つて、其の上に三年に一遍交代して來る渡りものゝ官吏は、首尾能く稅を納め、首尾能く自分の懷ろを肥せばそれで濟むと云ふことであつてどちらかと云へば人民が皆縣よりも以下なる屯とか堡とか、其の小さい區域に於て自治をして、官の力を借らないのである。康氏の言ふ所とは全く反對の有樣を有つて居るのである。それで若し其の地方に不穩の事があつて、盜賊などが出る時は官吏は自分の行政區さへ侵されなければ差支ないと云ふので、成るべく隣りの行政區に之を逐ひやるやうにする。隣りの行政區でも又それを自分の區域內に入れまいとするに過ぎない。結局責任の讓り合ひで其の間に盜賊などは雪達摩を轉がしてだん／＼大きな物になるやうに大きな團體になつて剿滅が出來ぬやうになつて來るのである。明の亡びたのなども全くさう云ふやうな原因から來て居るのであつて李自成、張獻忠などの討伐軍として明から派遣された大兵を擁して居り、征伐の職務を有つて居る武官例へば左良玉なども、成るべく自分が鎭撫して居る地方を侵されなければ宜いと云ふので其の盜賊を逐ひ廻して居つて接戰をしない。其の間に盜賊の勢力が益々大きくなつて、李自成のやうな大きなものが明を亡ぼすやうになつたのである。人民はさう云ふ場合には其の自治體たる縣、鎭の城壁に憑つて防がないとどうにも仕方がないのである。それで前にも例に引いた乾隆嘉慶の際に於て、三省の大騷亂を來した白蓮教匪の一揆騷動の時などは、常備軍たる綠營も戰はず、中央から派遣された禁旅八旗兵は尙更戰はずと云ふので、仕方なしに地方で義勇兵を募り、それから各自分の鄕里を護ることを

主として、一揆が來れば城に立て籠つて、有らゆる財產を城に皆持込んで、さうして城外は皆空虛にして、掠奪されるものゝ無いやうにし、而して敵の弱味に乘じて逆襲して之を敗るといふやうなことで、一揆の騷動は到頭治まることになつた。此の時に一揆の騷動の治まつたと云ふのも、詰りは人民が自から各地方を防禦すると云ふことからして成功したのである。

詰る所近來の支那は大きな一つの國とは云ふけれども、小さい地方自治團體が一つ一つの區畫を成して居つて、それ丈が生命あり、體統ある團體であるが、其の上に之に向つて何等の利害の觀念をも有たない所の知縣以上の幾階級かの官吏が、稅を取る爲に入代り立代り來て居ると云ふに過ぎない。それで謂はゞ殖民地の土人が外國の官吏に支配されて居るのと少しも變らないのである。さう云ふ政治組織が根本になつて居るから、若し地方に大なる兵力其の他のものを備へた官吏が居つて、之を鎭撫するのでなければ、何時騷亂が起るかも分らぬのである。何故となればさう云ふ小さい自治團體と云ふものは、必ずしも現在の主權者に服從して居るものではない。どの主權者にばかり服從して居るものではないのであるから、實際に其の時に主權を握つて居る者は、地方鎭撫と云ふことを目的として、總督巡撫のやうな官吏を派遣して鎭定して居るのが、卽ち支那の近代の官制の由つて來る所である。斯う云ふ惰力で出來た官制であるから、之を一時に變更すると云ふことは、其の惰力を打ち壞す力が無ければ到底出來ないのである。勿論近日の革命以來、官吏と云ふものは皆地方から選擧されたので、中央の派遣者でなくなつたと云ふことだけはあるが、其の代り今日の有樣では地方の都督並に其の以下の者でも、中央政府に對して殆ど服從の考は無いのである。之を服從させるが爲に、地方の行政區を小さくして權力を小さくし、それから軍隊は是

から引放して別に中央政府の權力に直接隷屬すると云ふやうなことにしやうと云ふのが今日の改革論の理想であるけれども、若しさう云ふ風に行政區畫を小さくし、一方には中央政府から派遣された軍隊が地方人民に對してまだ十分の親しみを有たないやうな時に當つて、若し相當な强い一つの謀叛の團體が出來、それが兵器の準備などのあるものである時には、到底大騷亂に陷ることを防ぐ力は無くなるのである。

彼此の現狀から歷史から考へて、支那の幾百年來の政治上の惰力の根本を改正しやうと云ふことになると、なか〳〵一朝一夕の事ではない。教育も進步し、愛國心も殖え從來の如く君主を頭に戴かずしても、自分の國に對する義務を十分に辨へると云ふやうな考が、人民の間に行渡らなければ到底共和國としての眞の統一事業は出來ない。其の間に幾ら官制の改正に依つて行政の敏活を圖らうとしても、一方に便利なことは、必ず一方に又弊害を生ずるやうになつて、十分の成功はむづかしいのである。況んや日本でも、或は露西亞を除く外の歐米諸國でも同じ國の中に於て、地方に依つて文明の度に非常な差があると云ふやうなことは少ない。それだから畫一制度を以て之を支配することが出來るけれども、支那の如く江蘇、浙江などのやうな非常に文化の進步した地方、それから財力の豐富な地方もあれば邊徼の雲南、貴州、廣西とか、吉林、黑龍江とか、云ふやうな文化の度の進まない地方もある。之を畫一の政治で治めると云ふことも將來に取つては餘程の疑問であらうと思ふ。是等は皆今日の支那の內治を改革するに就いて、當然考へなければならぬことである。

以上は內治論として、地方制度に關する總論であるが、現在の事情から考へて見て、更に困難なことがある。勿論日本でも封建からして今日の立憲政治に變るまでの間には種々急激な變化をするに就いて

困難を感じたのであつて、初め封建を壞して郡縣を敷かうと云ふ時に、薩長の如き大藩からして藩籍奉還と云ふことを申出で、さうして土地を皆朝廷に返して統一を圖つたのである。今日でも各省の區畫を小さくしやうと云ふことになると、自然有力なる各省都督が藩籍奉還と同樣に、自分の地位を抛つて、各省の先驅をして見せなければならぬので、それが爲に黎元洪などが都督廢止論の先驅となるやうな手づまに使はれるのであるが、支那に於て最も困難なことは、清朝の時代からして各省の總督巡撫などが權力が過大で、中央政府の命令が行はれにくいと云ふことを言ふのであるが、併し命令は行はれにくいけれども總督巡撫を取代へやうとすれば何時でも取換へられたのである。何人を總督巡撫にしてやらうとも、それは中央政府の勝手次第で、それに反抗すると云ふやうな總督巡撫もなかつたのである。清朝の初めに吳三桂や尙之信や、耿精忠や、地方の叛藩を平げる時は、隨分困難をしたけれども、其の後總督巡撫が地方に有する所の勢力を利用して、中央政府に謀叛を企てると云ふやうなものは一人も無かつたのである。それにも拘らず、又何人を總督巡撫として地方へやつても、其の地方へ一旦出掛けて行つて、其の地位に据はると、一廉の勢力になつて、さうして中央政府の命令が相變らず行はれないと云ふことになる。是は幾百年來の惰力から來た、自然の勢ひであるので、今日でも黎元洪が自ら職務を抛つても、黎元洪に代つて兵を統べると云ふ何人かゞ湖北に居ると、其處に一つの勢力が出來て、其人は矢張り中央政府の命令通り動かしにくゝなるのである。近頃南京を革命黨の手から取つてから、張勳が其の後城へ入つたが、張勳の職務を免ずるに就て、隨分困難をしたやうである。さて免職せられた張勳は別に相當の地位を授けられ、馮國璋が代つて南京に勢力を有すると云ふことになると、縱令それが袁世凱に反抗する考がなくて

も、中央政府の命令が何事も思ふ通りに行はれると云ふことが六ケしくなるのである。近頃の新計畫の如く地方の行政區畫を小さくしても、軍隊を全國九軍團に分けて、地方を鎭撫する以上、其の軍隊の方に勢力が歸して、依然として總督巡撫と同樣になるかも知れぬ。殊に總督巡撫は民政上の責任の有る官吏で、地方人民の事にも注意するのであるが、若し單に軍事上の官吏として兵權を擁したものが地方に派遣されて居ると云ふことになると民政上の責任が無い代りに尙地方に於て驕慢を振舞つて、中央政府に迷惑を懸けるのみならず、地方の民政官にも非常な迷惑を懸けることになる憂がある。それは卽ち唐の藩鎭などが其の適例である。

斯う云ふ點を總て考へると云ふと、今日に於て此の行政區畫を變更すると云ふことは、理論としては或は宜いかも知れぬけれども、中々容易に實行は出來ない。又實行が出來た所が支那の民政上の根柢の弊害が除かれない以上、卽ち人民が自から支那の國民であると云ふことを自覺して、さうして强い愛國心を生じない以上、いろ〳〵な小細工をやつても、決して其の成績が擧がるべき見込はないのである。今日に於て內治上さう云ふ小細工をするよりも、誠實に時宜に適する方針を求めやうとならば、中央政府に居るものも、地方に居るものも皆一致して、私心を去つて國を維持すると云ふ考が十分に起ること尙日本の維新の際の如くでなければならぬ。日本の維新の際は多少人と人との間に小競合はあつても、日本の統一事業、日本の國力を進歩せしめると云ふことに就ては總て一致した考を以て、而かも之に對して非常に强烈な愛國心を加へて進んで行つたのである。要するに今日の支那の內治の問題は、其の當局者なり、人民なりが國に對する義務を感ずる道德の問題であつて、小さい行政上の制度變更や何かのやうな末の問題ではないのである。

四、内治問題の二

財政

支那が目下最も困難を感じて居るのは財政の問題である。是は清朝の末年からして既に非常な困難に陥って居ったので、宣統三年の豫算に於て、政府の提出案は既に收入が二億九千六百九十六萬餘圓であるのに歳出が三億七千六百三十五萬餘圓かであつて、約八千萬圓の不足を生ずると云ふことであつた。其の當時資政院に於ては此の豫算を修正して、歳入を三億〇一百九十一萬餘圓とし歳出を二億九千八百四十四萬餘圓として、三百四十六萬餘圓の剩餘を生ずるやうにしてあるけれども、此は机の上での修正で、實際は政府案の方が信用されるのである、其の革命以後財政狀態は更に善くならないのみ

ならず、益々紊亂を來して、殆ど手の下しやうがない有様になつて居る。中華民國第二年の豫算を立てた際には隨分出鱈目ではあるが、歳入を三億一千餘萬元とし、歳出は六億四千六百餘萬元で、其の差を內外債で埋合せやうといふのであつたが、歳入の半分以上を借金で埋合せるといふ豫算案さへ、既に珍無類のものであるのに、其實際に至ては、更に驚くべき者であつて、熊希齡氏の施政方針中にいふ所によれば、民國元年より二年十一月までの間に、各省から中央政府に送金した額は山東、河南、湖南、廣東、江西等で二百六十餘萬元に過ぎない。さうして反て中央政府が地方政府の請求に餘儀なくされて支給した額が一千四百餘萬元で、又地方政府が從來分擔して居る外債や賠償金を支拂はないのみならず、地方債すらも支拂はないので、中央政府が立替へた額も九千餘萬元に上つたのである。中央政府の收入は海關、鹽稅、鐵道の收入等であるけれども、其中海關と鹽稅とは外債の擔保になつて居るから、實收にはならない。熊氏は新たに財政計畫を發表して、關稅、鹽稅一億四千餘萬元を除き其他の收入を一億七千七百餘萬元と豫算し、それで歳出を大節約して二億五千萬元と見積り、七千餘萬元の不足を稅制整理で補充しやうといふことになつて居る、是が現時の財政狀態である。處で袁政府といふものが若し力を以て統一したものであれば、總て此の機會に乘じて種々の果斷な政策を行ひ、例へば日本の維新の際に於て德川家の八百萬石の收入を七十萬石に削減し、各藩の收入の幾分を中央政府に差上げさせて、財政を維持し、それから廢藩置縣を斷行して、財政の統一を完成することを得たのであるが、袁世凱の如く妥協政策に依つて成立した新らしい政府は、各地方政府に向つても空文の催促狀を出すのみで、威力を以て納稅を要求することが出來ないので、此の如き非常な困難を來したのである。それのみならず各地方に於ても革命の起る當初、支那で

昔からかういふ際に行ふ風のある人民安堵を主とする名義上の政策からして、從來の地租などを輕減して居る。江蘇省の若き、地租の最も重い省に於ては、革命亂の起つた宣統三年に江寧布政使（南京）の所屬各地に於て四割の減少を示し、江蘇布政使（蘇州）の所屬各地で六割の減少を示して居る。それに一方に於て革命戰爭の爲に、一時軍隊の募集などをして居るので、支那全國の軍隊は革命前の二十鎭（師團）から激增して八十個師團までに達した事がある。其の一個師團中の實數は兎も角此の激增の爲に不確定ながらも民國二年度の陸軍部豫算は、宣統三年の政府案に比して、四千萬元近くの增加、資政院の查定額に對しては八千餘萬元の增加を見ることゝなつたのである。それで各省ともに、民國二年度の豫算を編成した處では、いづれも數百萬圓の歲入不足を發表して居ないものはないやうな始末で、頗る多額の地方債を生じ、袁の中央政府に立替させた丈でも一千三百餘萬元に上つたといふことである。若し袁世凱が威力を以て統一して、地方の兵力を全く無くしてしまへば、莫大の費用を省くことが出來るのであるけれども、元來が南方に於て兵力を蓄へて居つて、其の力で袁世凱と妥協をしたので、袁に壓迫されない丈の兵は備へて居なければならず、袁世凱の方でもそれと對抗するだけの兵力を要し、詰り一國の中で軍隊の二重の設備を要することになつて居るのである。それで支那の全體から云ふと、實際に地方安堵の爲に要する軍隊よりかは幾倍の餘計な員數を養つて置くと云ふことになる。それを解散すると云ふのが動機で、又第二の革命を生じ、其の結果南方は失敗したけれども、南京でいへば、革命派に代つて入つた張勳の兵も、元來は袁世凱の部下の兵と云ふのではなくして、革命政府の爲に一時南京を逐はれて以來、袁世凱の方から軍費を供給されて居つたが爲に、今度は袁の味方をして、南京に入つたのであるから、是れも袁世凱が要

する軍隊としては、實際餘分なもので、其他江西の李烈鈞が失敗して、北軍が之に代つて其地に駐屯し、湖北の革命以來增募した軍隊は解散されて、北軍に明け渡したといつても、其爲に北方の原駐地の袁軍は、格別減少もせず、だん〳〵補充されて居る處から考へると、つまり軍隊の解散といふことも、南軍の解散した缺額を北軍で補充して行くだけの事で、袁の威力からいへば、或は之が爲に幾らか確乎となつたといへるけれども、財政上からいへば、依然として不必要な費用を支辨して居る譯になつて居る。故に中央政府の方から考へても、地方政府の方から考へても到底其の財政を維持し得べきものではない。殊に此際支那に取て、日本の維新の際よりも不利益な事情は、日本では、廢藩置縣の際に、藩の財政を皆朝廷に引繼ぐのが正當なことであるから、それまで各藩が負擔して居つた數千萬の負債を政府が引受くべき筈であつたにも拘らず、それ等の事は各藩の消滅すると共に

皆義務が消滅してしまつて、其の爲に大阪などのやうな日本全國の融通の根本になつて居つた所の大資本家が幾十も潰れたのであるが、兎に角地方の負債の義務を、中央が全く之を引受けなかつた爲に、明治維新の財政は、新たに興つた中央の事だけを支辨すれば、それで宜しいのであつて、大した困難に陷らなかつた。尤もそれでも矢張り一時は困難して、外債說も相應に勢力があつて、吉田淸成と云ふ人が亞米利加へ出掛けて行くと、其の時に森有禮氏が公使であつて、外債論に反對して、吉田の借財に關する使命を無駄にして歸したことがある。其の上に西南役を經て非常な財政の紊亂を來したけれども、大隈伯の不換紙幣發行策で、遣繰して困苦を凌いで來て、さうして松方侯などの堅固な兌換政策となり、日淸戰爭までには漸く財政の基礎を立て得たのである。支那は之と異つて、各省が從來借りて居る負債は、多くは外債である所からして、日本の各藩が大阪の資本家から借

りた者のやうに、棒を引いて義務を消滅させると云ふ譯には到底いかない。其の上に革命に次いで各省が財政に苦しむと云ふと、前にもいふ如く袁世凱の大風呂敷的の懷柔政策の結果として、それに對して隨分苦しい工面の外債を分配して居る。さうして外國からは際限なく借金が出來るものと思つて、已に五國借款の二千五百萬磅や、クリスプ借款も瞬く中に銷費してしまつて、又々大借款の計畫をして居る。それにも係らず、支那公債の外國市場の價格も下らず、五國の方でも、財政上全く支那を見限りもしないのは、支那が大國で、日本の維新當時の如く財政上外國に信用が乏しいと云ふやうなことも無し又其の國の天産が富有で、外國人の狙つて居る所であるから、それで案外容易に借金が出來るのであるけれども、此の借金の出來るのが卽ち今日の支那に取つて一つの不幸で、淸朝の末年からして既に外國が競爭して金を貸附けやうとする傾きがあつて、今日袁世凱の政府になつても、此の風が猶ほ止まない。それで西洋に於ても幾らか支那の爲に親切に考へ、又世界の大勢上からして極めて着實に東洋の問題を考へて居る新聞などの議論は、支那の借款が際限なく增加して、結局其の危機を來すに至りはせぬかと心配して居るけれども、中には自國の一時の利益さへ圖れば、跡はどうでも宜いと云ふやうな政策を執つて居る國もあるので、今以て支那に金を貸す競爭が止まないのである。併し支那の財政が何時までも回復せずして、紊亂に紊亂を重ねて、到底手が附けられなくなれば、勿論貸附を引締めるのが當り前であるから、遠からずして列國が覺醒して貸附競爭が或は止むかも知れぬ。但し袁世凱の政府から考へると、目下の處、背に腹は換へられないやうな危急の場合で、兎に角借款で以て一時を凌がうとして居るのであるから、今暫くの間は如何なる方法を取つてゞも借金をして一時は凌ぐにした所が、下痢患者に固形の營養物を與へる

やうに、益々其の病勢を激しくするばかりで、結局財政の基礎が立つ見込がない譯であるから、若し袁世凱若くは熊希齡などのやうな人にして深遠なる財政上の考があるならば、今日に於て眞に財政に關する將來の方針を立てなければならぬのではあるまいか。

尤も袁世凱の目下の所では兎に角借款によつて一時財政を彌縫して其の間に支那の統一を圖り、統一をした上で全體の政務の整頓をすれば財政上の整理も出來、さうして永遠の基礎が立つと思つてやつて居るに相違ない。現に熊氏の施政方針などにも、此の意味を見して居るが、併し果して袁の中央集權政策で統一が出來るであらうか、是が大なる疑問である。前にも言つた通り、袁世凱の統一が威力統一であれば、無論中央集權政策が成功するのである。我々も清朝の末年に於ては、支那の如く尾大掉はざる形勢に陷つて居る國は、どうしても中央集權を必要とすると考へて其當時は曲りなりにも清朝と云ふ二百年來の積威を有つた中心があるのであるから、それが發奮して、中央集權策を取れば、統一力の振起せぬこともあるまい。もし中央集權さへ成功すれば、各種の改革も着々緒に就くであらうと思つたこともあつたが、第一は西太后と光緒帝が一時に崩御し、第二は張之洞の若き元老が死んで、中央の重さが急に減じた上に、宣統年間の新政が無方針、無定見で、自ら亡滅を速いで、最早國政の中心といふものがなくなつてしまひ、それに代つた袁世凱は依然として威力統一をするだけの準備も膽力も無い。第二の革命亂を經て、多少威力統一の一歩に近付いたやうな所もあるけれども、それさへ自から使用した張勳が南京に入れば、今度は其の張勳の位置を動かす事にさへも困難をして、手を代へ品を代へて、長江巡閲使といふ閑職に祭り込むだとかいふのであるが、實際は單に南京を退去させた丈で、張勳は依然萬餘の兵力を擁し、其上長江の舊式水師の兵船やら、南洋の艦隊の一

部までも要求し、長江の沿岸の砲臺をも占領せんとして居るやうである。是では反て南方に餘計な繒背の知れない兵力を野飼にしたやうな結果になる。湖北の黎元洪は好人物で、袁世凱に好意を表して、或は自分の地位を抛つて、廢省を實行させるともいはれ、遂に湖北を棄てゝ袁世凱の懷に飛び込んで、運命を其手中に託してしまつたが、しかし湖北の問題は黎元洪一人の問題ではなくして、黎元洪の過去は單に湖北の勢力の代表者として置かれたでのある。湖北の地方が悉く袁に服從を甘んじて、國會をも無視し、單に中央政府の權力を大きくするといふことに贊成するやうになれば知らぬこと、湖北の地方に依然として一種の主張があり、共和國肇造の精神が存在して居ればたとひ黎元洪の地位を動かし得たとしても、袁世凱の兵隊がそれに代つて湖北を鎭撫することになつたとしても、結局湖北の民力に依つて其の軍隊を維持し、地方と軍隊との關係が密接して來るに隨つて、何時まで袁世凱に服從するかと云ふことは疑問である。南京に於ても張勳に代つて馮國璋が其處を鎭撫することゝなつたとしても、元來が袁の部下といふよりは、清朝に恩義のある關係もあり、軍隊の費用を袁の手から金を貰はずに、地方の收入で維持して行かなければならぬと云ふことになると、地方の鄕紳なり、近頃では新進の志士、學生の思想が重視せらるゝ世態になつて居るから、之に耳を傾けねばならぬことになるからして、自然地方人の意見が、知らず〳〵軍隊に熏染するやうになつて來て、どこまでも袁世凱に服從するかどうかと云ふことは分らないのである。詰る所支那では此の革命の亂に依つて、今まで清朝が强弩の末勢で、辛うじて維持して居つた形式上の求心力を全く破壞して、さうして數百年來漸々惰力でもつて盛んになつて來た遠心力が、急に現はれて來たのであつて、今日に於て單に中央政府から一時金をやるとか、それから袁世凱の人格とは云

はれないかも知れないが、兎に角其個人的吸引力で、中央に對する地方の關係を清朝時代の有樣までにさへも戻さうと云ふことは、餘程困難になつたのである。

袁世凱の直接關係のある軍隊は、目下幾萬かあらうけれども、それを地方に派遣して地方と軍隊との關係を生じさせることになると、其の軍隊は皆多少地方化すると云ふことは免かれない。況んや今の軍隊と云ふものは皆雇兵である。併し立憲政治の國として、いつまで此の雇兵の維持が出來るか、尤も亞米利加の如く現在でも雇兵の制度を採つて居る所もあり、英吉利などの如く長く義勇兵でもつて維持して居つた國もあるので、又支那に徵兵制度を布くなどゝ云ふことは無論當分出來もしないけれども、如何に雇兵にしても、兵士に多少教育を施すことの必要は、清朝の末年からして、已に袁世凱の新軍に於ても感じて居つたので、縱令外國に對して防禦力を備へることは、支那の軍隊に依つては當分望みが無いと云ふことを、支那の政府が覺つて、單に內地を鎭撫するだけの兵隊を造らうとするのであつても、從來のやうに、兵隊と無賴漢と一致して居ると云ふやうな意味の兵隊だけを何時までも維持しては居られぬ。幾らか教育を受けさせると云ふことになり、若くは教育のあるものを募集すると云ふことになると、此の教育と云ふことゝ、それから自由思想と云ふことは、どうしても或る程度までは決して分離することの出來ないものであるから、一國の人心を繫いで、政治上の中心になる皇帝もないと云ふ今日の支那の狀態に於ては、此の教育のある雇兵が、いつまで袁世凱の政策に服從するかも疑問である。若し又更に進んで徵兵制度でも施行することになつたならば、どうしても地方人の意見によつて軍隊の精神が動かされることは勿論であるから、地方から募集された兵隊が袁世凱に皆服從するとは到底考へられないのである。今日で

は現存の軍隊に依つて、袁世凱が政策の基礎を立てゝ居るであらうけれども、軍隊精神の將來を考へれば、袁に取て最も賴みになりさうな軍隊の方から見てさへも、袁世凱の政策が決して永續すべき安全のものでないと云ふことが知り得らるゝのである。それで袁が今まで借款によつて得た財力で收攬して、其の部下と信じて地方に派遣する軍隊が、地方と關係を有つ每に袁に對する心が薄くなると云ふことであれば、詰る所軍隊に依つて中央集權を行ふと云ふことは、結局見込がないと云つても宜い。又袁世凱も何時まで借款に依つて軍隊の甘心を繫ぐと云ふことも出來る筈がない。さうすると威力統一と云ふことは、殆んど今日に於て見込がないので、將來支那が纏つた一國として成立つと云ふことの希望は、詰り革命の爲、其の他外國の壓迫の爲、いろ〳〵な事からして、支那の人民が覺醒して、其國をどうか一國として成立たせたい、外國の分割を免かれやうと云ふ所に愛國の熱情が生じて、それを基礎に統一するものと期待せなければならぬ。其の代り此の統一は各地方の利害と衝突しない、統一力としては極めて薄弱ではあるけれども、分離しないと云ふ丈を程度とする所の統一であるので、今日までの地方制度の變遷から生じた現在の狀態から考へると、一種の變形した聯邦制度のやうなものを國の基礎として、それに依つて統一をしなければならぬ。尤もかうすれば中央政府の權力も極めて小さい代りに、中央政府の義務も小さくするが宜いので、中央政府の財政も非常に縮少すると云ふ處に、國是の根本を立てるより外に途はなからうと思ふ。

今日に於て袁世凱其人にしても、茲に深遠な慮を運らして、さうして到底威力統一の見込がなく、財力で懷柔して地方の人心を繫ぐことも、最早繼續する見込が無いと覺つた以上は、今までの政策を全く改めて、地方の財政は成るべく地方に依つて維持し、其の代り地方の習

慣も重んじ、地方の獨立をも認めることを根本の主義とし、地方に於ても今より以上無謀な借欵もしなければ、中央政府に對抗する爲に必要としたやうな軍隊をも、自ら地方政府の力で解散し、中央に對する敵意を全く水に流して、各々其地方の行政財政の基礎を立てる。これが將來の支那が執るべき政策の第一義であると思ふ。

清朝といふ朝廷でもあつて、昔し强大であつた國の體面を維持しやうといふ我慢でもある間は、不必要な領土の保有も已むを得なかつたこともあらうが、それでさへ李鴻章の如き其實力を知覺した政治家は、何時でも領土の縮小を犧牲としても、外國と平和を保つことを主としたのであるが、此の深意は張之洞や曾紀澤の若き人物でも了解しなかつたので、況んや袁世凱の若き、猿智慧で大局に通ぜず、大計を知らぬ機會主義の政治家には、語るに足らぬ所で、恐らく今でも清朝の滅亡が、其の一大原因を利權回收論に發することを悟るまい。しかし今日に於て深識ある政治家は、將來廿年位は支那が絕對に國防の必要がないといふことを、最も先づ知らなければならぬ。現に露西亞とか英吉利とかゝら、蒙古とか西藏とかを侵略されたとしても、之れと兵力で對抗する力は絕無と謂つても宜いのである。支那が全く國防を廢しても、其侵略される土地には制限があつて、決して其の獨立を全く危ふくするやうな事には至らない。是は列國の均勢の御蔭である。又四十個師團や五十個師團の兵力があつたとしても、其の素質も大方は知れて居り、日本とか露西亞とかゞ、斷乎として之を亡ぼす決心であれば、とても防禦の出來るものでない。其他の列國は日露兩國のある以上、支那の本部に指をさゝれる筈のものでない。それだから外國に對して兵備を維持する必要のないことは、熊氏の施政方針にも言て居るが、又地方に對して威力を用ゐる實力も已になければ、其の必要も亦全く無い次第だとすると、今日の如く袁世凱が部下

に幾萬の兵力を有つて居ると云ふ必要が無くなつて、大に陸軍の減少を圖るも差支ない。熊氏の方針でも五十萬などゝいつて居るが、事實は二十萬も要しないのである。日本が朝鮮を經營するのに一個師團半の兵力で、それさへ實際は裝飾に過ぎないので、眞の內地統治の機關としては、一郡に十數名の憲兵で十分なのである。支那も內治本位とすれば、各省の要處に一個聯隊位づゝの兵力を二三個處も置いて、十分の訓練を施し、やゝ大なる匪賊の勃發に備へて置けば、其他は一縣に二三十名の巡防兵を軍隊の中から撰拔して、縣衙門の護衛とし、其以下は鄉村の自治團體に、地方の警備を任じても決して危險な事がない。元來が政府を信用しない支那の社會組織は、比較的自治團體が發達して居ることが、一つの長處である。淸末の先識者たる馮桂芬といふ人は、宗法を復することを以て、自治團體の組織を完成させんとの論で、山東、山西、江西、安徽、福建、廣東の各省は、一族の團體で割據して居るが、其の强い宗族が橫暴をするといふ弊害もあるけれども、其の利用の方法によつては、自治の基礎を立てることが出來るといふことを認めて居る。江蘇、浙江などのやうな商工業の發達した地方は、之とは趣を異にして居るけれども、是も支那に已に發達して居る同業組合の組織、農村の保甲制度などを基礎としたならば、決して自治制の行はれないといふことはない。其の上に鄉官制度にして、知縣以上の官吏も地方の利益に同情を有つことゝなれば、始めて數千年來の積弊が一掃されて、支那人民の救濟が出來るのである。此の大なる利益は、統一力の薄弱とか、國勢の一時不振とかいふこと位に換へられないと思ふ。それで中央政府では、今日袁世凱が一時政府を維持する基礎として居る官業即ち交通部例へば鐵道の收入を根柢としてやつて居るやうな政策を姑らく繼續するものとして、それに各省と融和せる以上、淸朝時代の半額位は地方の送金があるものとして、

小さい中央政府を維持し、成るべく外國の借欵に依らずして財政の基礎を立てる。今日に於ては倘多少の借欵をしなければ凌げないことは、勿論であらうけれども、將來の財政の基礎を借欵に依らずして立てることにして、歳出入の調和を得るやう考へ直さなければならぬ。現狀では清朝の昔に返しても、收入が三億萬そこ〳〵で支出は其の倍數をも要するといふことであるけれども、それは即ち中央集權で統一しやうと云ふ政策であるから此の如く多額の費用を要するので、各省の獨立財政を認めて中央政府と云ふものもあまりそれに依賴せずに、財政の基礎を立てること〻、消極的に考へて行けば、今一年や半年のことは暫く措いて、其後は外債に依らぬでも、財政の維持が出來ぬやうなことはない。尤も到底中央政府の信用で之を維持する丈の地方送金が得られぬとすれば或る種類の徵稅例へば釐金を存するとすれば釐金、其他契稅、又新設の見込ある通行稅印紙稅煙酒稅等の管理を列國の人々に委任すること、猶ほ海關などの如くするも、一の便法である。鹽稅なども外國人の手に歸すれば、外債擔保以上の收入を得て、中央政府の財政を裕かにすることは疑もなき事である。但し熊氏が計畫せる營業稅、所得稅、遺產稅等は、行政の今一段整頓する迄は、成功の見込がない者である。

現在熊希齡內閣が執つて居る政策は、一方には省を分割して行政區を小さくして、中央政府の權力を大きくしやうと云ふのに、一方では軍隊の數を減らして、經費を節減しやうとして居る。是等は今日の窮境から已むを得ざることであつて、それより外に袁政府の立場としては致し方がないのであらうけれども、實際其の政策は自ら相矛盾して居るのである。中央集權を行らうとするならば、軍隊を減少することは決して出來ぬ。軍隊を減少しやうと云ふならば、中央集權の政策を廢さなければならぬ。茲に於て今の熊希齡內閣の方針に根本の

誤謬があると云はなければならぬ。今日に於て其のどちらかを罷めると云ふことであれば、中央集權主義を抛つて、全然消極政策を以て基礎を立てるより外に途がないのである。唯地方の各省が其の地方の收入で財政を維持して行くと云ふことになるに就いて、いろ〳〵差支のあることがある。一つは土地の肥沃な、天產物の多い各省は、獨力で財政の維持が出來るけれども、從來獨力で財政の維持の出來ぬ各省もある。例へば東三省やら、新疆などは、まだ其の將來の運命が知れぬ者として除外しても、廣西とか、貴州とか、それから陝西、甘肅とか云ふやうな地方になると、從來でさへも既に各省からして補助を受けて、それで財政を維持して來たのであるから、今後に於ても獨力では財政の維持が出來ぬといふ理由があるのである。それ等は極めて弱い統一であつても、支那の統一を維持して行かうと云ふには、どうしても清朝の時の如く、それに對して豐富なる他省から補助をしな

ければならぬ。今日の支那の人民の愛國心が如何なる程度にあるにしても、結局其の低い愛國心に訴へるより外に途がないので、幸ひにも革命を起した各省、例へば江南地方とか、廣東とか、湖北とか云ふ地方は、矢張り革命を起すだけに、最も人民の智識も進步して居つて、國家に對する義務をも辨へて居るのである。それで支那の統一を維持しやうと云ふ上からは、多少本省の費用を割いても、それ等の維持の出來ぬ省を補助して行かなければならぬと云ふことを了解することは難くないことであらうと思ふ。

かくの如く一面には貧乏なる各省をば補助すると同時に、一方には又各省に於て各々其の財政を支持して行かうと云ふことになると、豐沃なる各省でも稅制の改革をも爲し、財政上の基礎を鞏固にして、永久の維持の出來る方針を立てなければならぬ。勿論立憲政治の基礎は、支那の如くまだ工業などの發達しない國に於ては、農民に置く

より外に途がないのであるから、農民が從來よりも大きな負擔をもしなければならぬことは已むを得ざることであらうと思ふ。それで從來から地租を根柢として、財政を改革しやうと云ふことは、ロバート、ハートなどからして、既に其の論があつたので、其の外に多少雜税を起したにしても、財政の最大なる基礎は農民に求めなければならぬ。支那の農民が中央政府に對して有つて居る負擔は、決して重くはない。唯政治の組織が悪いから、所謂官吏の中飽の額が大きいので、結局は相當の負擔をして居ることになるが、斯の如き弊政は今日に於てどうしても改革しなければ、支那の革命は、實は何の意味も無くなるのである。それには各省が各々其の自治主義の政府を立てゝ、てうど政治上手の行屆くだけの區畫に於て統治をすれば、今までの支那の中央政府が各省に對して、大きな領土に於て空文の命令を下しても、更に實行が出來ぬ爲に、目的の政策を達することの困難であると云ふやうな憂は減少するであらうと思ふ。

日本では維新の際に幸ひなことは、斷然たる改革に依つて郡縣政治を施行してから、農民の負擔は實際減少したのであつた。日本のやうな狹い所で、二百六七十藩もあつて、各々それが大名と云ふ貴族に依つて支配されて居る間は、餘程農民の割合の好い所で六民四公と云ふ收入の割合であり、甚しい所は六公四民ぐらゐの割合で、農民は非常に重い負擔をして居つたものである。それが各藩を廢し、多數の貴族を事實上なくしたが爲に、人民の負擔が大に減じた。地租改正の時は農民の誤解からして騷擾もあつたけれども、其後海外貿易が漸々發達してそれに伴れて、土地の價格、穀物の價格なども增加するに從つて、農民は非常に輕い負擔を有つて居ると云ふことになつて來た。今日に於ては幾度も戰爭を經、國債に對する負擔が隨分增加したけれども、維新の際は實際農民の負擔は減少した。これが安全に財政の

基礎を立て得た所以で、或期間の財政は無事に順調に向つて來た、卽ち西南戰爭以來、日淸戰爭までの間は、年々に歲計の上に於ては、其の膨張を見たけれども、其の實金銀の比價の變遷から考へ、又人民の所得の年々增加して行く割合に較べては、國民の負擔は、年々減少して行く傾きがあつたのである。今日の支那に於ては、それとは少しく事情が異つて、各藩と云ふやうなもの〻廢すべきものもなし、士族と云ふやうな政權を握つて居つた階級を廢することも出來ないので、直接に人民の負擔が減ずべき條件は備はつて居らぬやうであるけれども、若し革命の際に於て、從來の政治の組織を一變して前にもいふ如き官吏の生活狀態が改まり、一切平民的になつて、其上從來の盲判を押す機械のやうな官吏と、人民との間に財政の眞實の機關を壟斷する吏胥と云ふ階級が橫はつて居つて、所謂陋規を楯に取つて、官吏の收入も、自分等の收入も殖す所の民政請負組織を、根柢から廢絕せしめて、日本の如く格別厚くない收入で、官吏が自ら事務を取扱ふと云ふことにすれば、支那に於ても實際人民の負擔は減じ得られぬことはないのである。支那の民政の大なる弊害は、天子の命官と政務とは、其の間に懸け離れた境目があつて、其の境目に居るものが政務を壟斷して居る、さうして官吏は單に政府の收入並に自己の收入を圖る職業であり、官吏と人民との間に、商賣上の所謂コンプラドルのやうな組織のものが政治上にもあつて、官吏と人民と兩方の死命を握つて居る組織である。此の如き組織では到底立憲政治の基礎が成立たぬのであるから、革命の際に其の組識を一變すると云ふことが必要であつた。實は其の方から考へて、我々は支那の人民の幸福、それから支那の政治の根本的改良と云ふことの爲に、革命黨の成功を望んだけれども、今日では其の希望は破れたのである。そこで今日に於ては、支那の各省といふ餘り大きくない區畫に於て、大きくないと云つ

ても、支那の各省の大きいのは、日本とか英吉利とかよりも大きいのであるから、相當に大きな領土であるけれども、謂はゞ善い政治を行ふと云ふことは、原則としては其の領土の大きさに制限があると云つても宜い。際限なく大きな領土を有つて、隅から隅まで行屆いた政治を行はうと云ふことは、到底出來ないのである。支那の各省は各々獨立して善き政治を行ふ爲に、丁度相當の領土といふべき形であるから、此の區畫內に於て、民政に對して、細かな點まで改革の行屆くやうにしたならば、數百年來の官吏と人民との間にコンプラドルが挾つて居る弊政を改革することが出來るかも知れぬ。是れが出來て、官吏は人民を直接に統治するもの、人民は其の統治者として官吏に直ちに接觸することになれば、人民の負擔も減じ、各省で各々財政を維持しても、格別苦しまなくなるかも知れぬと思ふ。

是れが財政改革の一端であるが、其の外に又支那の全體から通じて見たならば、尙考ふべきことがあるかも知れぬ。支那の從來の經濟上と云ふよりか、寧ろ人民の生活狀態の發展を考へて見ると、一種異つた徑路を經て來て居るやうに思はれる。歐羅巴のやうな、餘り土地の肥沃でない、中央に山脈の結簇があつて、それから八方に分派して居る爲に、其間の盆地、低地間の交通路も甚だ平坦でない處へ出來た各國、それが又同じやうな地勢が一國を成した日本の若き處から考へて見ると、若しも海の利用卽ち歐羅巴に於ては地中海、日本に於て瀨戸內海といふ者がなかつたならば、交通は非常に不便に、土地も亦瘠せて居る。其結果として、已むを得ず人工を用ゐて、天然の不便に打勝つて發達を圖るといふことに傾いて來るので、工業の進歩をも、その爲に促して來る。日本は支那との交通は久しいものであるが、日本に產出し難い物、例へば藥劑のやうなものは、皆支那から輸入するものと考へて居つたのであるが、德川時代になつて貿易の制限をしてか

ら、日本で人工的に藥種を栽培することになつた足利時代に於ては支那の生糸を盛んに輸入して、之が海外貿易の重要な物であつたが、德川時代になつてから日本の糸の產出も盛んになり、隨て織物も發達して、近代に及んで歐米の貿易が開ける頃には、幸ひにも生糸が日本の重要な輸出品になる程の發達をして居つた。其の外總て人工的に物產を發達させる傾きが、德川時代に盛んに興つて、殊に日本の狹い國土の中で、又各藩が其の地方に於て、各々物產の發達を圖つて、其交通不便の爲に受くる損失を償はんとした。尤も日本では此の手工以上に、眞成の工業も發達せず、農家の副業以上に生產業も發達しなかつたとは云ひながら、織物も各地方に興り、綿布も全國一般に產出が善く行渡つて居つて、人工で物產を生ずる基礎があつたが爲に、明治の代になつても海外貿易をすることになつても、此の萠芽が發育して、眞の工業の發達を企圖するやうになつて、今日紡績業などの發達

は、久しい間の經濟上の歷史から來て居ると云つても差支ない。歐羅巴では近代は全く工業の世になつたのであるが、其の工業が獨立して發達した、卽ちマンチエスターの發達などは、矢張り最近世の事である。歐羅巴でも中世に殖民地新發見の盛んな頃は、殖民地といふものは濡手で粟を攫むやうなやり方で、富力を增進し得べきものと考へて居つたのであるが、段々殖民地が成熟すると、次第に奇利は減じ、隨て殖民地の經濟も平常に復すると同時に、政治上にも殖民地が獨立することが盛んに流行り出し、亞米利加の獨立のやうなことが出來、結局世界中何處へ行つても、濡手で粟を攫む如くに儲かることは困難だと云ふことが、經濟上の原則になつて來ると、玆に始めて工業の發達を來して、今まで殖民地は天產品の採集地として考へられたのが、今度は工業の材料、卽ち粗製品の輸入地にして、又精製品の輸出地となつたので、毛織物の產出も從來の毛皮などのやうな高價な天

產物の代りに廉價にして使ひ得るやうになり、紡績業の發達も、從來高價な絹の輸入の代りに廉價な製品を代用すると云ふことで、無限に使へば盡きる患ある天產物を利用すると云ふ譯でなく、又得難い物を遠方から取寄せると云ふ譯でないから、漸々生活の狀態が廉價にして爲し得らるゝと云ふことになつて來た。此の工業製品の普及の結果は、貴族と平民との生活の階級に大差が無いやうになつて來るので、工業の進步、卽ち平民の進步で、近世文明の眞成の意義をそこに現はして來たのである。支那ではそれと違つた所がある。支那は今日では如何にも交通不便の國のやうであるけれども、若し是れが鐵道も汽船も無かつた時代として考へると、支那の如く交通の便利な國はないのである。廣大なる沃野の間を、黃河、楊子江といふ二大河が流れて居つて、南船北馬と云ふ諺のある如く、南方は何處までも船で交通が出來る。又北方は何處までも自由に馬で交通が出來る。馬といへば車の利用といふ義で、車同軌といふことを一統の理想として居る位で、日本や歐羅巴の如く、車を利用し得ない山道が多いとか、船を利用し得ない溪谷の急流があるとか云ふものとは全く違ふ。それに氣候も溫暖で、天產物が非常に豐富である。それだから支那の官紳の生活と云ふものは、務めて遠物を致すといふのが其の誇りで、又務めて天產物を利用して、それで贅澤なる生活を營まうと云ふのである。一領の衣服に用ゐる毛皮の爲に幾千金を費すとか、或は珠玉などの如き調度品に大金を費やすと云ふやうなこと、又遠物を致すと云ふことを非常に貴ぶ。一夕の宴會があつても、日本の海產物もあれば、南洋の海產物もあり、果物にしても廣東の茘枝も、直隸の棗も皆あると云ふやうな譯で、兎に角遠方の天產物を自由に使用して、豪奢な生活をしやうと云ふのである。斯う云ふ生活の方法は支那の如く古代から比較的交通が便利で、商業の發達した國であつても、矢張り遠物を

致すには莫大な費用を要する譯だから、生活の根本に金の掛ることは案外なものである。幾千年來商業が發達して居るから、滿洲地方に居つて蘇杭の絹織物を平氣で着て居るとは云ひながら、其産地と滿洲に於ける價格を比較して見ると、非常に差があるのである。支那で工業と云へば、江南地方の絹織物などは幾らか之に近く、産額も大なる者であるけれども、實は或る階級の人の需要に應ずる爲に價格を問はない、手工品を造る組織であつて、江南地方は一種の絹織物の專賣權を得て居るやうな形を成し、北京に居る皇族から官吏から、支那流の一種の貴族階級は、皆專賣の高價な手工品を着て居るのである。要するに天産の豐富と、從來交通が便利であると云ふことゝ、幾千年來商業の機關が割合に發達したと云ふことからして、貴族的生活にさう云ふものを用ゐるのが當然となつて居るので、眞成の工業の發達を來さないのである。斯の如き社會では、低い階級の人民の生活は、餘程質素にしなければならぬことは勿論で、支那人の生活の上下の間の差は、日本に比して遙かに大きい、其の代り細民の困難を救濟する必要をも認めて居るが、それも農業本位の經濟を脱しないので、穀物の輸出入に禁放の手加減を保留して居る。卽ち各地方官が其の地方で天災とか饑饉とかがあると、其管內から穀物の輸出を禁ずることは珍らしくない例になつて居るが、それを全國に應用して、矢張り穀物を外國には輸出しないと云ふことを原則にして、それで細民の生活が高價にならぬやうにしやうと云ふ考へであつた。所がそれは外國と關係の無い時に於ては或はそれに依つて細民の保護も出來たのであらうけれども、今日のやうな四海に交通する世の中になつて來ると、是は全く盲目の政策であつて、若し此の穀物の解放を斷行したならば、農民の生活程度が向上する傾きは、確かにある。勿論それが爲に一部分の細民の不幸を、一時は來すのであらうけれども、農民の

生活程度が向上して、其の爲に官紳たる貴族の生活と農民の生活との間に大差が無くなつて來て、絹帛綿布等の製產品を需用することが增加するから、そこに工業の發達と云ふことも出來る。工業が發達をすると、幾らか一般生活程度の向上の爲に苦しむ人民の救濟も出來る。勿論經濟上のさう云ふ大なる變革を來す際に、工業が起つたが爲に、それに使役される職工として收容される人間の數には限りがあつて、非常に多數の細民を救濟すると云ふことは出來にくいので、英吉利の工業の發達の際に生じた多數の失業者が、今日殆ど救濟の見込が無い倫敦の貧民窟を形つたのである。支那でも多少かういふ弊は防ぎ得ないことであらうが、全體の經濟から考へて見ると、農民の生活が向上し、それが爲に工業も發達すると云ふことは、どうしても起つて來なければならぬのである。

それで支那の經濟の改革を圖る爲には、今日に於ては穀物輸出の禁止を解く方針を立てることが、一の重要なる問題であると思ふ。支那が穀物の輸出を解放すると云ふことになると、日本などゝは遙に異つた結果を生ずる。日本は土地が瘠薄なる山國であるが爲に、如何に農業が發達しても、耕地には制限があるけれども、支那の如き莫大な沃土を控えて居る國は穀物輸出を解放すると、其の產額を激增すること豫期せらるゝのである。既に江南地方に於て、繭が海外輸出をすることになると、輸出をしなかつた時代よりかは、幾倍の產額を增加して居る。滿洲地方に於て大豆を輸出することになつてからは、今日に至るまで其の產額は幾十倍の增加を來して居る。是等は從來殆ど豫測して居なかつた所の產物であつて、それが又鐵道其の他の交通機關の發達と共に、益々生產力の增進を來すのである。斯う云ふ風にして農民の生活を向上すれば、又農民の負擔を增加しても差支ないのであつて、詰りさう云ふまだ潜伏して居る各省の財源があること

を知つて其の發展を求めたならば、各省に於ても其の收入の不足の爲に何時までも困難すると云ふこともあるまい、是等も十分に考量せなければならぬことである。要するに支那の將來の財政の改革と云ふものは、矢張り世界の大勢に從つて從來の方針を全然改めると云ふことの必要を生じて來るであらうと思ふ。

其の他に於ても種々困難な問題があるのであつて清朝の時からして既に計畫をして、今日に至るまでまだ十分に行はれないのは貨幣制度の改革である。今日でも幣制の改革を企圖して居るけれども、まだ出來べき見込も十分でないやうであるが、是が縱し愈々貨幣制度改革の資本を得て、着手すると云ふことになつても隨分困難なことであらう。それは度量衡制度の不完全なること、それから各市場に於て銀の相場などの均一でないこと、例へて云へば上海には上海の兩と云ふものゝ相場があり、天津には天津の兩があり營口には營口の兩があると云ふことで、到る所相場が異なつてあり到る所用ゐるところの度量衡をも異にして居る。之を統一すると云ふことは從來の習慣を全く破らなければならぬことで意外に困難なる事には相違ない。併しそれは日本でも矢張り同一であつたので、徳川時代の各藩は各々の紙幣が行はれて居り、又時としては各々異つた銅錢も行はれて居つたが、維新の統一からして、全くそれを改革してしまつた。支那に於て更に困難な點は、日本は政治上の根柢から出た相異であるのに、支那は元來商業上の習慣から來た相異である事であらう。併し結局之は畫一制度を斷行して、其の不便を切り抜けるより良法はあるまい。支那に於て其の内部の商業の盛んであることは、日本の從來の徳川時代の比ではない。從つて商業上の習慣は、其の淵源が深くして、日本などよりかは遙に之を改めにくい事が多くあらうけれども、是等も或は政治上の弊害が關係をして居るかも知れない。最近數年

間の經驗によつても、財政改革と云ふ美名の下に、各省の官吏が變革を機會として、私腹を肥やすやうな方針を執つたのである。一例は各省に一時流行した銅元の鑄造である。從來の制錢の代りに銅貨を製造して、それに代へたのであるが、勿論經濟上の便利よりかも、官吏の方針から出たので、銅貨を無制限に濫造して、從來の銅錢と引換の際に利益を得るやうなことを圖つたので、銅元過剩の爲に市場を攪亂した弊害はあつたけれども、其の結果市場に銅元が充滿して、從來の孔錢は殆ど跡を絶つた。それだから財政の改革を決行して、中央に信用のある銀行を立てゝ、確實な兌換制度を行ひ、又度量衡の統一をも圖つたならば、是等の弊害は或は除き去ることが困難でないかも知れぬと思ふ。支那人は商業が久しく發達して居つた代りには、其の商業上の計算は非常に鋭敏であつて、商業上に損の無い制度でありさへすれば、即ち經濟上人民の損失にならない制度でありさへすれば、日本人などよりも喜んで之を利用する傾きがある。唯商業上の習慣に依つて、各市場に又新らしい貨幣に對する一種の相場を生ぜぬと云ふことは逆じめ料られない。それで例へば上海で通用する一圓が、天津へ行くと一圓で通用しないと云ふやうなことなどにならぬとは限らぬけれども、政府と人民との間の取引の關係は、官吏の私腹を肥やすことが止んで、さうして制度が正しく行はれさへすれば既に元の時などに於ても、兌換制度が旨く行はれて、紙幣が通行して硬貨を鑄造せぬでも用が足りた位である。是は必ずしも困難な改革ではないと思ふ。

財政の根本も、矢張り政治の根本と一致するのであつて、今日の所では中央集權主義の政治中央集權主義の財政と云ふものは成功する見込が乏しくて、矢張り地方分權でやつて行く方法が成功するに近いと思ふ。是は袁世凱がやつても、或は革命黨の人がやつても何人が

やつても同じことであつて若し非常な天才、卽ち佛蘭西の革命の時のナポレオンのやうな豪傑が出て、そうして政治の根本を其の天才に依つて根柢から覆へすでなければ、必ず自然の必要上我々が考へた如き落着に至る者と思ふ。

五、内治問題の三

政治上の德義及び國是

凡そ革命以來、熊希齡氏の施政方針發表に至る間の支那政論の經過を考へ、之れを清朝末年の政治に較べて見るに、或るものは其の時より一段進歩した思想になつて居り、或るものは其の時の方針を踏襲して居り、又或るものは其の當時よりかも退歩に傾いて居る。卽ち外交に關しては熊氏の施政方針に據て見ても、國家の獨立を妨げず、且つ比較的利益の交換を爲し得る範圍では、外國とは成るべく懸案をも早く片付るやうにし、難義なる交渉の起らないやうに努めても、外國から堪へられぬやうな要求を加へらるることは斷じてあるまい

といふので、どうかすると從來の領土を固く保持すると云ふ主義をも幾らか拋棄して、內治を專心にしやうと云ふ意見のやうで、今日內治の艱險は更に外交より甚しと言て居る。又實業の方針に就ても熊氏の考では、外國商人の支那に投資する者は、其生ずる所の利益は彼の得る所は三四にして、其六七は我の手に得る處なれば、政府は國民と共に之を歡迎せんとすと言て居り、又交通上の事、卽ち鐵道、航路、郵便、電信の擴張に關しても、政治問題に雜入せざる限り、外資の投入を喜で迎へると言つて居る。淸朝の末年に謂はゞ淸朝を亡ぼした所の主義は、一つは利權回收論であり、一つは中央集權論である。利權回收論が盛んになつてから、其の實力をも計らず、又適當な經營の法をも講ぜずして、鐵道、鑛山、其他總ての權利を自分の國に回收し、それに就ては外國の感情をも害し、困難な關係を生じても、體面を維持しやうと云ふ考であつた。其の結果として、一時領土に關する方針なども、益々其の取締を緊肅して、今日では外國との關係上或は到底支持し得ないかも知れぬと思ふ位の土地で、其の當時からして、管理の行屆くべき見込も立たなかつた處をも、強て新らしい府州縣等の行政區を設置して、嚴重に之れを監督しやうと云ふ考であつた。併しそれは實は支那に取つては非常に不得策なことであつて、支那のやうな現在財政の窮迫を感じて居り、領土を防護する兵力も無し、又經營の人材も乏しい際に於て、外國との交渉を滋くしても手を擴げると云ふのは、最も危い途であつたのである。それで今日此の外交問題、殊に領土問題などに、袁世凱の政府卽ち熊希齡內閣などが幾らか冷淡に傾いて來て居ると云ふのは、寧ろ進歩と云つても宜い。尤も此は袁政府の方針といふのみならずして、革命黨の領袖に於ても、大かた同意見のやうであるのは、卽ち支那の現在政治家の達識が、始めて物故した李鴻章の程度に及んだといふべき者である。是は日本の維新の際に於

ても同樣であつて、德川政府を亡ぼしたのは、矢張り當時の攘夷說、卽ち利權回收論と同じ性質のものであつたので、それが明治政府になると、飜然として手の裏を返すやうに其の不可なることを覺つて、其の當時局に當つた岩倉とか大久保とか木戸とか云ふ人は悉く皆姑らく國權の回復を後廻しとして、內治に力を盡すと云ふ方に傾いた。是れは一部論者からいふと國家の屈辱であるといふけれども、日本の政治に一定の方針を與へたのは、此時に始まつたので、僅かに條約改正の一事にさへ廿餘年の歲月を隱忍して過したのであるが、今日の勃興を來した基礎は此に在るので、歐米列國の注意を惹かない間に、國力の充實を完成して、一擧して日淸戰爭の成功を贏ち得て、それから破竹の勢でともかく一等國の列に入るまでになつた。今日の支那も其の點だけは幾らか覺つたものと見えて、今日の對外方針を溫和、隱忍に定めるやうになつたのは其の當を得たものと云つて宜い。

內治問題、卽ち地方行政などの問題は、是は淸朝の末年からして既に起つた所の中央集權論を引繼いで、其の政策を踏襲して來て居るので、更に進步の跡を見ないのみならず、其の內部の局勢が著しく變化した今日に於て、尙此の政策を執つて居ることは、甚だ危險であり且愚なることゝ考へる。既に上に言ふ如く淸朝の末年から見れば財政も困難を增して居り中央集權策の實行には益々不利益な事情を加へて居るにも拘らず、尙ほ今日の施政方針として、此の如き事に骨を折つて、專制的統一策を遂げやうとするのは動もすれば支那をして土崩瓦解に至らしむる恐れがある。兎も角も是はまだ淸朝の末年に於て起つた所の議論を其の儘繼續して居るのであつて、それより一步進んで外交策の如く時勢に相應した處置をする處まで達して居ないと云ふに止まるのである。

然るにこゝに更に袁政府の方針が淸朝の末路よりも退步せんとし

て居る所の問題がある。熊氏の施政方針の中に見えて居る吏治澄清の件、地方自治の件、司法獨立の件、教育の件などは、皆近日袁政府が執る所の退歩的方針を示す者である。支那に於ては從來地方官が其の本籍地に於て官に就くことを許さない規定がある。即ち其の土地に生れた者は其の省の官吏となることが出來ないのである。此は唐宋以來から存在した習慣で、宋の曾子固といふ人は、已に官吏が生地からあまり遠方で職に就くことの困難な狀態を說て、其の赴任の爲に種々危險を冒すことゝ、任地の風土氣候に慣れないので、落着て在任せぬことゝ、任地の人情風俗に熟しない爲に政務に失當なことの多くなることを論じて居るが、それが爲か徽宗の頃は、知縣の選任は其の鄕里より遠くとも三十驛卽ち九百里以內と定めた。然るに明代に南京、北京に兩つながら吏部があつて、南官を北京で選補し、北官を南京で選補することゝしてから、赴任者はどうかすると數千里の遠方にやられるので、着任するまでに皆負債が出來る、その土風も言語も分らぬ處から、政治は胥吏に任さねばならぬやうになる弊害は顧炎武などの評論した通りである。それで淸朝の經世家は此の如き渡り者の官吏の弊害を痛論して、成るべく鄕官を用ゐると云ふことが、一つの改革の方針になつて居つたのである。凡そ地方官が其の地方に親密な關係を有つて居るほど、其の地方の事情をも熟知し、其土地に安じて居る筈であるから、隨て人民の利益にもなる。例へば漢の時、三老とか、嗇夫とか、游徼とかいふ所謂鄕亭の職があつて縣令等の地方官と共に政事を行つて居つたので、民政が最もよく成績を擧げたのは、歷史上の事實であるから、今日も此の如き制度を復興したいと云ふ考で、それが、又西洋の自治的行政の精神に合すると言はれて居つた。然るに此の度の施政方針の中に書いてある所では、矢張り本籍に官たることは情弊が多いから、昔の制度を斟酌して、一道と云ふか、此

の度の改革の行政の區畫で云へば一州であるが、其の中には土地の者が地方官たることを廻避するやうにしやうと云ふ方針になつて居る、是等は明らかに改革論の退歩と謂ふべきものである。此の退歩は決して民政を基礎にして考へたのではない。詰り中央政府が專制的に傾く時には、鄕官が其の鄕里の利益を代表して、中央政府に對抗すると云ふことが極めて統一に不便であるから、此の如き退歩論を生ずるのであるが、中央政府さへ非常な權力を握ると云ふ野心家が立つて居らずに、地方の利益の上に中央の政府を形作ると云ふことを原則とすれば、斯の如き退歩をせぬでも宜いのである。尤も各國とも國情の相違はあるので、支那の如く國民の政治上の德義心が、數百年間の惡政の結果、既に痲痺して居ると云つても宜い位の國に在つては、幾らか歐羅巴とか日本とか云ふやうな自治制度では實際に適合しない點もないとは限らぬ。此の如き政治上の惡習は朝鮮などに於ても見受ける所で、朝鮮は昔から郡守の虐政の結果として、地方の人民が、久しい間官吏と利害相反する地位に立つて居つたので、今日でも其の本籍の者を其の地方の官吏にすると、夥しい弊害を來す傾きがある。それは朝鮮人で其の從來の國情に通じた某紳士などは、明かに本籍の官吏の弊害を指摘して居つて、今でも朝鮮では官吏を本籍地で選任しない方が宜いと言つて居つた。併し是は詰り國民の政治德義と云ふものが根本の問題であるので、到底自治的行政に依つて成立つことが出來ない程國民の政治德義が敗壞されて居るものであるなれば、支那は到底共和政治でも立憲政治でも、今日世界の最良の政治として認められて居る所の民主的政治を實行するに適しない。更に進んで言ふと、今日の文明國と同一な政治をしては其の國が治まらない。德義心なき官吏なり人民なり、それ等の者が釀す所の弊害に對する防遏手段のみを講じて居る、極めて德義の低い政治に

依つて維持しなければならぬので、さやうな國は如何に改革しても到底是は存立すべき見込が無いので、結局此の自治的政治が出來るか否かと云ふことは、極端に言へば支那が存立し得るか得ないかと云ふ問題にも關聯するのである。

又地方自治も、清朝の末年に各地方に於ていろ／＼之を實行して見た。それは日本とか西洋の諸國とかゞ國力の盛んなのは、地方自治の精神に富んで居るからである、それが立憲制の根本となるのであると云ふので、數年の間非常に急激に自治制を行はんと努めた。然るに此の度の施政方針に依ると、成績がマルで豫期に反して居つて、それが爲に從來鄕曲を武斷せる徒輩が、此の制度を楯に取つて、いろ／＼横暴な擧動を以て、一己の益を占める者が多くて、自治の效能を見ずして、其の弊害ばかり殘るやうな實際の事情になつて居る。此は皆自治制の權限も明かならず、系統も立たず、又それを實行するに十分の訓練をも經ずして、急激に之を行つたが爲に、自治制と云ふものは世間に非難されることになつて來たと言つて居るが、是等も結局は國民の政治德義の問題であるので、成程我々の實際に知る所に於ても、支那の或る地方で自治團體を組織してから之を利用して食物にする徒輩が横行して、良民は却つて其の爲に必要もない醵金を脅迫されて出したりなどするに過ぎないので、日本でもよくある所の政治上の運動を商賣にして居る者だけが利益を占めて、それ等に懷ろ手をして食ふ途を與へてやつたやうな實情にもなつて居る。但しそれでは支那人に自治の能力が無いかと云ふと、必ずしもさうではない從來支那の人民は其の治者たる官吏が、皆渡り者であるが爲に、之を當てにせずに、一村一部落若くは一家族が皆團體を成して自治をやつて居つたので、此の自治團には、義田、義倉などから、養育衞生の事業若くは教育卽ち教讀の雇入れなどまで備はつて居るのが常である。

それ故此の昔から存在して來た所の自治團體を根柢にして、舊來の習慣を斟酌し、其の上に新らしい自治制を築き上げれば、自治制も立派に成功すべき者であつたのである。然るに當局者は、其管內に自治制を施行したといふことを早く誇らん爲に、單に歐米若くは日本の制度を飜譯的に施行しやうとした、そこに自治制の弊害が現はれて來たのである。此の如き飜譯制度の急施は、日本でも幾らか同じやうな傾きがあつて、日本の郡以下町村の自治などに至つては、多少之が爲に舊來の良習慣を破壞して、德義の上に成立つべき所の自治制を、單に制度法律の上に成立たせやうとしたので、少からぬ弊害を釀して來た傾きがないでもない。併ながら要する所は日本の國民が、自治制を遂行し得る所の政治上の德義と、潛勢力とがありや否やと云ふことが結局の問題なので、一時の便不便、多少弊害の有無によつて、世界共通の美法に、輕々しく疑を挾むべき者でない。日本でも今日は尙試驗時代と云つても宜いのであるから況んや支那に於ては數年間飜譯的に自治制を行つたばかりで、其の効能を見ないからと云つて、全く自治制に失望をして、さうして昔時の習慣が宜いと速斷して、官吏が自治制に干涉する方が宜いと云ふやうな、急激な退步的意見を出すことは、或は大なる謬りではないかと思ふ。

司法制度に關することも同樣であつて、司法の獨立は立憲國の要件であるけれども一、法規の不適、二、法官の人材に乏しき爲に、已に實行した結果では、頌聲が起らずして怨聲が起り、從來の陋制を以て、却て善しとする傾があるので、已に成立せる司法官廳は之を改良整頓し、其の籌備未完の地は、審判檢察の職務を暫時行政官に兼務せしめるといふのが、熊氏の方針であるが、司法總長梁啓超は遂に此の方針によつて、淸朝以前の通りに大部分復舊することゝした。是等は支那の近日のやうな反動時代に於て免かれ難いことであるけれども、此の

如く一時の便宜のみを見て、輕々しく其の主義を變更するは政治上無定見を示すものである。一體行政官が司法官を兼ねるのが卽ち支那の長い間の民政上の弊害が伏在した所以で、朝鮮に於ても郡守と云ふ行政官が司法權を握つて居り、それから警察と云ふか、兵力と云ふやうなものまでも握つて居つたので、小さい天子のやうな形になり、日本で云へば昔の大名と同じ樣な權力を有つて居つたので、人民は爲に一日も寧處することが出來ぬやうな弊害を來したのである。それで支那に於ても元代は各路の州縣官卽ち民政官と、課稅官と、斷事官とは別々になり、明の制度にしても、一省の大さに於ては、財政官たる布政使と、司法官たる按察使とは別々になつて居るのであるが、人民に直接に接觸する下級の官吏が、皆司法行政を一手に握つて居る所から、大なる弊害を來したのである。支那では新制度によつて司法行政を分けても、反て弊害があるといふのが復舊の口實であるが、從來外國居留地などに居る支那人が、自國の裁判よりも外國の裁判に信賴すると云ふ傾きがある。外國人との關係の訴訟の時などは、如何にしても外國人よりか有利な地位を占めにくいにも拘はらず、外國人の裁判の方にはそれでも道理を認める點があつて、尙支那人の裁判よりか信賴するに足るといふので、其の方に賴ると云ふ傾きになつて居るのは、卽ち行政司法を混雜させた支那の政治が信用せられない明白なる證據であつて、是も僅か數年來の經驗に依つて、支那の民度がまだ行政司法を分けるまでに至らないからと云つて、舊の弊害のある組織に戻すと云ふのは、極めて薄志弱行の政治と謂はなければならぬ。支那の政治の改革は、いつでも反動が起ることが多いので、例へば宋代の王安石の政治改革に對しても、非常に反對が多かつたのであるが、神宗が果斷で幾年か遂行すると、其の間には反對論者の中にも新制度の方の利益をも認める人が出來て、司馬溫公が新

法を全部廢停して、制度の復舊を主張した時には、蘇東坡などの如き激烈なる新法非難家さへも、新法の全部を罷めて、又舊制に復すと云ふことの弊害を論じたことがある位である。況んや法の精神から云へば何處までも宜いので、唯支那の現在の官吏が能力が乏しいのと、人民が良い法の精神を味はうだけの力が無いので、行政司法を分けると云ふことの利益を感じない場合に、僅か數年の間で効能が無いから、舊法に復すると云ふやうに、方針が一定しないやうでは、到底政治の改革を斷行するの能力が無いものと謂つても宜いのである。

教育方針の事なども同様である。革命の初めに我々が豫想したのは、儒教に立てた所の五倫五常に對して、新らしい共和組織の精神が一致しないといふ點からして、數千年來の倫理思想にも影響を及ぼしはすまいかと云ふことであつたが、果してそれが事實に現はれて來て、一時孔子の教の共和國に適するや否やを吟味すると云ふやうな議論も出來、或は孔子の教を廢すると云ふやうな極端の論までも生じたのである。此の反動として近來は又孔子教を國教とすると云ふ議論が出來、其事を憲法の上にまで載せるともいひ、最近には祭天、祀孔といふことを、政治會議の諮詢案にまで出した。此の國教論の主張は、幾らか西洋の學問をした者の考から出て來たので、孔子の教も矢張り宗教である、宗教の無い國はないから、支那にも宗教なかるべからず、それで孔子の教を國教としなければならぬと云ふやうな説である。是も矢張り反動時代の極端論たるを免かれないので、孔子の教が果して西洋の所謂宗教と云ふ意義に合するや否やも疑問であり、又若し孔子の教に優秀な點があるとすれば、それは果して西洋の宗教に似て居る點に於てあるのか、それとも西洋の宗教と異る點に於て長所があるのかと云ふことも、十分に研究を要することであつて、孔教の眞義も十分に研究したことのない留學生の説に雷同

して、支那に從來例のない西洋でも近時重要視しない、國教といふやうなものを定めて、元來異教の信仰が自由なる國風を改め、此の時代後れの方法によつて、國民の精神を固めなければならぬと云ふやうな極端論は、餘り感心すべきことではないと思ふ。日本でも維新の當時、一種の國學者の偏見からして、佛教を廢し、時として儒教までをも排斥する傾きがあつて、一時は神道を以て國教に定めるかも知れぬやうな狀態にまで至つたけれども、此は一時の逆上した世論で、其の後人心が平正に覺醒すると同時に、時代精神からも、又國民性の本義からも、漸々信教の自由を許すやうになつて來て、それで佛教は德川時代に較ぶれば非常な迫害は受けたけれども、それさへ次第に勢力を盛り返し、外國から入つた所の基督教なども自由に布教を許されることになり、近來は稍時代遲れの感があるけれども、三教合同などと云ふやうな議論もあつて、政府でも各種の宗教の同一なる地位を認める傾きになつて來た。日本の此の三教合同には、儒教は加はつて居らぬけれども、是は儒教の名目が加はらぬからと云つても、儒教が排斥されたと云ふのではなく、孔子の教の精神は、日本の國體と旨く融和して、既に日本固有のものと同じ樣なことになつて居るので、已に教育勅語にも其の精神が顯はれて居るから、特別に之を宗教として取扱ふ必要がないと認められて居るのである。況んや支那に於ては孔子教は、勿論支那の倫理の根柢であるから、今日之を取立てゝ國教とするのせぬのと云ふ議論をする必要は更に無いのであつて、支那に於ける他の宗教、例へば支那に古くから行はれて、國民性に融和した佛教、又元來支那民族とあまり關係のない回々教、支那人の低い信仰から發達した道教、及びそれから近代になつて入つた天主教なども、皆儒教の精神に背反しないやうな態度を以て、漸々普及して來て居るのである。故に今日改めて孔子教を國教とせぬでも、孔子教

の精神で支那の倫理は認められて居るのであつて、一時革命の爲に多少の疑問も存して、孔子教の尊嚴を幾らか損したからと云つて、其の精神が支那の民心から決して消滅し去る筈のものではない。それを取立てゝ孔子教を國教とするなどゝ云ふのは、政治上の專制的統一の意味を教育の上にまで及ぼさうとする傾きがあるので、是によつて却つて後々孔子教が其の外の宗教の反抗を受け、外來の宗教、卽ち基督教などならばまだしも、支那民族の信仰に根柢を有つて居る所の道教又は佛教などとも衝突するやうになつて來た日には、却つて自ら孔子教を小さくして、從來の極めて寛大なる精神を失はしむるに至るので、實に無用の問題を擔ぎ出したといつて可なるのであるが、但し實は袁世凱が天子の眞似事をして、共和國の總統に不相應な祭天の虛禮を行つて見たいのが眞意で、孔子を利用するのであるならば、孔子こそ實に迷惑至極の沙汰である。

凡そ右に擧げた所の各問題は、第二革命亂の結果として、第一革命の起つた當時勃發した所の急進の思想に對して、反動して起つた所の退歩的思想を現はすもので、支那にして果して一國の獨立を維持し、改革を遂行し、文明國と同一歩調を以て進み得る國民であるとすれば、此の如き一時の現象は決して永久の政治の方針となるべきものではなからうかと思ふ。尤も此の如き評論は袁世凱が熊希齢の立てた施政方針を實行する意思があるものとしての上の議論である。然るに近日の狀況に依つて段々考へて見ると、果して熊希齢の立てた所の施政方針をさへも遂行して、それで將來の計畫を立てるといふ精神がありや否やと云ふことも、疑問になつて來て居る。例へば近頃國民黨の議員を捕縛して鄕里へ歸したり、國會を殆ど封鎖して新に政治會議と云ふ無勢力な諮問機關に過ぎない會議を起したり、平等、自由、民意輿論、共和愛國等の名辭に就て一々或る意味の解釋を與へ

んとして居る樣子を見ても、此疑問は理由ある者である。袁世凱は平等といふことに關して云て居る。今の人動もすれば平等といふが、外人の平等とは人格の平等、法律上の平等にして、決して部長と書記と平等なるべく、師長と士兵と平等なるべく、校長と學生と平等なるべきに非ざることを知らぬ。是に於て種々上を犯すやうの事が發生するなどゝ曰つて居るが、是は西洋の人權説の根原をも知らないのみならず、支那に於ける近來の平民的傾向をも理解しない者である。支那の平等主義の實現は、髮賊平定の際、曾國藩の軍隊組織に於て著しく見はれて居ることは、拙著清朝衰亡論にも述べてあるが、劉坤一、張之洞兩氏の變法會奏第二摺にも、同樣の意見が出でゝ居る。卽ち今日の文武官員は官氣最も重し、官氣の重きは人心を失ひ政事を害するの根である。故の大學士曾國藩、巡撫胡林翼が常に切々之を言つた。文官は其民を賤視して、民と接すること罕に、之を炫するに儀從を以てし、之を威すに鞭朴を以てす、故に民隱に通ずること罕なり、武將は其兵を賤視し、兵と親しむこと罕なり、驅つて賤役と爲し、視て利藪と爲す、故に兵情を識ること罕なりと曰つて居る。袁の言ふ所は此の十數年前の漸進的政治家等の意見に比べてさへも、退歩の跡を見はして居る。實際支那の若き官場臭味の多い國でも、其の裏面には已に平等の曙光が閃いて居ることは爭はれないので、必ずしも曾胡二公の如く、非常の際に於てのみ之を發見せずとも、世の變遷につれて起つて來る生活の變化が、自然に新らしい氣運を促して來たのである。康有爲は唐宋から明までは京朝卽ち中央の官にも尙儀仗があつたが、淸朝になつて京朝官の儀仗は皆除かれ、親王宰相と雖も亦儀衞なきこと歐米と同一で、其餘の百官庶僚は平民に等しい、此は眞に平等の先發で、文明の進化である。惟だ一たび國門卽ち北京から外へ出れば、顏色が異つて、州縣等の地方官になれば、威福が並びに行はれる。是は人

民を子弟と思はずに、蠻夷異域の新たに征服した敵と思つて居るのであると論じ、日本でも變法の始めに、首として親王大臣の儀仗を去つた例を援い居る。康氏は支那の地方官が衙門内に住居し、其部下の員役が繁多にして、妻妾は高く留まり、僕婢も夥しいので、費用が隨て續かない。若し自分で借家をして居れば房數も少なく、自から節儉になり易い。それ故役所住居をするのは徒だ民情に隔絶するばかりでなく、自然に奢靡になり易からしめる。北京の官署では皆公務を執るばかりで、人が住つて居ない。各國の官署も同樣である。印度のやうな殖民地のみは、其の長官は役所住居であるけれども、それ以下の官吏は皆朝夕は借家に歸りて、日中のみ公務に趨く、役所で公務を執る時は、私事で應接するやうな累がなく、朝夕宿へ歸る時は公文書を取扱ふ勞苦がない。かくの如く公私劃然として居るのは尤も便利ではないか。其の借家は公費を給して居るけれども、土地の便宜で給與し、廣い狹いも其人の望み次第である。支那でも僻地では急に此のやうな方法は行ひ難いことで、之を行つても人民の家屋を强制的に借上げるなどの弊も生ずるであらうが、しかし現に地方でも長官一人の外、佐貳各官は皆今日でも借家住居をして居るのであるから、此の方法も決して行はれ難いことではないと曰ひ、日本の官吏は行くには徒步、住居は借家で匹夫と異らない、それ故俸給が少くても、どうか暮して行く、支那のやうに一たび官吏と爲れば、體裁ばかり繕つて、威張ることを能事とし、小民を壓制して恐嚇するのは、古代の野蠻の習俗で、兵力で人の地を取り、威力でおごした餘風である。文明の世は官は人民の爲に事務を執る僕である、人の僕たる者が其主人を震驚恐嚇するといふ奴があるかとまで極論して居る。此の康氏の論は支那でも平民主義が自然に發生して來る實情をよく說明したもので、此が世界共通の自然の發達である。然るに其國が已に共和國となり、平等

を本義として、總ての制度をも建て、國民の先識者が早くも着眼した從來の情弊を矯正し、方さに萠芽しつゝある文明の嫩葉を長育して行くのが、當局の責任であることをも忘れ、曲學阿世の徒の甘言を聽て、專制の夢を繰返さんとするなどは實に支那の國民を衰亡の悲境に導く罪人たるのみならず、又實に世界人道の公敵ともいふべき者である。そこで世間では已に袁世凱が帝位に卽く野心あることを疑ふやうになり、袁其人も亦帝王の服たる袞冕を服して、帝王の禮たる祭天を行ふなどゝいふ愚にもつかぬ眞似がして見たくなるので、それでも世間を憚かり、所謂王莽恭謙下士日の模樣でやつて居るなどは、聊か滑稽にも見えるのである。玆に至ると熊希齡の施政方針も、遂に一片の空文となるに至るべく、袁世凱は果して之を實行する積りがあるかさへも疑はしくなるのである。

凡そ一國の興るには、必竟其の國家を治めて行く所の國是が無くてはならぬ。それが施政方針の基礎でなければならぬのである。日本でも明治の初めに五箇條の御誓文を發せられ、それから後其の御誓文の解釋に於ては、いろ〳〵變遷をも經て居ると云ふことであるけれども、兎に角どこまでも國を開き、新らしい政治を實行すると云ふ方針で、法律をも改め、制度をも改め、教育をも改め、さうして何處までもそれを遂行した。其後には、又立憲政治の採用に方針を定めて、實行するまでには年數を要したけれども、それを實行すると云ふことには當局者も德義を守つて、當初の精神を崩さなかつた。それで伊藤公の如き政治家は、生前いろ〳〵なる非難も受けたけれども、立憲政治を日本に成立てると云ふこと、憲法が出來上つてからは、其の憲法をば何處までも維持して行きたいと云ふ精神を始終失はなかつた。其當時でも一方の武斷派に傾いた政治家は、或は一時の議院の騷動などから、憲法中止などゝと云ふやうな謬つた考を出す人もなきにしも

あらずであつたし、伊藤公も又自分が作つた憲法の爲に束縛されて、實際爲政家としては、餘程困難の地位に立つたことも屢々あるけれども、幸ひに伊藤公は政略家としては或は缺點があつたかも知れぬけれども、政治上の德義として、一旦立てた方針を枉げるべきものでないと云ふことに就ては、確かな信念のあつた人であるので到頭此の立憲政治の存廢などに就ては、少しも疑を有たなかつたのである。それに依つて今日まで此の立憲政治も相續し、維新當時の改革の精神も相續して來たのである。斯う云ふことは機會主義の政治家の學び得難い所であつて、是れ即ち伊藤公が新らしい日本の創建者としては、故桂公とか、或は現存して居る山縣公などに對しても遙に勝れて居つて、百世不朽であるべき點であらうと思ふ。伊藤公の政治上の能力は、天津談判の際からして、李鴻章などもひどく感心したのであるが、李鴻章其人も、外國人に對しては權變計るべからざる人物の如くにも考へられたが、實際は政治上の德義は頗る堅實な所のある人で、外國に對しては始終平和主義を取つて、多少國の體面上屈辱と云ふことを忍んでも、兎に角外國に對して事を起さずに、其の間に内治を整頓すると云ふことだけは、一貫して變らなかつたやうである。日清戰爭は其の素志でもないのに之を起した結果、全然失敗をして、李鴻章に對する支那人上下の信用が衰へたから、其の深慮ある主義を實行し得ずに了つたけれども、是は今日の袁世凱などゝは幾らか異なる點であつて、袁にして若し眞成に支那の地位を自覺し、支那の運命に關して、自分が有つて居る所の責任を覺つたならば、其の恩を受けた清朝に退位をさせて、共和政府を成立たせた所の精神を、何處までも一貫して、國會の如き機關が、其の一個の政策を實行する上からは、多少不便な點があり、一時之れを無くした方が便利だと云ふことがあつても、其の一時の不便、一時の困難の爲に、當初の精神を枉げず

に何處までも共和國を成立てゝ行くと云ふやうな信念があり、それを國是として進行すれば、支那の國民も結局は困難を排して、且つ救濟されて、さうして新らしい國家を成立てることが出來るであらうと思ふけれども、若し機會主義の政治家として、自分の能力を賴んで、一時都合が好くさへ行けば、如何なる事でも爲さゞる所なきやり方で、國會をも蹂躙し甚しきは一時の反動的政論に驅られて、折角立てた所の共和政體をも蹂躙すると云ふことになれば、袁世凱一人の成功としては或は之を僥倖し得らるゝかも知れぬけれども、支那の國民は之れが爲に到底救濟すべからざる不幸に陷ると云ふことを考へなければならぬ。日本の政治家でも此の如き一時の不便困難の爲に、屢々國是遂行の信念の衰へることが無いこともなかつたので、明治の初年でも既に政府は先づ內治を專らにすると云ふことに國是を一定して居りながら、而かも臺灣の生蕃の征伐をも卒然として行ひ、それから琉球事件に依つて支那と衝突を起したりするやうなことがあつた。此時に獨り其の定見を固執したのは今日から見れば極めて臆病な政治家のやうではあるけれども、木戸孝允の若きは何處までも始終一貫した內治政策を主持して、ある機會からして外國に對して國威を張ることをも試みやうかなどゝいふ迷ひを少しも生じなかつたのは、決して見る所がないとは云はれぬ。國家は大きな生物であつて固定した政策を執つて少しも融通が取れぬと云ふことは、頗る不便な點があるのであるけれども、政治家の信念として國是の方針としては、兎に角一貫したものがあつて、さうして一時の便宜の爲にそれを變へないと云ふ所の方針が無くてはならぬのであつて是は支那の當局者が最も日本の維新の歷史に就いて、今日鑑みねばならぬ所であると思ふ。

何國の政治でも機會主義と云ふものは、屢々政治家を誘惑し易い所

のものであつて、幸に支那は今日軍事上の功名などが得らるべき場合が無いから、外國に對してだけでも、一種の誘惑に陷られない利益があるけれども、若し是れが外國に對して軍事上の功名を得るやうな場合があつたならば、佛蘭西の革命の後にナポレオンのやうな事實上の專制家が出たやうな禍ひは必ず來るであらうと思ふ。英吉利などのやうな、長く立憲政治に訓練された國、又亞米利加などのやうに初めから民主政治で成立つた國は、其の人民、其の政治家ともに皆其の主義方針と云ふものを以て生命として、主義方針を守るに就て一時不便なことがあつて、其の爲に我が黨派の衰運を來すことがあつても、輕々しく歷史ある主義方針を變へるやうなことはせぬだけの德義を有つて居るけれども、支那のやうなさう云ふ訓練を有たない國は勿論、日本でもまだ國民に此の訓練が深くないと云ふ原因からして、屢々政策が機會主義に陷る傾きがある。併し永遠に國家を安全に存立させやうとするには、力めて此の機會主義を離れて、國是を一定しなければならぬ。袁世凱の顧問たる某博士の如きは、或る時支那の名士の宴會の席上に於て、袁世凱が大統領として、支那で政治を執るに就ては議會に袁世凱の黨派の多數を常に占めるやうにしなければならぬと云ふことを言つたさうであるが、是は議論の前提を忘れて結論だけを考へたのであつて、西洋の共和政治でも、大統領が黨派に關係ある國例へば亞米利加などに在ては、大統領が屬する黨派には一定の主義があつて、其の一定の主義に對して多數を占めるやうにする。そこで議會の多數と云ふ事にも明白な意義があるのであるが、袁世凱のやうに政治上に何等の主義の無いものが、單に多數を占めて、さうして政治機關を思ふやうに動かすと云ふことになると、是は全く專制政治と同一の結果になるのである。但し袁世凱が大總統としての地位は佛蘭西などの大統領の如く、政治上の主義に超

然として居るのであれば、別問題であるけれども、袁派の意見としては寧ろ米國流の大統領を手本として居るのであるから、益々此の議論は價値のないものになるのである。

支那の今日に在つては、袁世凱に限らず、何人でも政治上の主義方針即ち國是と云ふものを立てると云ふことが肝腎であつて、是は其の人が不幸にして暗殺され、或は中途で病死すると云ふやうなことがあつても、其の國是と云ふものさへ一定して居れば後から續いて出て來る政治家が、其の方針に從つて之を遂行して行くことが出來るので、隨て法治國たるの實も擧るのであるけれども、國是が立たずに、唯だ機會に從ひ、便宜上いろ／＼な政策を思ひつき次第やると云ふのでは、袁世凱のやうな人物が非常な勢力を得て、專制的に統一しても、それは砂の上に建てた樓閣の如きもので、直ちに崩れる處があるのである、是は袁世凱に限らず革命黨即ち反對黨の方でも同樣であつて、袁世凱のした事であれば、何でも構はず反對すると云ふやうな手段は、政治家として、殊に今日の場合取るべき所ではないと思ふ。例へば先年袁世凱が當時財務總長熊希齡の方針で、既に外債を起さうとしたことがある。然るに其の時に於て、南京に居つた黃興などが之に反對をして、外國債に依るのは、外國人に利權を占有されるといふ、例の清末の利權回收と一樣の意見を以て、國民捐に依つて財政を救濟しやうと云ふことを主張した、是等は最も識見の無い所の政論といふべきであつて、あの時に於て早く支那が一致して外債に依て、財政の狀態を救濟したならば、單に財政と云ふ方面から言へば、或は今日のやうな非常な窮境に陷らずに濟んだかも知れぬのである。黃興等の主張は勿論外國債が何處までも惡いと云ふのでもなかつたらしいので、寧ろ眞意は他に在て、主として袁世凱の執る政策だから反對したものと考へられる。是は一國の國是としてはそれより外に途

のない事をも、袁世凱に對する感情の爲に、自から其の信念を欺くと云ふことになるので、卽ち革命黨の政治家も亦機會主義の爲に囚はれて居ると謂はなければならぬ。斯ういふ事は最も愼しむべきことで、縱令自分並びに其の黨派が立てた所の主義方針が、一時自分に不利益な事があつても、其の爲に動搖しないと云ふのが、文明國の政治家の德義であり、又一國を救濟する所の經世家の進むべき正路である。是は今日以後袁世凱の派でも、或は反對派の政治家でも、十分に注意をしなければならぬことゝ思ふ。

今一つ附言して置きたいことは、現在の支那は共和政體として、其の立國を列國から承認せられたとは云ふものゝ、尙ほ袁世凱の統一事業が成功するや否やと云ふことは、疑問の裡に置かれてあるので、方さに世界列國の環視の眞中で、統一事業の藝當をやつて居ると云ふことを免かれない。世界列國の意見を度外視して、其の獨立の本義に據り、自由に思ふ所を實行すると云ふ地位までには、まだ至つて居らぬのである。此の際にあつては之れを監視する所の世界列國も、支那の幾億人民を救濟し、世界の平和を圖ると云ふ上からは、支那を眞正に滿足な共和政治を行ひ得る國として成立たすまで、十分に監視しなければならぬ義務があると思ふ。それに就ては其の當局の政治家の機會主義に囚はれて、或る時は人道に反し、改革の精神に反し、共和國の根本義に反し、例へば議員を捕縛したり、國會を閉鎖したり、或は暗殺を以て敵黨に對するやうな政治上の德義に反した行爲は、之れに對して忠告をして、正理に歸するやうに導かなければならぬと思ふ。たゞ兎も角早く統一をし、早く平和になる方が、貿易上に利益であるからなどゝ云つて、目的の前に手段を問はないと云ふことを認容し、支那の當局者が正道に反した行爲を執るのを默々として看過すると云ふことは、世界の政治上の德義に退歩を許すといふことにも

なり、現在支那の當局者をして、世界共通の政治上の德義を守るは、列國と均等の地位に立つ上に必要なることで、之を守らぬ、といふのは卽ち自ら貶抑する所以だといふことに强い反省を生ぜしめることをも怠るといふことになつて結局列國共通の政治上の德義公道を守らずして列國の伍に入り得る國の存在を認めるといふ由々しき大事になるのである。今日文明が進歩して、各々其の國に於ては政治上の德義を嚴重に守るにも拘らず、支那の內情なり、地位なりが其處までに至らないからと云つて、放任して置くのか、それとも列國が各々其國の利益の爲に公道を忘れて居るのか知れぬが、支那の現狀に對する列國の監視は甚だ寛大に過ぐるやうに思ふ。是は決して支那の人民を救濟し、又世界の平和を永遠に維持する所以ではない。勿論世界の監視が寛大に過ぐるからと云つて、それを好いことにして、自國の內に對し、又外に對する政治上の德義を疎かにすると云ふことは、尙以て支那の當局者として不都合且つ不利益な事である。日本がさもない事まで、外國から酷待されて、三十年も隱忍し以て今日あるを致したのは、一は强制的にも正義の觀念を重大視せしめられたので、立憲政治の成功も、列國の嚴酷なる監視に負ふ所少くないのである。それに比して今日の支那は、列國に甘やかされて居るので、正義の觀念も發達せず、隨て共和政體の成功も危ぶまれるのである。當局者が眞正に自國の前途を考へるならば、外から來る所の議論が、縱令自分に取つて寛大過ぎて都合が好いとしても、其の爲に政治上の德義を疎かにすると云ふことなしに、十分に守る所は守らなければならぬ。是は機會主義の政治家には、或は迂濶な空論の若く感ぜらるゝであらうけれども、此の迂濶な空論の中に、立國の永遠なる眞理が含まれて居るのである。

支那論完

清國の立憲政治

近頃支那では立憲政治と云ふのは大變に評判の好い語になつて居る。一體支那のやうな守舊國が立憲政治に對して興味を有つのは誠に不思議のやうであるが、支那は大體に於て守舊の國であるが、又時としては非常に急進の國である。近頃では急進の方に大分傾いて居る。昨年北京へ往つた時にも、新智識の官吏の中には、北京の城壁を取拂つて、跡へ電車を敷設した方が宜いと云ふやうな急激な意見を有つて居る者があつた、それ故急激に立憲政治をやるとか、新内閣を造るとか云ふことは決して怪しむに足らない。殊に支那では立憲政治を一つの護符、大層結構なお守りのやうに考へ、何でも立憲政治をやれば國が盛んになるやうに考へて居る。昨年日本が朝鮮の併合を斷行した時に、支那の新聞は、日本は立憲政治をやつたので國が興つた、

朝鮮は立憲政治をやらなかつたので國が亡んだ、斯う云ふので非常に簡單に一刀兩斷に判斷して居た。立憲政治さへやつたら、支那の分割もなく、又決して亡びない、段々えらくなると信じて居る傾がある。

しかしながら立憲政治をやりさへすれば國家が盛になると云ふことは、支那人のみならず、どうかすると日本人の間でもさう云ふ考へがあるかも知れぬ。日本は國會を開いてから二十幾年になる。其の間段々日本が盛になつて支那にも勝ち、露西亞にも勝ち、それから朝鮮をも併合して、國運が進んだのは事實である。之れを支那人から見れば立憲政治の爲だと云ふが、或は日本人でもさう云ふ意見を有つて居るものが多いであらう。それで立憲政治にも亦いろ〳〵流儀があつて、日本人が最初に理想にした立憲政治は、英吉利の政黨政治であつた。今日日本でやつて居るのは立憲政治に相違ないが、政黨政治になつて居らぬ。時時なり掛けては失敗して居る。內閣では元首に對して責任を負ふのだと云ふ議論を押通して來たのであるが、併しそれで立憲政治でない譯でもない。支那でやる立憲政治はどう云ふものであるか、支那人はさう云ふ細かい考へはない。獨逸でも英吉利でも日本でも皆同じことであると思つて居る。唯立憲政治をやりさへすれば國が盛になると思つて居る。それで立憲政治は英吉利のが宜いか獨逸のが宜いか、日本では英吉利流にやらうとしたのが、獨逸流になつて仕舞つた次第で、一種の日本流の立憲政治が出來たのであるが、どれが宜いのか、今の所では判斷が出來ぬ。英吉利が盛であつた時は、世人は英吉利の立憲政治が世界中一番結構なものであると思つたが、近年のやうに獨逸が國運を持上げて來ると、獨逸流も宜からうと思ふやうになる。さうして見ると國運の盛衰が、果して立憲政治にのみ關係するかど

うかと云ふことも分らぬのである。それで支那が今日立憲政治を採用するのに又どういふ流儀のを採用するか知れぬが、結局どの流義のを採用したからとて、國運がメキ〳〵と盛んになつて、强國になるかどうか、それは迚も保證は出來ない。尙家族制度が現在支那に行はれて、居り朝鮮にも行はれて居るけれども、それが一向國運隆盛の根本にならぬやうな譯である。結局國の盛衰の根本は必ずしも政體によらないかも知れぬ。

それでは國運の盛衰なり、又立憲政治が順當に行はれる基礎になる者は何かといふと、手短かにいへば中等階級の健全と云ふことであらうかと思ふ。此の事に就て、明治三十五年に支那へ行つた時に既に彼の地の有志家の間に立憲政治論があつたから、立憲政治ばかりやつた所で、お前の國が盛んになるとは限らない。日本が盛んになつたのは昔からの由來がある、それは何かと云ふと中等階級の健全であると云つたが、どうしても支那人には分らない、誰れに説明しても分らないで其の儘になつた事があるが、現在の支那の社會で中等階級が健全に存在して居るかどうかと云ふことは餘程疑問である。是は支那ばかりでない、大阪市なども、中等階級の健全と云ふことは、どうかすると危い處で市政の腐敗とか何とか云ふことを騷いだこともあるやうであるが、是は中等階級の不健全から來て居るのではあるまいか。併し中等階級にも、種類があつて最初日本が立憲政治を拵へた時は、財産の中等階級を標準にして拵へたのである。日本で封建の末世に國家は誰に依つて立つて居つたかと云ふと、大名等は自分で背負つて立つて居ると思つたかも知れぬ、徳川家でもさう思つて居つたらう。併し其の時に實際日本の國家を背負つて立つて居つたのは、さう云ふものではなくして、最下級の士族である。それで維新の事業が出來上つたは、勿論天皇陛下の御稜威にも依り、歷代の皇室の御

盛德にも依るけれども、其際尊王の大義の爲に働いたものはどう云ふものかと云ふと、皆最下級の士族である。將軍でもなければ諸侯でもなし、諸藩の家老でもなし、上級の武士でもない、最下級の士族である。所で維新になつてから士族と平民との階級が無くなつた。尤も今でも名稱はあるが實際の階級は無くなつて居る。或る地方では今以て依然として士族の勢力のある所があるが、或る地方ではマルで其の勢力が無くなつて居る。それでは其の地方はどう云ふものが代つて勢力の中心になつて居るかと云ふと、多くは農民の最上級のものである。國會が開ける前、開設論に骨折つたのは矢張り維新前からの狀態が相續して來て居つて最下級の士族がやり出したのである。國會が開けてから十餘年の間どう云ふ種類の人が國會を組織する原動力になつたかと云ふと、大部分は最上級の農民である。さう云ふ階級が日本にあつたから、立憲政治が兎に角首尾能く行はれ始めたのである。木に竹を接いだやうに外國の制度を持つて來て行つたけれどもそれが少しも不都合がなしに行はれたと云ふのは、卽ち中等階級が健全であつたからである。

其の後いろ〳〵變遷があつて、大阪のやうな商工業の發展する處には別に一種の中等階級が出來て來て居る。併し是は全國から見るとまだ極めて微々たるもので先づ今の所では其の新しい中等階級の存在を認むべきものは、東京とか大阪とか橫濱とか神戶とか云ふ大都會だけであつて、其の他の處にはまだ殆ど認められない、それはどう云ふ人間であるかと云ふと、つまり新教育を受けて一人前になつた人間である。此新らしい中等階級がどう云ふやうに發現したかと云ふと、ツイ此前の總選擧が一の證明になる。東京では藏原君が一文なしで運動をして議員になつた。大阪では我々の友人の石橋君が殆ど一文も金を使はずに議員になつた。それから橫濱とか神戶とかで

も、何か非常な金持と競爭して勝つた人があるやうである。さう云ふのは詰り中等以上の教育を受けて、種々の誘惑の爲に支配されない人間が澤山出來て來た證據であつて、此等の人間が一階級を形づくるといふことは今日の處では大都會でなければ出來ないのである。從來の大阪は、大きな資本家と丁稚とだけであつて中等階級と云ふものは無かつたといつてもよいが、近年はさう云ふやうな人間の一階級が出來て來た。つまり氣まぐれの人間の團體が出來た。さう云ふ氣まぐれの勢力で、一文なしで選擧運動をやつても當るやうな人が出來て來た。是は新らしい教育の影響には危險思想が伴ふやうに考へられるが、必ずしもさうでない證據であつて、新教育を受けて謂はゞ社會の從來の調子から見ると、多少氣まぐれであるが、つまり他の誘惑の出來ない人間が出來て來ると云ふのは、大變結構なことで、先づ日本ではさう云ふ人間が百姓の最上級のものに代つて、新らしい中等階級を組織するかどうかと云ふ道行きの最中にある。一方には古い制度武士とか百姓の大きな者とか云ふ家族主義のやうなものを固守して居る人間が段々減じて行くのは、是は危險には相違ないが、一方には他の誘惑の爲に動かされないと云ふ利益が出來て來る。是は新しい時代思想の一つの利益である。さう云ふことは利害伴ふものであると云ふことを考へなければいかぬ。

所が支那では今始めて立憲政治をやると云ふ場合に、どんな階級が中心になるかと云ふことは餘程分らぬ。自分が知つて居る所で判斷すると、日本のやうに士族と云ふやうな階級は支那にはない。讀書人と云ふものが謂はゞ一つの階級になつて居るが、併し讀書人が日本の新教育を受けた所の新思想を有つた人間とは同一に見られない。日本では士族と密接して最上級の農民があつたが、支那ではさう云ふものが中等階級をなして居るかどうかは疑はしい。支那の百姓は

何處までも百姓で、百姓の中から國會などへ出て、新しい、時代の中等階級を形づくらうと云ふことは、支那には六ケしい、ことである。それであるから支那で立憲政治の形が組織されても、其の立憲政治を維持すべき階級が現在あるかどうかと云ふことが大なる問題である。先づそれが第一に支那で立憲政治の都合よく行はれるかと云ふ大疑問であらうと思ふ、さう云ふ事は餘り近頃の評論家でやかましく言ふ人はありませぬ。

そこで兎に角それ等の根本問題は姑らく置くとして、支那でも立憲政治を日本がやつたやうな工合に順潮に行くものと見ても、近頃までの經過で、立憲政治の將來を批判するのは、早過ぎる次第で、近頃内閣總理大臣と云ふやうなものが出來、それに協理大臣と云ふ副大臣が二人出來、それから各部の大臣と云ふものが出來た。之れが日本で云ふと明治の初年伊藤公が新内閣を組織する前、三條公が太政大臣で、島津公か左大臣、岩倉公が右大臣、其の外參議といふ者があつた、今から三十餘年前の狀態である。支那の現狀を批判するに就ては、日本の三十年前と思はなければいかぬ。昨年始めて資政院を開いた。日本に於ては明治の初めに集議院と云ふものがあつた。木戸公が議長で其議員は各藩の代表者である。それが今の支那の資政院に似て居る。今の支那の資政院も各省の代表者から成立つて居る。日本の集議院の時などは、雲井龍雄と云ふやうな腕白先生が居つて、木戸さんなどを大層困らせたと云ふことである。支那でも昨年あたり、南方の新聞を主宰して居る資政院の議員などが、いろ／＼苦情を捏ねて、隨分議長を困らせて居つた樣子が見える。支那の資政院は日本の集議院時代を以て比較せねばならぬ。支那の各省には現在諮議局が開けて居る、是は日本に於て始めて府縣會を開いた時代と比較になる程、迚も進んでは居らぬ。其の局で議論をすることも、各の省の經濟上の必要

な問題でも議論したら宜からうに、分りもせぬ外交の事などを議論する。ヤレ鐵道鑛山の利權回收だの、借欵反對だのと言つて騷いで居る。日本の府縣會はそれよりかは餘程健全に發達して居つて、最初は地方の財政を議することに限られて居つた。其の爲に府縣知事が不急な道路を造つたり、金の掛る工事などをやつたりすることは制限されて、それが明治十一年頃から、國會の開けるまで所謂議會の練習をした。日本では國會が開けてから、議會と云ふものがゴタ〳〵になつて、餘り良い結果を持ち來して居らぬやうに思ふが、府縣會の發達は餘程順調であつた。所が支那の諮議局は迚もさう云ふやうな健全なる發達は覺束ない。斯う云ふやうな處から考へて見ると、支那の議會の將來は餘程危いものであるとも見える。處が今より五年たてば國會を開くと云ふ。十年と云ふのを八年にした所が、それを三年に短縮しろと云ふのを五年と云ふことに折合つた。どうして開くか、隣の疝氣であるが心配なものである。日本では國會を造るに就ては、納稅を以て選擧資格にしてある。所が支那では人民の納稅額の分つて居るのは何處にもない。土地の稅目などは無茶苦茶である。それでどうして稅を取つて居るかと云ふと、賦役全書といふ者がある。又魚鱗册といふ者がある。百五六十年も前のものであるが、それに某縣の租稅は一箇年に幾萬兩收入があると云ふことが書いてあると、今でも其の通り取るのである。支那には時々大水害がある。黃河などは洪水があると七八縣の土地を浸して居る、それが爲に或縣には耕地が減じても定めの年貢を納めなければならぬ。或縣には耕地が增しても、規定の收稅で濟まして居る。誰某が何程出すなどゝ云ふことは知る必要がない。知縣などでもそんな事は知らない。何でも此の縣は何千何百兩取らなければならぬと云ふこと丈で澤山だ。さう云ふ有樣で選擧資格の標準にも何にもなる筈のものではない。それがモウ四五年

の後には國會が開けるのださうである。どう云ふ國會が開けるかと云ふとは迚も分らないが兎に角開くとなつたらどうかかうか開くだらう、兎に角支那流の國會が成立つものと考へるより外仕方がない。世界中類の無い支那流の立憲政治と云ふものが出來上るかも知れぬ。さう云ふ風で開ける國會なら、國會にはなつて居らぬだらう。國會が開けたら却つて亂が起るだらうと云ふ論があるが、併しそれも分らぬ。支那流の國會が開けると、矢張り又支那流に治まつて行くかも知れぬ。昨年資政院が開けて、彈劾上奏などが出て騷いだが、治まる時になると旨く治まつて行く。政府でやかましく云ふ議員を買收したと云ふ話があるが、買收したかどうか其處までは分らぬが兎に角何處かで折合ふ所で折合うて騷動にもならずに治まつて居る。それだから支那で國會が開けたからと云ふて大した効能も無い代りに大した騷動も起らぬだらうと想像もされる。

是は自分が支那の外に立つて、さうして支那流でなしに支那の立憲政治を考へるのであるが、それを今一面即ち、支那側に立つて考へて、支那には立憲政治の根柢となるべき思想があるか無いかと云ふことは、是は又一つの問題になる。それは勿論ある。あるのみならず支那の方が或は反て餘程歐羅巴人などに近い一種の思想を持て居る。近頃日本で漢學が流行つて、支那思想は一體に穩健で、日本の國體などには非常に適したものであると考へて居らるゝやうであるが、此等の側から見ると、餘程驚くべき思想が支那にはある。尤も其の驚くべき思想ばかりが國會の根柢にならうと云ふのではない、危險でない健全な分子も國會の根柢になるであらう。とにかく支那の今の新らしい時代の人に行き渡つて居る思想、即ち國會でも開かうと云ふ人の間に行き渡つて居る思想の來歷は、どう云ふものであるか之が今日研究して見やうと思ふ最も肝腎な點である。

其の一つは、支那は存外輿論の國である。支那は國の制度の上から云ふと、無限の君主獨裁の國である。それと同時に支那は非常な輿論の國である。輿論と云ふのも支那から來た語であるが、何處から出て來るか分らぬ多人數の評判と云ふことに重きを措く國である。地方官の善惡などを天子が問ふに、先づ評判が善いか惡いかと云ふことを聞く。其の人が實效が擧つて居るかどうかと云ふことにはあまり頓着しない。尤も支那の地方官の任期の三年や四年で實效の擧りさうなことはない、兎に角評判に重きを置く。「聲名好」と云へば好官だといふ。支那でも昔から政治家として實際に成功した人は、評判などを念頭に措かないが、さういふ人をば管商、卽ち管仲商鞅の派として、之を惡くいふ傾きがある。誰でも知つて居る諸葛孔明、此の人も政治上實效を重んじて、隨分嚴重な政治をして、或論者からは管商派だといはれる。それでも孔明の政治は矢張り評判で人を採つて失敗した點がある。三國誌などに孔明涙を揮つて馬謖を斬ると云ふことがあるが、之が卽ち評判に依つて人を用ひた失策である。一般の傾向としては、支那は評判に重きを措く國である。それが詰り一つの立憲政治の根柢になるのであらうと思ふ。現在では評判主義に對して反對の考へを有て居る人もあるが、要するに之が一つの支那の立憲政治の根柢を成すに違ひない。近頃支那でも新聞などは詰らないと云ふものがある。日本でも近頃よく新聞などは詰らないと云つて新聞で反對した事がドシ〳〵行はれる。鐵道國有などには日本全國、一つも贊成した新聞はなかつたが、政府が斷行してしまつた。それで新聞記者も矢張り其の鐵道に乘つて居る。日本のやうに立憲政治の國で輿論を無視することの甚しい國はない。政治家などは輿論は愚論だの、人の噂も七十五日なゞと云ふことを言ふものが多い。支那では獨裁政治の國であるけれども、天子が前いふやうに人の評判で官吏の進退を決

する。日本に來て居る留學生などは、本國に於て或る問題が起ると五百人なり七百人なり集會をして、電報などを本國に打つ。日本では青二才どもがそんな事をすると叱りつけて置く位のものだが、支那では其の青二才のやる事が大變に應へる。支那の新聞なども日本の者と比較すると遙に下等で、支那の大官なども新聞などは詰らぬと云つて居るが、さて新聞で騷がしく言ふと其の恐ろしがること大變である。何でも一々新聞に殆ど盲從して居る。近頃では支那でも發行停止をやつたり何かして居るが、併しそれは怖々にやつて居る。日本でも明治の初年は丁度そんなもので、木戸さんとか大久保さんとか云ふ人が參議をやつて居つた時分、成島柳北とか栗本鋤雲、或は末廣鐵腸などゝ云ふ人が政府の氣に入らぬ事を書くと是等の新聞記者に禁錮を命ずると云ふ。併し其の時分禁錮を命ずると云ふのは、唯新聞社の二階に立籠つて居つて藝妓を呼んで來て騷いでも宜いと云ふやうな禁錮であつた。支那の政府が新聞に對する對度は殆ど其れと變らないのであつて、日本では段々立憲政治が行はれて、反つて新聞を踏みつけにするやうになつて來たが、支那ではまだ立憲政治が出來ないせいか、非常に新聞を怖はがつて居る。輿論と云ふものがかういふ風に大變に能く利く。立憲政治が出來上つたら或は樣子が變るか知れぬが、兎に角昔からさう云ふやうに輿論に重きを措く國である。それが支那の立憲政治の根柢となつて、隨分グラ／＼した立憲政治が出來るだらうと思ふ。是は一種の支那の國情の上から立憲政治を觀たのである。

其の二は思想の潮流である。支那人に種族觀念の現はれたのは餘り古いことでない。支那人は自分の國を天下だと思つて居る。他の國以上に超越したものと思つて居る。外の國は皆小さくて、四裔といふ衣物に附けた裾位のものだと思つて居る。英吉利から乾隆の末年にマ

カートニーといふ使者が來た時に支那では四裔の國から朝貢して來たから、自分の國の臣下を取扱ふと同樣に三跪九叩禮を取らせやうと云ふ考へであつた。所がマカートニーと云ふ英吉利の大使は、自分は英吉利國王の臣である。そんな馬鹿なことをする譯はないと云つて、どうしても聞かない。それからいろ〳〵話が揉めたが、英吉利の使者も、其の儘天子に會はずに歸つては目的が達しないから、自分は國王の肖像を持つて居る。それに對して清國の自分と同等の大臣が矢張り三跪九叩禮を行つたならば自分もやらうと云ふ相談を持込んだといふことがある。何しろ支那は外國と云ふものは皆自分の國に附屬したものと思つて居つた。それで本當に種族思想の起つたのは、外國から亡ぼされ掛つた時である。前には南宋の末近頃では清朝の爲に明が亡ぼされる時に種族思想の發現があつた。此種族思想の發現も南宋の時には格別の事ではない。一體宋の亡びる時はみじめなものであつて、文天祥は宋末の大達物であるが、敵國で牢の中に入れられて居つたとはいへ、隨分優待されて居つたので暇潰しに正氣歌などゝ云ふ長い詩を作つた。正氣の歌は結構だが、戰さは下手であつた。殺される時は從容として死んだと云ふが、一體支那人は殺される時は多くは從容として死ぬさうである。明末の忠臣義士と云ふものは、日本では文天祥ほどに餘り取立てゝ言はぬが、文天祥よりもどの點から見てもえらかつたのである。戰も相當に見事にして居る、南宋では都を落されてから、今の香港の附近の島の中に立籠つたが三四年も經たない中に亡ぼされた。明末の忠臣義士の方が遙によく持耐へた。鄭成功の家などは天子が無くなつてからも、臺灣に三十年以上も立籠つて居つた。或時は南京征伐に出掛けて行つて、水軍で南京を攻落しに掛つた。結局敗北はしたが、其の時に一軍を率ゐて更に深入りをした人がある。それは張煌言と云ふ人で全くの讀書人である。

此の人は南京から奥の蕪湖、今では米の出る、日清汽船會社の船の着く有名な處であるが、そこまで深入りをして、明の餘黨を狩り集めて、清朝の軍と戰つて居つた背後で鄭成功が敗北したから行き所が無くなつて、辛苦艱難して落のびたことなどがある。此失敗にも懲りず、東南の島々、廣東廣西から緬甸まで、落のびて長い間清朝に對抗した。全く亡ぼされるまでには十七八年も掛つた。それだけ明末には宋末から見ると耐久力があつて種族思想と云ふものが餘程盛になつた。其の時代の思想が清朝二百餘年の間にも伏流して居つて、清朝の爲に壓服された後も、其の思想は江南地方に全く流れが絶えない。其の時代思想の代表者となつた一人の學者がある。それは有名なる王陽明の生れた餘姚縣の人で黃宗羲と云ふ人である。餘姚縣へは自分も往つたが、此處には王陽明の廟などがある。此の土地は王陽明の學派が傳來して、黃宗羲の先生で劉念臺と云ふ人も皆王學派である。劉念臺は明の爲に節義を守つて、物を食はずに死んだが、黃宗羲は兵を擧げて清朝に對抗し、日本へも援兵を請ひに使を寄越した。日本乞師記と云ふ記事がある。其の事は成功しなかつたが、兎に角さう云ふ事までして非常に明の爲に骨を折つた義士であると同時に、之が又明末の大學者である。此の人の思想が二百餘年間に餘程影響して居る。

明末から清初に存在して居つて、清朝の學者の元祖と仰がれて、二百餘年間の思想を支配した人が二人ある。其一人は今申した黃宗羲で他の一人は崑山の顧炎武と云ふ人である。此の二人が明末から清朝の初めに掛けて居つた大學者で、又清朝には仕へなかつた人である。章學誠といふ人は浙東學派と浙西學派と二つに分けて、此の二人を其の祖として居る。浙東浙西と云ふのは杭州の傍の錢塘江即ち浙江の東を浙東、其の西を浙西と云ふ。浙東學派は遠祖が王陽明で其の學統を傳へて清初の代表者になつたのが黃宗羲である。浙西學派の祖

は顧炎武であるが、其の淵源は朱子學である。其の他湖南に王夫之湖北に胡承諾があるが、是は顧炎武や黄宗羲の學派のやうに引續き盛には行はれなかつた。近年湖南の學問が盛んになつて來て、王夫之の學が復興して居るやうである。まだ其の外北京附近、北方に起つた一種の學派がある。近年までは微々たるものであつたが近頃復興しかかつて居る。それは顏元李塨の顏李派である。明末から清朝の初めに大きな學派を成したのは是等の人々であるが其の大きいのが浙東浙西の二派で、中にも西洋との關係が始まつて、種族思想の復活と共に大に活氣を帶び出したのは黄宗羲の學派である。黄宗羲以後此の學派は餘程色が變つて來て、元來王陽明は性理學であるが、黄宗羲以後は一變して、史學になつて居る。つまり浙東學派の特色は史學であつて、泰平の時代には其の特色たる史學を以て、浙西學派の小學に對して居つたが、近年西洋關係が生じて、種族思想が復活すると同時に、

此の人の思想の或る一部分が又特別に復活して來た。此の人に一つの著述がある。それは明夷待訪錄と云ふ書である。此の小冊子に經世的の意見が書いてある。其の大意は明が亡んだのは殘念であるが、能く〳〵考へて見ると、亡びる所以があるのだ。此の次に世を治める者は明の失敗のみならず、歴代の政治に鑒みて新しい政治の現出が必要であると言ふ考へから出たのであらう。其の意見が、突飛な極端の思想である。其の中財政とか軍事とか種々の事に就ても意見があるが、其の根本は、君臣君民の關係にある。原君といふ篇に「君と云ふものは自分の都合の爲になつて居るものではない世の中に人君と云ふ商賣ほどうまらないことはない。よく〳〵うまらない事を覺悟した上で人の君主になるべきものである。自分の都合の爲に君主になるのは不心得だ。誰でも好きで天子になるものはない。堯は天下を許由に譲ると云ふことがあるが、許由は詰まらないから受けなかつた。や

つて見て詰まらないから止めたのは堯舜だ。止めたくても止められなかつたのは禹だと云ふのである。それを心得てやるならば人君の商賣が勤まる。それが後になつてから心得違ひが出來た。漢の高祖などは心得違ひの元祖である、漢の高祖は若い時は道樂者で仕方がないと親父に言はれた。仲と云ふ兄はおとなしい譽られ者であつた。高祖が後に天下を取つた時に親父に向つて私の作つた財產と兄さんの財產とは何れが大きいかと云つた。これが抑も心得違ひの始まりである。自分の財產だと思つて天下を取るから、天下を取るまでにはいろ〳〵な慘酷なことを行ふ。自分の子孫の爲に財產を造るのだと思つてやるから、取つて仕舞ふと、天下の租稅を財產の利息と考へて居る。それが間違である。さう云ふやうに考へると、人君は天下の爲に害にはなつても益にはならぬ。それだから君を怨むものが出來、天子に對して弑逆を行ふものも出來て來る、自分の財產だと思ふから、人が取りはしないかと思つて、一生懸命に守る爲に種々の手段を講ずるけれども、一人の智力は、澤山の取りたがる者の智には敵しない、何代かの後には天下の人心を悉く失つて仕舞ふ。支那の或る天子は希くは生々世々帝王の家には生れまいと云つた。明の崇禎帝――之は明の最後の天子で憂勤愓厲と云つて一生總ての事を犧牲にして儉約に骨を折つたが、其の結果は崇禎十七年に流賊の亂の爲に亡んだ。其の當時の狀態は、實に慘烈で、鐘を叩いて百官を呼集めたけれども一人も來るものがない。それで天子は萬歲山、卽ち今の北京宮中の景山に登つて首を縊つて死んだ。之に殉死したのは、宦官の王承恩唯一人であつた、愈亡びると云ふ時皇太子を落すとか、皇后をかくまふとか、騷動の際に公主卽ち天子の娘さんが出て來たのを見て、餘り情けなくなつて劍を持つて斬附けた。さうして、何の因果でお前は自分の家に生れたかと云つた。是は詰り天下を以て自分の財產とするから、

さう云ふやうな結果が出來て來るのだ」とある。之が黄宗羲の君主論である。

それから原臣といふ篇がある「臣は天子の召使ではない。臣は君主の爲に使はれて君主の仕事をするものではない。天下の爲に君主に手傳つて仕事をするものである。天下萬民の爲に各職分があつて、兵事をやる者もあり、財政をやる者もある。其の仕事は皆天下萬民の爲にするので、君主一人の爲にするものではない。後世になつてそれが段段天下と云ふものは天子の財產になつて仕舞つたから、臣下と云ふものは天子の召使と同樣になつて來た。天子の召使と云ふものは宦官とか宮妾とかであるが、臣下はそれとは譯が違ふ、結局臣は、自分の職務を盡す上に就ては、天子の師ともなり、友ともなるべきものである。天子と共に天下を治めるものであるから、天子の召使ではない」とある。之が黄宗羲のやうに明の亡びる時に非常に困難をして、敵國に抗抵した人の口から出るのであるから、餘程深い感慨を有して居つたことが分る。

其外に宰相に就て論じて居る「明が天下を失つたのは、明の太祖が臣下を疑つて宰相を置かなかつたのから起る。明の太祖の時に胡惟庸と云ふ宰相が、日本の征西將軍府からやつた使者を利用して謀叛を起さうと云ふ嫌疑があつた。それから後は明の太祖は宰相を置かない、つまり總理大臣を置かずに、各部の大臣だけを置いて萬機を親裁すると云ふことになつて居つた。黄宗羲は宰相に就ては孟子の說を引いて居る。孟子は天子の位置を外、諸侯の國に對する關係から、天子一位、公一位、侯一位、伯一位、子男同一位、凡そ五等と云つて居る。又天子の位置を畿內に對する上から天子一位、卿一位、大夫一位、上士一位、中士一位、下士一位、凡そ六等と云つて居る、天子は唯諸侯の上に一の位を持つて居るものである。又卿、大夫の上に一位を有つて居る階級に

過ぎない。古代には天子と公と侯との距離は公と侯との距離だけに過ぎない、一人だけ特別に離れたものと云ふ考へは無かつたのである。それを後世になつてからむやみに天子を有難くした。それが抑も後世に碌な政治の出來ない根本である。昔は臣が君に對して拜すると、君も答拜した。秦漢以後になつて、さう云ふ事は行はれなくなつたが、それでも丞相が天子の御座に進んで行くと、天子は御座から起つて挨拶をする。若し輿に乘つて居たならば、降りて挨拶をしたものである。それが明代に丞相を置かなくなつてから、さう云ふ事は無くなつた」と云つて居る。臣下を容易く取扱ふと云ふことは、支那では近代甚だしいので、大學士、即ち大臣の位に在る人が西太后に對して何か奏上をすることがあると、一時間でも二時間でも跪坐をしたものださうである。黄宗羲はさう云ふ事は天子が自分の召使に對してさせる事で臣下に對してやらせるものではないと云ふ意見である。それから支那では制度に重きを措かずに、人間に重きを措く。それも間違つて居る。制度が確立して居らなければならぬと云ふことを言つた。之が明夷待訪錄と云ふものゝ骨髓であります。日本などでは思ひも寄らない過激の意見のやうであるが、近來の改革論者には非常に歡迎されて居る。現在支那の新思想を支配して居るのは、此の黄宗羲の明夷待訪錄が最も有力なものである。

是れに對して反對の傾きを持つて居つた人もある。張之洞などは勸學篇と云ふ本の中に教忠と云ふ一篇を書いて清朝の天子と云ふものは特別に有難いものであると云ふ箇條を十五箇條も列擧して居る。所が是は支那では通用しない。日本のやうに萬世一系の皇室を戴いて居る國ならば格別であるが、さうでない支那の國、殊に今の朝廷のやうな外の種族から入つて來た天子に對する忠義の觀念は微弱であつて到底行はれない。それで今の天子の處分に對して面白い議

論を有つた者がある。それは東京に居つて革命黨の中心になつて居つたが、近頃は革命黨は止めて居るが、兎に角革命黨の中で第一等の學者で章炳麟と云ふものがある。それが今から十年ばかり前に考へ出したことがある。迚も清朝の天子では持切れぬと考へて、然らば支那では誰を天子にしたらば宜からうと云ふことを考へた。さうして孔子の末孫を天子にしやうと考へた。孔子の系統と云ふものは、一度も絶えたことのない家柄である。偶夷狄の國が來て支那を支配しても、孔子の末孫は之を公爵に封じて相續させて居る。實際支那で是だけ永く續いた名族で、支那人の尊敬するものは他にないから、孔子の末孫を天子にしたら宜からう。それで權力を執るものは如何なるものが代つて出て來ても頓着はないと云ふ。此は勢力のある意見でないが、餘程變つた考へである。以上は支那に一種の民主思想の存在する證據で支那の現在の若い人の思想を支配して居る最も有力なるものは黄宗羲の明夷待訪錄の民主思想である。顏李學派も近年流行るが、是は此の人の學問が兵農禮樂四科を立てゝ、空言を主とせぬ所が、西洋の實際的な科學に近いといふのからして多少復興して居る傾きがあるが、鋭く支那人の頭の中に入つて居るのは明夷待訪錄の民主思想である。之が今度の立憲政治に餘程影響を與へるものと考へる。今の朝廷も忽ちの間に亡ぼされると云ふことはあるまいが、日本などゝは、元首に對する思想が餘程異つて居るから、支那の立憲政治の根柢となる思想は餘程異つて居る者であらうと思ふ。

それから此の民主思想が實際行はれたことがあるか、どういふ形式で行はれたかといふ歴史上の事實も考へなければならぬ。是は近來の大騷亂であつて、最新の支那の國情を生み出した長髮賊の際に發現した。此の大騷亂の平定は、民主思想の最大要素たる平等主義の實行によつて成功した。それは重に軍事上に發現したので元來清朝の

軍制組織は禁旅八旗といふ滿洲、蒙古、漢軍の三種の八旗を北京に置いて、其の外に各省に駐防八旗と綠旗兵と云ふ常備軍を置いた。所が此の軍制が役に立たなくなつた一つの歴史上の事實が出來た、それは乾隆の末、嘉慶の初年、今から約百年ばかり前の頃に、七年間ほど四省に亙る騷亂がありました。其の騷亂は何もえらい人があつて指揮した譯でも何でもないが、全くの一揆が四省に亙つて七年間も平定が出來なかつた。それはつまり其の時に各省の綠旗兵と云ふ常備軍が腐敗して居つた結果である。段々戰が長く續くから地方の人民は堪へ切れぬので、義勇兵の組織が出來て來た。常備軍は義勇兵の尻に附いて行つて義勇兵に戰をさせて、戰が勝つと自分等の功のやうに奏上する。それで一揆の者の方も考へて、義勇兵即ち地方人民と喧嘩をして斬つたり斬られたりしては詰らぬから、諸方で戰をする度每に得た大勢の捕虜を先きに立てゝ義勇兵と戰さをさせて、自分等は唯後に附いて居るやうにした。それから北京から出した八旗の軍はどうかと云ふと、是は又綠旗兵の尻に附いて居て戰をしない。詰り官兵は三段になつて居る。義勇兵が先に立つて犬骨を折つて居り、其の後で常備軍の綠旗兵が懷手をして見て居り。八旗兵が又其の後で唯懷手をして居る。結局義勇兵の爲に騷亂が平らいだ。そこで軍制の缺點が明かになつたので、當時識者の中に已に遠く將來を心配した者があつた。此度の事實は義勇兵で地方の騷亂の鎭定が出來ると云ふこと、常備兵が實用に立たぬといふことが明かに證據立られた。さうすると地方の人民に對する朝廷の威力がなくなつて、制御が出來ぬと云ふことを考へた。其時は好い工合に騷亂が濟むと義勇兵を解散した。然るにそれから後數十年經つて長髮賊の亂が起つて見ると、やはり常備軍は役に立たぬ。それで曾國藩の湘軍、卽ち湖南義勇兵の勃興となつた。最初は湖南の地方の鎭撫の爲に備へたが、後には湖南の

義勇兵は何處へでも派遣されて、湖南の兵で全國に亙つた騷亂は平いだ。之が大變に支那の兵制に打擊を與へて、さうして常備兵は殆ど役に立たぬと云ふことになつて、常備兵の外に必ず義勇兵を備へなければならぬ、と云ふことになつた。此の義勇兵の組織に就て平等主義が發源した。支那では元來上官と下級官吏との關係でも、私交の上に就ては日本ほど階級はない。日本では或る局長とか云ふ者は、書記官とか、參事官に對して公務以外の事でも、目下の扱ひをする。其の書記官なり參事官は上官に對する態度で腰を曲げ謹んで御用を承るが、日本の現在の制度ではそんな理窟はない。公務の上にしても何れも天子から命ぜられた官吏であるから統屬の關係ない者に階級のある筈はない。彼の青木周藏と云ふ人に大變面白い話がある。此の人のことを人に依つては惡く言ふものもあるが、此の人に極めて美德として稱せられて居る事がある。あの人が獨逸に居つた時、一人の書記官と共に外出をすることがあつて、外套を着やうとすると、其の書記官が青木公使の後ろから外套を着せてやらうとした青木が云ふのに、一寸待つて呉れ君も天子の官吏だ、僕も天子の官吏だ、君に着せて貰つては相濟まぬと云つて、ベルを鳴らしてボーイを呼んで自分に外套をかけさせ、其の上某書記官にも外套を被せてあげろと、ボーイに命じて被せさせたと云ふ話である。さう云ふ事は日本の官吏には珍らしい事になつて居る。殊に軍隊などは、一日でも自分より後に來たものは之を頤使して怪しまない。所が支那にはさう云ふ事は少い。支那へ行つて宴會などで高官の人やら低い官吏やら、又在野の人やらと一緒になることがあるが、さういふ際には言葉でも何でも同等で、殆ど上下の差別はない。それが支那の變つた所である。其の外支那の地方官、總督、巡撫以下には幕友と云ふものがある。支那の大官は收入が澤山あるから、幕友と云ふものを養つて居る。自分の友人として

多い人は數十人も養つて居る、皆殆ど同等の禮を執つて、本當の客分として扱つて居る。飯を食ふ時などでも、支那人は能く會食するが餘り居候扱ひにはしない。元來さう云ふ習慣があるが、曾國藩が湖南の兵を訓練する時に、餘程又其の主義を擴張した。曾國藩は禮部侍郞の官であつたが、長髮賊の亂の時に、母の喪で鄕里に歸つて居つた。時の天子、咸豐帝から義勇兵の訓練を命ぜられた。曾國藩は從來の常備軍の兵は懷手をして遊んで居つて、傲慢で役に立たないから、義勇兵訓練の爲に常備兵は一人も採用せぬ方が宜いと考へた。自分では軍隊の事は少しも知らなかつたので、昔倭寇が明の海岸を暴らしたのを平げた戚繼光と云ふ人の兵書に紀効新書といふ者があるので、それを讀んで其通り軍隊を組織した。其の將校としては、皆書生を使つた。擧人、秀才以下の書生ばかりを使つた。之を使用したり、又地方の鄕紳に對して應酬するにも、手紙の往復などするのにも、非常に謙遜して、皆同等の禮で挨拶した。勿論此の人は禮部侍郞で、日本で云へば文部の次官といふ樣な大官であつて、殊に天子から團練の事を命ぜられて居るにも拘らず、告示などを出すのでも告示として命令の態度でしない。敬語を用ひた手紙の往復の體裁でした。鄕紳などに賴んで、人材があるならば皆薦めて吳れといつて、相當の禮遇を以て使つた。それで非常に地方の人は感激した。禮部侍郞の大官が鄕紳やら、書生に對して同等の禮を爲す、地方の豪農などに對しても同等の禮を取る、人材があると優待して幕中に置いた。曾國藩の幕賓は實に盛んなもので、數十人にも上つた。平常は遊ばせて置いて、役に立つことがあると用ひてやつた。李鴻章なども曾國藩の幕中から出た。李鴻章は翰林出身であつて、高官吏になる資格は有つて居つたが、我儘者で、曾國藩とも衝突して幕中を出たことがあつた。しかし幕中に復歸してから、道臺くらゐの地位から、愈使ふと云ふことになると、忽ち江蘇省の巡

撫に推薦して、一省の軍事を任せ、自分と殆ど同等に近い地位にした。かういふ平等主義が湖南の軍隊の强味で、官兵などに見られない、成功をした。尤も曾國藩も初めは唯かういふ新組織の軍隊が、實戰に役に立つか立たぬかと云ふことは自分でも疑問であつた。或る時隣省卽ち江西省城が圍まれたので援兵を請求せられた。此の時始めて千二百名を派遣した。さうして羅澤南と云ふ學者を大將に遣つた。併しそれでは危いからと云ふので、戰爭の經驗のある兵隊をも附けてやつた。此の戰爭の經驗のある義勇兵は江忠源と云ふ名將の訓練した者で、其の弟の江忠淑が率ゐて行つた。江忠淑は出發の際、曾國藩が斥候や何かの事を馬鹿丁寧に訓戒するといつて、其の臆病を笑つて出かけた。所が途中で賊軍が襲うて來ると云ふ評判が立つと眞先きに逃げたのは、その威張つて居つた兵隊であつた。其の時に恐れずに進んで行て、江西省城で先を爭つて賊軍と接戰したのは少しも經驗の無い曾國藩の訓練したものであつた。其の軍は戰爭に慣れないので後隊を斷たれて敗北をしたが、善く戰つて逃げなかつた。それで曾國藩は是ならば書生で兵隊が立派に出來る。もう常備兵などの力を借るのは愚なことである。書生でやり通さうと云ふので、書生でもつて造つた兵隊で長髮賊の亂を結局は平げたのである。卽ち其軍隊は曾國藩が如何なる人にも同等の禮を取つて組織した兵隊である。此の兵隊の組織の初めは中々困難であつて、湖南省城に居つても湖南の巡撫との間に感情が折合はず、提督の常備兵と衝突を生じたこともあつた。其の間に始終曾國藩が自分の幕下を同等に取扱つたことは李鴻章に關する話でも分る。曾國藩は朝起の人で朝早く自分の幕友等と一緒に同じ食堂で飯を食ふと云ふことが常例になつて居つた。所が李鴻章は朝寢坊である。或る時李鴻章の出て來るのが非常に遲かつた。曾國藩は常例で、幕友の揃ふまで食事を始めずに待つて居る

もう曾國藩が待つて居るから起きて來て呉れと知らせる者があつて、李鴻章は慌てゝ起きて出掛けて行つて食事の席に列なつた。時に曾國藩は飯が濟んでから、私の幕中に居るものは總て一誠を以てしなければならぬと云ふことを訓言したと云ふことがある。さう云ふ風に曾國藩は、軍中に居つて幕友等と同等の生活をして居つた。之が軍隊の間に平等主義が力のあつた證據になる。其の時曾國藩と並んで有名な人は、湖北巡撫胡林翼と云ふ人で、此は度量の點に於ては、或は曾國藩よりも一層えらい人であつたが、殆ど自分を捨てゝ人を尊敬し、人に功を歸し、己れに過ちを引受けて、曾國藩と相助け合つて長髪賊平定の大業を遂げた。長髪賊平定の大業は一面から言へば、官憲の力によらぬ民主思想、平等主義の發展と云つて宜しい。支那人の此の如き思想が、立憲政治の一大要素になることゝ思ふ。

それから又共産主義の實行のあつたのも其の時であるが、是は失敗に終つた。南京を十數ヶ年間首府にして居つた。長髪賊が南京を取つた時に、初めは城内の男子だけを呼出して、家に歸ることを許さずに、男館と云ふ者を立てゝ、そこへ打ち込んで仕舞つた。家へ歸つて婦女に接すると天罰があるといふのである。これは長髪賊は一種の變つた天主教徒で、何事でも天主を振廻す爲である。數日の後には女も一定の居場所を造つてそこへ置くことにした、之を女館と云ふた。それで男と女をマルで分けて仕舞つて夫婦が顔を合しても、母子が出合うても、語を交すことも出來ぬ。恰も監獄のやうな扱ひである。長髪賊の巨魁、忠王李秀成の記録を見ると、其の時の號令が嚴々整々で、人民が佩服したと書いてあるが、そんな事に佩服する奴がある者でない。それから段々必要が出來て來るから、機匠局を造つて其處には職工やら織物屋だけを置いた。それから又牌尾館と云ふものを造つた。それで男は十五歳から五十歳までは兵隊又は人夫になるべきものと

して、それには牌を渡して置いて、之を牌面といふ。さうして牌に外れたもの、卽ち老人、病人、廢疾の人間を牌尾と名づけて、それを打ち込む所を拵へた。此の二團は戰爭に使役せぬのであるが、追々少壯者が缺乏してからは、隨分老人をも强制して使つた。其の外に雜行といふ雜業の團體を一つ設けた。食の必要からして野菜を作る團體、菜圃行といふのを造つた。其の後に書を讀み字を識る者を拔き出して書吏として、各賊將の手元に置いて、告示やら、手紙などを書かした。戰時に長髮賊に都合のよいやうな布告などを出す必要があるからである。其の時に男女館の人數も調べたものがある。一度長髮賊の中に投じて、其の後英國へ逃げ、明治十一二年頃に日本へも來た王紫銓と云ふ文士が書いた本に其數を調べて載せてある。實際さう云ふ樣にやつて居つたとは事實である。さうして詰り兵隊になれるものとなれぬ人間とを分けた。其の後各地の戰爭で捕虜のある毎に增加し、戰爭に使役して斃れるものがあれば減少した。初め牌尾館が七八千人もあつたのが、後に三千人位になつた。其の後食糧の都合で、ある四色の旗の下に婦女を分立さした。それは夫も子も城の中に居るものは黃旗の下へ立たせ、夫も子も城の外に出て居るものは紅旗の下に立たせ、孀婦と處女は白旗の下、夫も子も逃げてしまつたものは黑旗の下へ立たせる。さうして旗色によりて皆帳面へ附けることにしたが、それは出來上らなかつた。それから一日の食量を男子は半斤、女子は六十匁ときめて足らないと粥を食はした。マルデ監獄のやうに給與して居つた。それで何年かやつて居つたが、さて何時までも男と女と分けてばかり置くので、部下の苦情が出たから婚姻法を定めた。其の婚姻法は丞相は十人までの女を取ることが出來洪秀全の一族は八人までの女を得る定めで、其の餘は一夫一婦である。巡査があつて十五以上の女の年やら容貌を帳面に記して置いて、男の方から請求があれば

媒官が籤引をして極めてやる。若し帳面に間違があつて、老夫が若い娘を得たり、若い男が婆さんに當つたりしても、取かへることは許されない。結婚を嫌ふ女があると、手足を斫つて懲らしめにした。かう云うやうに南京城の中では實際に施行して居つた。南京城外では自分の勢力範圍にならぬから、それはやらせぬけれども、南京城は十數年も持つて居つたから、南京城の中では十何萬人と云ふ人が共産主義の制度でやつて居つた。門牌と云つて門に牌を附けて、日本でも在郷軍人などゝ云ふ札を張るが、それと類した軍人の候補者になるものは牌を附けて居り、男館女館には館長があり婚姻の申込所があつて皆取扱つて居つた。其の命令を背くものは嚴重に處罰した。

斯う云ふ事をやつたけれども、何處の國でもそんな事をやつて成功するものはない。此の共産主義も長髪賊が一時行つて居つたが、何の結果も來さずに、實際の習慣としても、思想としても今日は殘つて居らぬ。長髪賊の中に居つた李忠王などは、餘程の人物で之を崇拜する者も、近頃往々あるが、併し其の長髪賊が行つた制度までを良いと云ふ人はない。是れは一時支那にあつた現象でも、其の立憲政治には將來關係を及ぼすことはあるまいと思ふ。

之を要するに支那の立憲政治の根柢となるのは其の輿論を恐れると云ふ風習と、それから黃宗羲の作つた明夷待訪錄の民主思想と其の國の習慣たる平等主義、殊に曾國藩等が實行した官民平等思想の實行。斯う云ふものが從來の歷史上今度の支那の立憲政治の根柢となつて、それが詰り如何なる形に於てか其の結果を現すことだらうと思ふ。其の結果が善くなるか惡くなるかと云ふことは別の話であるから、こゝには省いて、姑らく此で終つて置く。

（明治四十四年五月大阪にて講演同年六月廿五日大阪朝日新聞掲載）

革命軍の將來

武昌の革命軍の動亂は場所が場所丈で非常な警報を方々に傳へて居る。併し實際はまだそれ程大きくなからうと思ふのに、支那流に大變誇張された報道が多い。長江沿岸地方の重な都會に同樣な革命の騷動が起つたなどゝ云ふことは大抵はまだ噓が多い。長沙とか岳州、南京、安慶、宜昌、荆州などゝ云ふのは皆まだ信用の出來ぬことが多い。實際はまだ武昌附近だけのことに止まるだらうと思ふ。併し此の騷動は從來の革命運動に較べては頗る要領を得たやり方をして居る。第一は武昌から起つたと云ふのが重大なことになる。

武昌と云ふところは漢口と相對して長江地方の一番樞要な土地で、さうして長江と京漢鐵道との連絡交通の中心で起つた上に漢陽の製鐵所の如きを控へて居るので之が殊更大事件になる。從來革命軍の起つた雲南の佛蘭西境の地などゝは比較にならぬ。安慶などは少しは重大な土地であるけれども、それにしても武昌の比ではない。廣東でやつた事なども隨分注目すべきものであつたけれども、是も武昌ほど重大でない。武昌で起つたと云ふことは地の利の上から云へば革命軍に取つて最も宜しきを得て居る。昔長髮賊の騷亂の時でも武昌と云ふ所は官軍賊軍の非常な爭ひのあつた土地で、賊軍が三度まで武昌を陷れ、又官軍も三度之を恢復して、最後に官軍が武昌に堅い根據を据ゑて、胡林翼と云ふ人が長江上流地方の基礎を堅固にしたので、長髮賊討伐の成功する土臺が出來たやうなものである。當時長髮賊の一缺點と云ふものは、最初に武昌を取つた時、武昌からして數千艘の民船を驅り立てゝ、さうして長江を下つたので、それで南京までの間破竹の勢ひで成功したが、それ程重大な武昌の土地を十分に守ることをせずに、まるで風の通るやうに過ぎ去つたと云ふのが

一つの失策であつて、其の後度々之を取返したけれども、矢張り十分に武昌を守ることをしなかつた、それが失敗の大原因になつたのである。今度若し革命軍が武昌に堅い根據を据ゑて、それからして長江地方に段々擴がつて行くと云ふことになると、中々重大なことになるのみならず、今度の革命軍は長髮賊などゝは違つて大分皆新らしい學問もして居れば、世界の形勢などにも明かなものがやつて居るから、總て其の運動の仕方が長髮賊などよりも旨くやるかも知れない。それが先づ地理上から言つて大變に注意すべきことである。尤も此の武昌と云ふ所は武昌だけでは矢張り重大な影響を來すとは言はれないのであつて、武昌の肝要な譯と云ふものは、西北の方に荊州襄陽を控へそれから西南の方に岳州長沙を控へて居るので、之が支那の最も沃土即ち肥て居る土地であつて、さうしてそれが又支那の中腹とも謂はれる地方で、此處を占めると云ふと四方に擴がることが出來、又敵の四方の交通をも斷つことが出來ると云ふ所からして肝要なのであつて、殊に重大なのは湖南の長沙地方である。長髮賊の時も賊軍が武昌を幾度攻陷しても直さま官軍に恢復されたと云ふのは、官軍の方で長沙が始終落ちなかつたからだ。殊に長髮賊を結局まで討平らげた軍隊と云ふものは曾國藩の部下で、それは湖南から起つて來たのであつて、之が丁度背面の大變な備へになるのであるから、若し長沙にも同樣に革命運動が起つたと云ふ報知が事實であれば、餘程是は重大であるけれども、長沙がまだ官軍の手に在る間は武昌だけでは、大した事になるとは言はれない。

それから近來四川の暴動があつて、四川の暴動と武昌の暴動と聯絡があるかないかと云ふことは一つの疑問であるが、縱し之が聯絡があつても、四川全體に蔓延したにしても、まだそれが武昌の暴動に對して重大な關係があると必ずしも言はれない。四川と武昌との間に

は卽ち荊州と云ふ地方があつて、四川から下る船が宜昌を經て荊州へ來るのであるが、昔から荊州が非常な重要な土地になつて居るのは、西の方は四川から來るものを控へ、南は水路で直ぐ湖南の洞庭湖の西の方の各地方に聯絡し、それから北は襄陽に聯絡するからである。それで此の地方が全く革命軍の手に歸さない中は四川と武昌とで別々に起つても、それは大した影響を起さない地勢である。重慶地方が陷落したとか云ふことも、多分まだハツキリしない報道で、輕々しく信ずるには足らない。併し若し之が詰まり西の方は荊州、南は長沙、北は襄陽あたりまでも手が擴がり、それからして長江の下流の方に向つて革命軍が運動を起して來ると云ふことであり、それから又旨く北京の方から汽車で送られる軍隊を喰止めることが出來ると云ふやうな譯であれば、此の動亂は餘程警戒すべきものになるのであつて、將來何處まで大きくなるかと云ふことは殆ど豫期されない位のものである。

それから北京の官軍が進んで來るに對して、黃河の鐵橋が破壞されたとか云ふやうな電報があるが、それは大抵事實と考へられる。武昌で暴動を起すと同時に、僅に二三人の者が爆發藥でも持つて、京漢鐵道に乘つて行けば立派に成功するのであるから、それ等は有り得べきことである。併し日露戰爭の經驗でも大概分るがこの鐵道を破壞し鐵橋を壞すなどゝ云ふことは勿論軍隊の進んで行くに對して妨害を與へ得ることは與へ得るけれども、それは思つた程非常な影響を與へるものではない。何か大決戰をする時で、一週間かそこらの間に幾萬かの軍隊が戰地へ到着すると到着しないとで一つの戰さが決まると云ふやうな場合であれば別だけれども、それでない時には格別な影響はない。今は鐵橋などでも拵へる時に大變な手數が掛かる代りには壞すのにも容易に根柢から壞すと云ふことは出來ぬ。そ

れで非常な大工事をやつて造つた鐵道の橋臺などを全部破壞するなどゝ云ふことは、二人や三人の人が持つて行つた爆發藥の力では迚も出來ない。それで一時交通を杜絶することは出來るけれどもさう云ふものは大抵三日とか五日とか一週間とかで回復する。それから鐵道の破壞をしても矢張り根柢から破壞することは容易に出來ぬから、大抵爆發藥でやつた鐵道の破壞は二三日掛かれば交通が回復する。故にそれに依つて北京から來る大軍の進行を旨く留めると云ふことは容易でないのであつて、是は有效でないとは言はれないけれども革命軍全體の成功如何に對しては却て大した問題になるものではないと思ふ。

それでは革命軍全體に對して將來成功するか否やと云ふことはどう云ふ事が問題になるかと云ふことを考へると、一つは矢張りどうしても革命軍が今度征討に向ふ各軍隊の中に同志を得るかどうかと云ふことである、長髮賊の時分にはまだ兵器が進歩しなかつたので、長髮賊は湖南の長沙へ出て、長沙を攻めて成功しなくて、長沙を捨て洞庭湖を下つて岳州へ出た其の時に呉三桂の時代即ち長髮賊よりか二百何十年か前から保存されてあつた武器が非常に澤山岳州にあつた。それを長髮賊が得た爲に大變勢力を增して破竹の勢ひで武昌を落したと云ふことがあるけれども、其の時分は何でもない百姓が武器を持ちさへすれば直それが兵隊になつて、さうして立派に官軍と對抗が出來たのであるから、さう云ふ古い兵器でも何でも役に立つたのであるけれども、今はさう云ふ譯にいかぬ。それで詰り今は兵器の進歩の爲に、どうしても非常に良い兵器を持つたものでなければ成功しない。迚も支那の民間にあるやうな鐵砲或は舊式の兵隊が持つて居る鐵砲などでもつて、それで北京の征討軍に對抗すると云ふことは殆んど望みがない。それからして武昌のやうな內地で

起つた革命軍が外國から武器の供給を受けると云ふことも餘程むづかしい。今度武昌を取るのに成功したのは全く兵隊が皆鋒を逆にして起つたから立派に成功したのであるけれども、將來とも今度鋒を逆にしたと同樣な良い武器を持つた兵隊の數が增すのでなければなか／＼成功はむづかしい。革命軍の幹部の或る者の中には學問もあり、兵隊の事も承知して居るものが多數あつても、矢張りそれが百姓を募集して兵隊にして使ふと云ふのには何箇月かの訓練を要するのみならずそれに與へる兵器がなければならぬ。それを得るのに餘程困難するに相違ない。漢陽の製鐵所などを取つたのは其の點に於て頗る有力とは云ふもの丶、それでもつて十分に官軍に對抗が出來るかどうかと云ふこともまだ疑問である。それだからどうしても官軍の中にモツと鋒を逆にして革命軍に應ずる者があるのでなければ成功しないと云ふことになる。併しそれもやり方次第で今の革命軍の兵數であつても、若し官軍の方のやり方がまづくつて、さうしていろ／＼成功を急ぐ結果として、兵隊の多少に拘らず、先づ其の地方に到着した兵隊に直に革命軍と接戰をさせたりすると云ふと、今新に起つて勢ひ込んで居る革命軍は、一二回の旨い成功を收めるかも知れぬ。さうすると其の勢ひが非常に影響をして官軍の中に隨分革命軍に應ずる者が出來ないとも限らない。そこが官軍のやり方の巧拙に關するのであつて、もう少し其のやり方を見て居ると云ふことは頗る興味のある事柄である。

併し兎に角今度革命軍が第一に兵隊を味方に附けたと云ふことは餘程手際の宜いことであつて、其の爲に官軍の中でも、互に自分の軍隊の中で疑惑を懷いて居るものが多いに相違ないから努めて其の機會を利用して、さうして味方を殖して行つたら、或は益事柄が大きくなるかも知れぬ。

もう一つ非常な關係のあることで是はどうしても叛軍の非常な弱味になることであるが、それは海軍を持つて居らぬことである。何か漢陽の水師と云ふものが叛軍に應じたと云ふ電報などがあるが、それは或は事實かも知れぬけれども、漢陽の水師と云ふのは、多分從來長髮賊以來の長江水師の一部分と考へられる。それは舢板に舊式の大砲を載せたゞけのもので、今の軍艦に迚も抵抗することの出來るものではない。長江地方は長江と云ふ大きな流れが交通上の非常な大脈絡になつて居るので、此の交通權を占めると否とは形勢上に大變な關係がある。長髮賊が非常に大きくなつたと云ふのも、詰まり武昌漢口の間で民船を澤山得て、それに悉く婦人や子供を載せ或は兵糧や何かを載せて兵隊が其の左右を下つて行つたから、大變な成功をしたのである。曾國藩が長髮賊を征討するのにも、結局水師と云ふものが大變に大切であると考へて、湖南を出發する前から水師の訓練と云ふものに大變骨を折つた。幸ひに水師の成功に依つて着々陸軍の占領した地方の根據を固めて、交通を自在にすることが出來たのであつて、長髮賊征討の成功の一半は殆ど水師の力であると云つても宜い。今若し革命軍が非常に都合よく行つて、長江地方の重な都會を占領し段段下流に行つて、南京とか上海地方にまで出るにしても、若し長江の交通を占めることが出來ず、殊に近年のやうに汽船が出來て、長江が三日四日で自由に往復され、若し碇泊の時間を全く省くとすれば、更に迅速に交通が出來ると云ふ時に當つて、陸路からばかり革命軍が交通して居つたのでは、迚も官軍に對抗は出來ぬ。今度も薩鎭氷と云ふ提督が砲艦を率ゐて武昌に向つたと云ふことであるが、此の砲艦が武昌を攻撃するといふことが成功するや否やは別問題であつて、縱しそれが成功しなくても、此の長江の交通を保護すると云ふのには、官軍に軍艦があると云ふのが非常な强味である。若

し又之を海軍の無い革命軍の方から考へると、是は交通の要所々々に砲臺でも築いて、軍艦の交通を止めると云ふのは必要なことであるけれども、まだそれ程手の擴がらない革命軍には、其の準備も恐らく出來て居らぬであらう。若しそれを止めるとすれば矢張り皆相當な場所があるので、長江に段々海の緣の方から溯つて行くと、江陰と云ふ所に支那の砲臺があり、それから鎭江の焦山、茅山と云ふやうな島のある方に非常な要害があり、其の上流でも南京附近から見ると要害の所があるけれども、それ等の所で革命軍が砲臺を占領して、さうして軍艦の交通を止めれば、大分是は有力と云ふことが出來る。さうして立派に止めた所の內部は自由に自分の方で交通をすれば、大變に有力であるけれども、それにしても長江の地勢では江陰とか焦山などの地方でも非常の決心をした水雷艇などが、夜中に長江の要害を潜つて上流に入り込むことを防ぐのは、餘程準備した軍隊でなければ容易に出來ぬ。長江の內部の方が商船の交通が自由になつて居つても、水雷艇一隻其の中へ入られても大變な騷動であるから、兎に角今の所では長江の交通權と云ふものはどうも容易に官軍の手から取上げると云ふ見込はない。是も若し軍艦の乘組員などの中に革命思想のものがあつて、軍艦の二隻なり三隻なり奪つて革命軍の方にも軍艦が出來たと云ふことになれば、是は亦重大の問題で、さうなつて來れば、始めて茲に江南で獨立國を立て得られる資格が備はると考へられる。之が殊に重大な問題で、革命軍の成功するか否やと云ふことは海軍の問題に大變關係がある。縱し革命軍が江南江北の地方に擴がつて、重な所を占領しても、それでも海軍がなければ結局どうかすると失敗する基になる。將來最も革命黨の形勢に注意すべきものは詰り水上交通の權力を得るかどうかと云ふ問題である。

それからモウ一つは矢張り軍資金である。武昌で百五十萬兩の金を

奪つたとか云ふやうなことがあるけれども、是は少し誇大に失するやうである。昔支那の政府で各藩庫と云ふ布政使衙門の庫に準備金を置く制度のあつた時には、各省の首府に皆現金があつたものであるが近來は其の通り行はれて居らぬであらうと思ふ。それで支那と云ふ國は內地へ入れば入るほど、存外見たよりは正金の少ない國で上海などのやうな大市場でも數百萬兩を超える所の正金は實際ないのである。それだから各地方の都會ぐらゐで何百萬と云ふ金が手に入らうと云ふことは容易に出來ぬ。併し支那の內地で軍需品卽ち兵糧とか何とかを得ることは、本當の正金が無くても、紙幣を發行するなり何なりして得られる。既に紙幣を發行したと云ふやうな電報もあるが、是も勿論印刷した紙幣ではなくて、單に支那の兩換屋が通用して居る票子と云ふやうな種類のものであると思ふ、兎に角それでも一時融通が出來ぬことはない。併し外國から軍器を輸入するとか云ふことになると、どうしても正金が要る。尤も革命黨は其の根據地と云ふものは多くは、海外に出稼の支那人などに在るのであるから、それ等が自分の居る地方で、多少金を持つて居つて、さうして從來でも革命黨などに金を出して居つたものである。それ等が旨く海外に居る商人の金を寄せて、それでもつて軍器を買込んで輸送すると云ふ方法が出來、或は又非常に金を積んで軍艦の二三隻も買込んでさうして事を好む外國人の浪人などを雇つて、支那の海軍と對抗したならば、是は亦存外成功することであらう。支那の海軍などは古船ばかりであつて、唯砲艦などに少し新しいものがあるけれども、巡洋艦以上になると、日本ならば疾くに廢艦になるやうな軍艦ばかりであるから、日本ぐらゐの海軍國などからして、既に廢艦になつて居る船でも或は支那の現在の軍艦よりも良いものがあるから、さう云ふものを買込んで對抗すれば、隨分成功する見込がある。それはどうし

ても矢張りそれだけの事をやるのには百萬とか二百萬とかの金では出來ぬ。少くとも千萬からの金を積まなければ出來ぬことであるから。支那の海外に居る商人が實際力があるからと云うても、それだけの船を買つて、官軍と對抗することが出來るかどうか、そこはまだ疑問である。併し兎に角革命黨が若し成功するものとすれば、さう云ふ途に依つてやるより外はないだらうと思ふ。

それで若し武昌からして南京、上海附近までも革命黨の手に歸して獨立國の宣言をして、隨分外國人に響くやうになりさへすれば、さうすれば其の新獨立國は國債を募つて又北京政府と戰ふことが出來るやうにならうも知れぬ。詰り今の所では革命黨が成功する途としては、海外商人の資金で軍器軍艦を購入すると云ふことであるが、それが出來るか出來ぬかと云ふことを暫く見るより外途はない。今まではゞ革命軍の方から見たのであるが北京の方の立場から見ると隨分あはてゝ居る樣子が能く分る。俄に袁世凱を引出して湖廣總督に任命したり何かして態度が餘程轉倒して居る。袁世凱は隨分一時官場で有力な人であつたけれども、しかし之が實戰の上に就て有効な經驗があると云ふのでもなし、それから湖南湖北の地方に威望があつて、彼れが行けば其の地方の人心が靜まると云ふ譯でもなし現在の北京政府では大分敵視して居つた人間であるのに、それを急に引出して使はなければならぬなどゝ云ふことは、餘程北京政府に定見の無いと云ふことが分つて居る。それで之から官軍の方で若し軍事上に成功をしやうと云ふことになると、海軍などは敵に之と對抗するものがないから、獨り舞臺で暴れ廻ることが出來るが、陸軍などでも今度指揮官に任命されるとか云ふ吳祿貞などゝ云ふ日本で軍事上の修業をして、さうして、今重要な地位に居る男で、年も若く、覇氣もあり、仕事もして見やうと云ふやうな人間が却て成功するのであ

つて、さう云ふ人に十分に腕を振はす方が或は成功するかも知れぬが、其の上に又いろ／＼な人を置いて、さうして袁世凱と云ふやうな人を頭に置いて、さうして權力が幾つにも分れて統一しないと云ふことになると、却て官軍の敗北する原因にこそなるかも知れぬが成功するには何の役にも立たぬと思ふ。岑春煊が四川總督に任ぜられると云ふても、四川に向つて行くに一兵をも手に所有しないと云ふことでは實際何にもならぬ。袁世凱は直隸地方の陸軍を組織して、其方には大分威望がある譯であるから、それを連れて行けば幾らか効能があるけれども、それも袁世凱が實際に軍事上の行動に要領を得るや否やは疑問である。それで一方には廕昌とか吳祿貞とか云ふものが軍隊を率ゐて行くと云ふのに、又一方に袁世凱などを用ひて權力が幾つにも分れると云ふやうなことをするのは、全く北京政府の無定見を現したものである。此の場合では北京政府は當分の間グラついて、もつともつと國步艱難にならぬと、えらい人が出て總ての事を處置すると云ふ場合になるまいと思ふから、若し革命黨の運動が半年も繼續する餘地があつたならば、北京政府の運命も益危くなつて來て、さうして到頭支那の一大事になり兼ねないことであらうと思ふ。

今の所では詰り之が支那の大動亂になるかどうかと云ふことは革命軍が何箇月其の運動を支へ得るかと云ふやうなことが問題になるのである。併し今は事件の最初であつて、殆ど形勢も全く分らないから、もう少し此處二週間も經つて、段々外の地方の樣子も明確な報知が集るやうになつたならば、もう少し正確な判斷を下すことが出來るであらうと思ふ。（明治四十四年十月十七日——廿日）

支那時局の發展

支那の事變は發生以來殆ど急轉直下の勢ひを以て進行して居る、當初豫想したことの大部分は着々事實の上に現れて而も豫想よりも迅速に、其發現の仕方は結局皆革命軍の方に有利に發展して來て居る。尤も官軍の方に於ても運動の仕方が豫想よりも迅速で、革命軍と對戰をして漢口を回復した。併し其の代り軍隊の正當なる運動としては必ず缺陷が伴つて居るに相違ないので、恐らくは後方勤務即ち兵站などの設備がないらしいので近頃になつて其地方に於て官軍が掠奪を行つて居ると云ふ報告も自然桁外れなる運動の必然の結果と考へられる、それだから案外に迅速に漢口をば回復したにも拘らず、肝腎な武昌、漢陽の攻撃に於ては未だ之に伴ふ進行をも見ないのである、長髮賊の時の事實に徵しても武昌、漢陽の陷落と云ふものは同時に兩地を攻擊して同時に之を攻陷す程の勢力を持つて居らねば十分の成功を收め難いので、今日の官軍では武昌漢陽を同時に攻陷れるだけの實力があるかどうかは疑問である、若し順々に一方から攻擊して行くと云ふことになると、既に武昌の背面たる湖南地方が革命軍の手に歸した以上、一方を攻擊して居る間に一方は絕えず後援を得るので、急に官軍の成功を收めると云ふ見込はない、それで武昌漢陽の軍事上の狀況は今後は決して今までのやうに急速な發展をすべき見込はない。

此の外に最も驚くべきことは、武昌、漢陽の革命軍が軍事上餘り成功をしないにも拘らず、詰まり叛旗を飜したと云ふことだけが、既に非常な影響を全國に及ぼしたことであつて、殊に北京の附近にある第二十鎭の上奏、資政院の態度などは實に豫想外なる早い變化を來して居つて、而も又其の非常な勢力で以て朝廷に迫つた資政院が、其の

背後からして又革命軍の同情を失ひつゝあるなど時局は實に眼の廻るやうな變化のしやうである、殆んど佛蘭西革命の當時も想ひやられるが、支那のやうな感じの鈍い國(時としては馬鹿に感じの早すぎる舊來の例であるけれども)としては何人も想ひ及ばざる所である、これは一つは電報汽車汽船といふ文明の利器の補助であることは勿論である。

兎に角色々變化があつたとした所で到着すべき點は大抵極まつて居る。卽ち目下起つて居る所の袁世凱、卽ち朝廷方が主持して居る講和說が革命軍の方に入れられて、さうして一時休戰狀態になつて仕舞ふか、それとも此の儘で戰爭が繼續するかと云ふ二つである、若し休戰狀態に入るものと假定すると詰り講和の結果として官軍は武昌から引上げる、さうして武昌の革命軍の幹部たる一二の人が幾千かの兵を率ゐて北京に乘込む、已に張紹曾の兵が北京附近に到着して居る例もあるから、それと同時に革命軍に應じた各地方の新軍の代表者が矢張り幾百若くは幾千の兵を率ゐて段々北京に乘込む、さうして其の相談の結果として將來の方針が極まると云ふことになる。勿論今日まで革命軍に應じた各地の新軍は大部分は純正の革命主義と言つて宜いかも知れぬが、其間には必ずしもさうでない者もある。卽ち該地方では新軍の革命軍に全く投ずるのを防ぐ爲に獨立の宣言をしたと見られる、卽ち其地方の官吏若くは諮議局などの利口な者の方針に依つて革命運動と云ふ極端に走ることを防止して且衝突の慘害を避けるが爲に、一時中立的の獨立宣言をした者もある。勿論さう云ふ所からも北京に皆代表的軍隊を出すと云ふことになると、北京に集まつた總ての代表者の意見が必ずしも皆一致するものと言はれないかも知れぬ。是は丁度我國の維新の當時のことを考へても思ひ當ることがあるので卽ち袁世凱が總理大臣に公認せ

られると云ふやうなことは、言はゞ幕府の從來尊攘黨を壓服する方針が變じて、公武合體說が行はれ、一橋刑部卿とか、越前の春嶽公とかが、幕府の內閣を組織したと同樣で、武昌の革命黨に講和を申込むと云ふやうなことは、幕府の長州征伐に於て結局長州と講話をしたやうなものである。勿論長州征伐は二度行はれて、初めは長州の降服狀態で和睦をしたが、第二回目には長州の强いのに敵し兼ねて講話をしたのであつたが、今日では武昌の革命軍が未だ當時の長州ほど手强い所に至らぬけれども、併し外部の勢援は寧ろ長州征伐の時よりも激烈な有樣を示して居るから、武昌の革命軍が軍事上に成功しなくても、其の影響と云ふものは遙に維新當時の長州よりも著るしくなるに相違ない。

此處まで考へて見ると、其の結局は殆ど言はずして明瞭である。維新當時も薩長の諸軍が京都へ乘込むとそれと同時に幕府は政權を奉還したにも拘らず、到頭討幕運動と云ふものが成功した。若し革命軍が各地方から皆北京へ這入つた時に、其の中には維新當時の土佐の容堂公などのやうな幕府を見捨てないと云ふ一派も生ずるかも知れぬけれども、結局は矢張現狀破壞派の方が勝を制することになるだらうと思はれる。尤も今日の北京は維新當時の京都と江戸とを一所にしたやうな者で、若し革命軍が皆北京へ集まつて來ると、卽ち薩長軍が京都に這つたと同時に、旣に江戸まで押出して居たと同じ結果になつて居る。さうすると今の禁衞軍は卽ち當時の會津、桑名並に彰義隊のやうなもので、之が北京政府を擁護するに就てどう云ふ方針を執るかと云ふことが見物である。

日本の維新と違つて、北京朝廷の立場の困難なのは、德川の幕府と云ふものは政權を失つても、其の上に朝廷があつて、自分は從來朝廷に對する臣節を守れば處分は濟むのであるが、滿洲朝廷と云ふものは

自ら其の主權者の位を去つて仕舞はないと納まりが就かぬ。其の結局までには多分色々な陰謀も行はれ、北京政府の革命黨に對する買收も行はれ、あらゆる手段が盡されるであらう。併し斯う云ふ事變の時には何時でも極まつた一の傾きがある。卽ち事變が發生した以上は穩健なる議論が決して勝を制せずに、必ず極端なる主張が成功すると云ふことである。維新の當時に於ても幕府の末に公武合體論と云ふものがあつて、當時にあつては或は最も穩健な最も着實な議論であつたに相違ない。勿論それは一時成功もし掛つたのである。それで徳川將軍が政權を奉還したけれども、併し朝廷の御考へも、矢張り將軍はなくなつても、政治の實際は慶喜公に當らしめて其の儘で改革を實行しやうと云ふ意思であつたので、全く幕府を倒さうと云ふ積りでもなかつたらしい。併し其の中に或る極端な主張、卽ちどうしても一度徳川家を倒さなければ大局の一轉はしないと云ふ議論が行はれて到頭極端論が勝を占めて、政權を奉還して仕舞つた徳川家を討伐すると云ふ奇觀を呈したのである。今日でも袁世凱などの意向は勿論滿洲朝廷を其の儘に保持して、其の上に革命黨の主張を十分に入れて新政を行はうと云ふ考へであらう。併し事變の赴く所を考へて見ると云ふと、さう云ふ微温的なる考へは必ず失敗するに極まつて居つて、結局極端論の方が勝を制するに相違ない。從來の事情から考へて見ても、革命黨が屢次支那の各地に於て爆發をして、何時でも失敗に終つた時は、東京に居る留學生の思想なども頗る變化して、一時は百の中九十人までは革命主義であつたが、近頃では百中九十までは革命主義を離れて穩和なる改革說に傾いて來て、康有爲、梁啓超一派の議論が勢力を得て、留學生の中には此の一派に望みを屬して居るものも少くなかつた。勿論此の康梁二人は其の性質から考へても、果して新時代の改革家として、理想家たる以外に實行家たる

資格をも兼ねて備へて居るかどうかは疑問であつたが、今日のやうな時局が急轉直下をするやうになつては益此の穩和の改革派と云ふものは勢力を得にくい。恐らく今日では支那の各種の思想中で、此の穩和改革說が一番無勢力なものになつて居るのであらうと思はれる。詰り殘る所は袁世凱のやうに朝廷の殘喘を保持して、革命軍と妥協をして事件を進行させて行くか、それとも何處までも革命主義で滿洲朝廷を倒して仕舞ふかと云ふことが問題になるので、今後とも時局が一步一步變ずるに隨つて、其の勢力の强まるものは益革命主義の方であらうと思はれる。

是は詰り講話說が成立つとしての上の觀察であるが、最後になると國會の開けると、各省の軍隊が集まつて來ると、どちらが前後するか知れないけれども、今の調子では軍隊が北京に集まるまでは國會の開けると云ふことは覺束ない。さうなつて來ると前いふ通に第一に睨み合ひとなるのは滿洲朝廷の禁衞軍と、各省軍隊の集合團體とであつて、之が日本の上野の彰義隊の戰爭のやうな、都の眞中で非常なる慘劇を現出するかも知れないのである。要するに滿洲朝廷が倒れるにしても殘るにしても、禁衞軍の奮起は朝廷の爲には恐らく利益でない。維新當時でも彰義隊の戰爭が起らない前までは流石の將軍家を一諸侯に下すに就ては、十分の優待をしなければなるまいと云ふので、恐らくは三百萬石位の大名としなくてはなるまいかと云ふやうな評判であつた。所が彰義隊の戰爭の結果として、朝廷は德川家に對して壓迫的に斷行をして仕舞つて、僅に之を七十萬石、卽ち前田家、島津家以下の待遇をして仕舞つた。しかし德川家が滅亡するとは言ひながら、日本の事情は餘程異つて居るのと慶喜公が非常に恭順であつた爲に是位なことで濟んだのであるが、若し今日北京の禁衞軍が、滿洲朝廷の爲に革命軍と戰ふことになれば、其の一擧は卽ち滿

洲朝廷を絕對に滅亡させて仕舞ふと云ふことになるので、今日ではどうしても支へることの出來ない滿洲朝廷の滅亡を、此の一擧に依つて恢復しやうなどとは、想像もせられぬ事である。二百餘年間君臨した家柄が非常に悲慘な境遇を經ずに明渡すと云ふ覺悟であるならば、寧ろ自ら禁衛軍を解散して、幾らか革命軍に對して同情を求めるより外に仕方が無いものと考へる。勿論革命軍が北京に乘込む以上は第一に朝廷に對して要求するのは恐らくは禁衛軍の解散であつて、それに續いて政府の明渡しと云ふことになるのであるが、政府の明渡を單に軍隊の力で遣らせるか、それとも國會が出來てから後、即ち國民の意志と云ふもので要求されるか、どちらかになる位の差あるに過ぎない。大局の上に眼を附けて悲慘なる衝突を見ないやうにしたいものと希望するのである。

以上は講和が成立つものとしての豫測であるが、しかし今の形勢では實は講和の成立は六かしいやうである。黃興が大都統になつたといふ報が眞實ならば、已に講和説を根柢から破壞する者である。講和が成立せぬとするとどうなるか、前にも言ふ如く、官軍の前途は急に發展する見込がない上に、袁世凱は今や召喚を受けて、武漢地方よりも北京の方が大事にならんとして居る。袁世凱が武漢の軍隊を置去りにして歸京するならば、其の士氣を減ずること夥しい事であらう。それに袁は又幾千かの兵を率ゐて歸るといふ説もある、さうなつたなら武漢に殘された官軍は、逃亡か降服かの二途に出づるやうになりはしまいか。袁に是位の事は分らぬ筈はないのであるが、講和が出來ぬ以上は、袁が武漢に居つても結局困頓して、部下の叛亂を招く位の事に過ぎない、どうかすると部下の暗殺などを受ける恐れがあるから、足元の明るい内に引き上げるので、こんな處が袁の本性を現して居る。さうして引揚げるにも討伐軍の勢力を割いても、自ら護衛兵

をつれて來るなどは、最も其のやりさうな事である。要するに袁が引上げたらばモウ官軍の成功は全く絶望になるのである。袁世凱が北京に引上げた上、どういふ方針に出るか、彼の手腕で禁衛軍、其の他の滿人軍隊を利用し、同時に張紹曹などの漢人軍隊を鎭撫して、一時北京附近の小康を保ち得るか、是は或は一寸成功せぬとも限らぬけれども、今までの政治の方針、卽ち滿人無視のやり方では、到底滿人軍隊の滿足を得難いことは勿論で、もし又滿人の勢力を多少でも回復する傾きがあつたら、張紹曹等の漢人軍隊が甘んじないといふことになつて、袁の手腕も施す所があるまい。機に乘ずる政治家として無比の資格を持つて居る袁も、已に末路に瀕して居ると謂つてよろしい。或は僥倖にして一時の小康を得て、其の勢ひに乘じて革命黨の鎭壓でもやると、革命運動は益陰險に傾いて、暗殺などが盛に行はれるに相違ない。こんな事は現在の公明な破裂よりも、寧ろ忌むべき狀態である。

西洋人などは、どうかすると袁に望みを屬して、袁さへ出廬すれば、現狀維持が出來る者と考へて居つた者が少くない、西洋人のみならず、我邦でもこんな謬見を抱く政治家がないとも限らぬ。今日では袁の力で討伐の成功しない事位は分つたらしいけども、袁が北京の中心になつたらば、南北分立が出來るかなどゝ考へる者もあるらしい。しかしこの南北分立の豫想が、そも〳〵大謬見である。支那は昔から江南から起つた叛亂を支へ得ぬのは、地勢の自然である。北方から起つた者は、野蠻の習俗、簡素な生活をつゞけて居る間は成功するが、太平になつて生活が進歩すると、江南の富力なしに、北方で獨立の維持が出來ない。金が百餘年保つたのは、南宋の歲幣に賴つたのである、元は江南の叛亂に堪へずして亡びた。特に元明以來は、北京は全く江南の米と租稅とで生活して居るのであるから、江南の新立國に對して、北

方が獨立することは經濟上、決して許さぬ所である。かういふ事が分らずに南北分立を夢想したり、又此の夢想から打算して北方朝廷の援護支持を考へたりすると、大事を誤るにきまつて居る。こゝらは大に考へて貰ひたい。

猶隣國たる我邦に於て、最も注意を要することは、此の革命の結果が一番我が日本に著るしく影響すること勿論なのである。併し今日では此の時局に對して最もあせつて居るのは日本でもなく、又露西亞でもなく、英吉利でもなくして、寧ろ其の他の國にあるやうに思はれる、卽ち獨逸とか亞米利加とか云ふやうな國が最もあせつて居るかのやうに思はれる。是は日本の政府が確かな意見を懷いて居つて如何なる事變にでも應じ得られる態度が極まつて居る爲であるか、それとも何の意味も無く唯事變を傍觀して居るのであるか。それから其の外の露西亞とか英吉利のやうな國でも同樣であるかどうかは分らぬが、兎に角あせると云ふ方から考へると云ふと、是は最も危險な地位にある國があせると云ふことが當然のことであらうと思ふ。亞米利加などは支那に對して平和の時には十分に發展しやうと云ふ考へを懷いで居つて、例の四國借換などゝ云ふことも出來たのであるが、其の實行が出來ない中に、今回の事變が出來たのであるから、亞米利加の立場が支那に於て最も不確實の點があるので、それで今日の機會と云ふものは餘程亞米利加の立場に取つて大事なものに考へられて居るに相違ない。獨逸は膠州灣に根據地を持つて居るとは言ひながら、今日の場合、東方亞細亞に若し愈事變が破裂すると云ふことになると云ふと、日本とか露西亞のやうに十分に兵力を送ると云ふ便利もなし、英吉利の如く亞細亞に同盟國を持つて居つて、其の協力に依つて地位を安全にすると云ふ譯にも行かないから、寧ろ現在持つて居る地位を失ひはしないかと云ふやうなのが非常に心

配な點であるので、それであせるのであるかも知れぬ。是等は勿論其の國其の國に取りては當然なことであるが、日本はそれ等とは餘程事情を異にして少しもあせることを要しない。併し斯う云ふ事變に際して若し又手段を誤ると云ふと、それは日本の將來に取つて非常に惡い影響を來たすことであるから、十分に是は考へなければならぬ所である。或る新聞の電報を見ると、北京などで日本が滿洲朝廷を滿洲に擁立して一運動を試みると云ふやうな奇怪な説があるやうにも見える。併し是は勿論日本の當局者としては、そんな愚な考へを持つて居るやうなことはなからう。支那の大勢は歸着する所明かであるから、大勢に逆らうと云ふことは、今日に於て最も不利益なことであつて、若し日本が斯う云ふ事變に際して、支那に關する色々な未決な問題を此の際に解決しやうとするのであつても、亡滅に瀕した朝廷を援助するなどゝいふことは、最も策の當を得たものではなからうと思ふ。滿洲の朝廷と云ふものが、將來どう云ふ形に變るかと云ふことは、今日に於て之を言ひたくないことであるけれども、兎に角今日の形勢では既に今まで都を立てゝ居つた場所に於て勢力を失つて仕舞ふものとすれば、支那の領土の如何なる點にそれが立籠もるものとしても、決して勢力の恢復が出來ぬのみならず、又單に殘つた力の維持をもし得ないと云ふことが明かである。矢張り是は歐羅巴などの滅亡した朝廷と同樣に、世界に流寓して居る皇族の一つとなるに過ぎないのであつて、是等の處分を朝鮮の王室などゝ同樣にすると云ふことを考へるのすらも既に誤りである。此の如き流寓の皇族が、異人種の遠國に赴くよりも、特に名族の沒落に天性同情を有する日本などに來られることは、尤も至極であるから、十分に優待の道は盡すべきであるが、若し之を日本の勢力範圍たる地方に一主權者として迎へて置いて、新立國の深い猜忌を招いたり、又結局は其の

主權を我が邦の手で奪はねばならぬやうなまづいハメに陷らぬやう、豫じめ熟慮して置かねばならぬと思ふ。此の時局の結果が、列國の干涉を來し、又分裂の端を啓く患はないかといふ疑問はいづれ起るのであるが、勿論それも大に研究して置くべきことである。戰亂が長引くと干涉の來るのは當然であるが、目下の處ではさし當り、列國は北京を戰亂の巷とせぬ位の要求はするであらう。是は列國の北清駐屯軍の力で、政府にも革命軍にも忠告して、北京市街戰の慘毒位は避け得られると思ふ。しかし列國はドチラでも早く實力ある政府さへ成立したならば領土保全の原則を變更せずして、あまり立入つた干涉を好まぬだらうと思ふ。但だ玆に容易に解決せぬ疑問として殘るのは、內外蒙古の各部、西藏などが、新立國の共和政府に歸服すまいといふ豫測である。彼等は第一に漢人に歸服するを好まないことが明かで況や共和政府といふやうな、天命を受けた天子のない國は、國とも思はないかも知れぬ。外蒙古などは露西亞の保護を受けるとも、新共和國には服從せないだらう。又西藏の法王なども、寧ろ露西亞か、英吉利に便ることを望むやうになるに相違ない。さうなると內蒙古には、日本に關係深い王族もあるから、其の始末も問題になる。尤も新共和國はこんな塞外の領土には全く眷戀せぬかも知れぬ、又此等の厄介物を離してしまふ方が、支那の經濟上、却て利益である。それで新共和國との折合は六かしくないとして、他の國々が之と同樣の利權を得やうとすれば極めて困難な問題になるのである。しかし此は實に千載の一時で、此の際の問題さへ巧に解決すれば、東洋の平和も永續し、動もすれば人の口に上る日米戰爭も、絕對に防止せらるのであるから、大に注意を要する。何にせよ此の如き機會には、着々先手を打つて、色々な苦情の出て來ぬ前に始末をつける手腕がなくてはならぬ譯であるが、切に當局に注意を望むより外に道がない。

假りに支那の共和國が成立するとして、其の將來の豫測は、又興味ある事であるけれども、其の興味に耽るにはまだ少し早過ぎるから、先づこゝらで打切て置く。（明治四十四年十一月十一日—十四日）

中華民國承認に就て

中華民國の承認といふことに就ては、革命黨が南京に假政府を組織して、孫逸仙を大總統に選擧した當時から、日本には已に同情者があつて、早く承認するといふ方の意見もあつたやうである。自分は固り革命の成功を早く斷言した一人であるけれども、是は同情とか贊成とかいふ意味でなく、單に事件の自然の推移を豫測する上から言つたばかりで、所謂中華民國を承認するがよいかといふことになると、是は又別問題である。それで南京に假政府が存在して居る頃から、已に中華民國の承認に就て、二箇の疑問をもつて居つた。其の一は承認時機の問題、其の二は民國の性質の問題である。

時機の問題に就ては、南京假政府に對しても、承認倘早を主張するつもりであつた。尤も革命黨の成功に就ては殆ど初めより疑ひを挾ん

で居なかつたので、南京假政府がドコ迄も其の出發の際の主張を固持して、其の主張通りに、成敗を問はず、局面の解決をするつもりであるならば、之を承認するも面白いとは思つたのであるが、南京假政府といふ者は、其の成立すると間もなしに、已に袁世凱と講和の進行に着手して、この講和が成立すれば、何時でも孫逸仙が大總統を辭任するといふ意向であつたから、もしさうなつたらば、講和成立後、新に組織さるべき政府が出來ぬ間に、過渡期の中ブラの政府を承認すべき理由がないと思つたのである。處で今日では果して講和が成立して、清帝は政治上の實權から退いたけれども、其の跡へ立つたものは袁世凱といふ機會主義の人物であつて、孫逸仙は辭職してしまつた。南京時代に承認しなかつたのが、まア善かつたと思はれる事である。今日でも袁の大總統は形式上、南京參議院といふ者に對して宣言して爲つたのではあるが、事實は南京へも行かず、依然として清朝の遺した政治機關なり、軍隊なりを根據として居る。勿論中華民國の承認といふ問題は、新に出來た政府が果して支那を統治する實力があるか否を判斷する上から來るので、南京假政府の相續者であらうと、清朝の相續者であらうとは問ふ所でないのであるが、それにしても現在支那の代表者たる袁は北京に居つて、清朝の舊物を引き繼いで居り、參議院は南京に在つて、是亦南方に新に興つた威力に憑據して居り、兩頭の觀があり、且南方から新に任命されたといふ風説のある大臣などが、果して北京の新地位に就くかも分らず、事實上南北の統一が出來る見込が立たぬやうでは、袁の新政府を承認すべき理由は、極めて薄弱である。其の上袁の地位も六箇月間有効の假政府であつて、國民議會召集の上、眞の大總統が選擧さるれば、袁は孫逸仙の眞似事をして、潔よく辭職するといふ宣言を發して居る。國民議會の結果として、袁が再び當選するかも知れぬけれども、それは將來の事で、今日

の假政府は依然として永續の性質を持つた者ではない。さうすれば極めて公平に自由に觀察した所で、袁の政府を承認するといふことは、やはり時機尙早だと思ふ。近頃は列國の間に借款の競爭が始まり、それが又京津其他の軍隊擾亂の爲に慌てゝ、四國借款が六國借款になるとか何とか、列國共に無定見の運動が行はれて居るが、借款で一時を收拾した援助政策が何時まで效力があると思ふのであらうか。
今日は南北兩中心ともに、借款で急場の凌ぎをつけやうと思ふから、共同でやつては居るが、借款で暫く雙方とも息をつくと、兩中心の合同が又暫く延期する丈の餘裕が出來る、つまり借款は支那の統一を妨げるに過ぎぬので、一時の小康は却て永久の統一に害がある。借款も出來ず、列國の援助もなく、南北共に苦しみつゞけ、軍隊も離叛し、一時大擾亂に陷れば、寧ろ其實力統一が早くなるのである。此の點からしても、承認の時機は無論まだ來て居らぬ。實は今日は承認より以上の問題が借款であるから、借款に力瘤を入れて居る列國の淺見者に、不承認論などは、分る筈がないのであるけれども、あまり目先が見えずに、將來の損になるとも氣がつかぬから、一言して置く。
以上は時機に就ての問題であるが、其の外もう一つは中華民國と云ふものゝ性質の問題である。中華民國と云ふ名は、今度革命軍が起つたに就て、始めて出來たのではなくして、前に既に其の名を唱へて居る人がある。卽ち革命黨中第一の學者と言はれて居る章炳麟の書いたものにあるので、章炳麟が曾て民報と云ふ雜誌に中華民國解と云ふのを載せて居る。是は勿論章炳麟一個の理想であつて、今日成立つた所の中華民國と云ふものが、其の主張を繼續して居ると云ふ譯でないかも知れぬけれども、兎に角章炳麟は革命黨には學者として重望の有る人でもあり既に其の採用した名が今度の國名にもなる位であるから、章炳麟が中華民國に就いて懷いて居つた所の理想は、今

日全く穿鑿をせずに仕舞ふと云ふことは手落ちかとも考へられる。
それでは章炳麟は一體どう云ふ主張を有つて居つたかと云ふに、中華民國解と云ふものは、支那の昔からの種族の歷史を說いて、政治上には餘り關係の無いこともあるけれども、詰る所支那種族と云ふものゝ發展の歷史から結論をして、さうして何處の地方までが此の中華民國に入るべきものであつて、どう云ふ人種は中華民國から除いても差支ないものであると云ふことを說いて居るのである。勿論中華民國解は、一つは滿洲を排斥する上に就いて、其議論を立てたので、滿洲を排斥するのは、種族の上から排斥するので、若し滿洲人が自國即ち支那の主權を去つてしまつて、さうして北京から其の產出地へ引退いて行つたならば、是は日本や暹羅などゝ同じ位に見て差支ないと云ふことを言つて居る。
所で茲に最も見遁すべからざることは、章炳麟の議論は、漢の時の郡縣であつた所を境界として論究すると、蒙古や、回部即ち新疆や、西藏地方と云ふものは、是は漢の領土には入らなかつたから、之れを經營することは後廻しにしても差支ない。併し朝鮮の土地は、是は漢の時の版圖に入つて居る。安南も矢張り同樣である。それで此の二つの民族と云ふものは、其の風俗が多く支那と同樣であつて、言語は違ふけれども、其の文字の讀み方は頗る支那に近い。日本が文字を讀むのに大に支那と違ふやうなのとは別である。殊に血統を言ふと朝鮮の方はまだ幾らか雜であつて、純粹の支那種族とは違ふけれども、安南などは皆支那と人種が同じものである。たまに野蠻人が其の間に居るとしても、それは廣東の瓊州などゝ同樣であつて要するに是は支那と同種族のものと見ても宜い。それで愈中華民國と云ふ支那民族に依つて組織したる支那を恢復すると云ふ時になると、是等の土地をも恢復することは中華の民族の職分である。殊に外國からして支配

をされて居つて、非常に國運が衰へて居る此の二つの國などに對しては、人道上宜しく之を救助しなければいかぬものである。それから其の次は緬甸であるが、緬甸は是は漢の時の版圖には入らない。明の時になつてから土司を澤山置いて、さうして雲南に附屬させたが、其の風俗は中華とは違ふけれども漢人の住居して居るものが非常に多く、雲南地方の土司などと餘り變らない。併し元來是れは支那の郡縣として支配したことはないから宜しく是等は朝鮮の次として取扱ふべきものである。殊に外國人は緬甸に對しては安南ほど苛酷にはして居らぬから、それはゆつくり救うても宜しい。西藏や回部即ち新疆、是は明の時に唯王を册封したに過ぎなかつたが、漢の時などは矢張り都護に附屬して居つたけれども眞の屬國ではない。殊に今の新疆は、漢の時にあつた三十六國とは違ふ。それから蒙古は昔から一度も服從をしたことがない。それで若し此等の種族に對して、中華民國が支配をすることの前後を考へると云ふことなれば、まだ西藏の方は宗教が同じだからと云ふので近い點もあるが、回部とか蒙古とか云ふものは少しも支那民族と同じ點がないから、中華民國の疆域から考へると、安南と朝鮮は必ず恢復しなければならぬものである。緬甸は其の次に着手すべきものである。西藏、回部、蒙古是は服從して來るなら來ても宜し、服從せぬならせぬでも宜し、勝手に委すべきものである。斯う云ふ事を主張して居る。

此は章炳麟の一個の考へであつて、今日の中華民國と云ふものと何等の關係が無いと云へばそれまでゞあるけれども、既に中華民國と云ふ名も章炳麟の考へを採用したのであり、章炳麟の主張は革命黨中の支那留學生などには非常に有力なものである。さうすれば今日中華民國と云ふものゝ承認を外國に對して求めるならば、是等の點に就いては自分でもハツキリと其の主張を明かにしなければなら

ぬ筈である。詰り列國が此の章炳麟の議論に餘り注意を拂はずに居つたからこそ、何も是は議論にならぬことであるけれども、若し之に對して注意すると云ふことになると、中華民國と云ふものを承認すると云ふことは、幾らか此の中華民國が理想であつた時代の主張をも承認すると云ふ傾きになるのであるから、章炳麟の議論を知つて居る國は必ず其の儘で承認すべき筈はない。日本が既に現在朝鮮を支配して居り、それから安南は佛蘭西が支配して居り、緬甸は英吉利が支配して居る。さう云ふものに對して中華民國が必ず之を恢復すべきものであると云ふやうなことは、今日の列國の均勢上甚だ不穩當な言論である。若し中華民國が今日の儘で承認を求めるとすれば、此の章炳麟の議論は、單に一個の學者の理想であつて、今日の中華民國とは何の關係も無いものであると云ふことを明かに宣言すべきものである。若し列國の側から考へると、此の議論は別に政府の主張と云ふのではないから、改めてそれが章炳麟一個の理想か、今の中華民國の主張かと云ふことを詰問するにも及ぶまいけれども、理想時代の中華民國と云ふものは、さう云ふものであつたと云ふことだけは承知して居つて、さうして承認に就いて宜しく手加減もし、それに對する用意もしなければならぬことである。詰り中華民國と云ふものゝ理想と言はうか、或は主張と言はうか、さう云ふ點から見て輕輕しく承認を與へると云ふことは愼まねばならぬと云ふのは即ち此點である。

それで日本などのやうな國に取つては、殊に隣國の將來の運命に關係した重大なる事件であるから、是等の二つの事、即ち時機と主張とは十分に注意をして貰ひたい。

日本の政府の方針の善惡は茲に何も論じないけれども、どうかすると一方に極端に走つて居るものが、又其の反對の方面に走ることが

ある。初め支那の政體にまで干渉しやうと云ふやうな考へを有つて居つたものが、一旦手を燒くと何處までも無干渉であつて、さうして滿洲のやうな日本の貿易上の利害に非常に大關係のある所に革命黨の軍隊が上陸して戰爭をおつ始めても、それさへ懷ろ手をして何もしないと云ふやうな非干渉政策が果して宜しかつたかどうかと云ふことは疑問である。それで此の新共和國の承認などに對しても、むやみに非干渉政策に傾いた儘、注意すべき種々の重大なる事を全く見遁して仕舞ふと云ふ虞がないでもないから聊か注意をして置くのである。（明治四十五年三月十八日—廿日）

以上四篇は皆大阪朝日新聞に載する所なり

支那の時局に就きて

近頃、人に逢ふ毎に支那は一體ドウ成るだらうと云ふ質問を受けることが屢々である。

抑、この質問たる、支那現勢の漠然たるが如く亦漠然たる質問であつて、此に對して一言以て之を蔽ふが如き答を爲すことは、何人と雖爲し能はざる所である。遠き將來まで貫通して支那がドウなると云ふ問題に解決を與ふることは、今日において決して容易の事でない。シカシ支那現在の形勢の上から看て其がドウいふ風に傾いて行くだらうかと云ふ事は必しも測定し得られない事ではない。

近頃は例の借款問題が思ふやうに行かぬと云ふので色々悲觀說が起り、其中に同盟會即ち革命黨出身の總長等が辭職などするので頗る混沌たる有樣になつて居る。乃で同盟會即ち革命黨出身の總長の

辭職などはドチラかと申せば、形勢の決する上において一歩を進めて居ると見ることも出來る。即ち袁に對する異分子が退いたのである。一體袁がアマリに八方美人主義を取りて何もかも穩便に事を纒めやうとするのが、現在の支那の形勢を不安の地に陷るゝ最大原因である。故に今、以て日本竝に諸外國の人々が袁の手腕に信頼して居る傾きが有つて、袁に頼りて以て支那の統一が成し遂げらる可しとの考を懷いて居るけれども、今迄の如き袁の行り方であれば此の推測は恐らく的を放づれるのである。シカシ段々と異分子が減少して袁に取りては內閣の統一が行はれやすくなつて來て居るから、若し此の上に一段と確乎した決心があれば、現在の支那が袁に頼りて統一せられないと云ふこともあるまい。目下は勢力の統一問題と云ふものが一番重大なるものである。革命の初に當ては各省が箇々獨立して居たのであるが、ソレが色〻な成行を經過して來て、今日と雖尙、支那には五の中心があると看ることが出來る。一は北京即ち袁の膝下である。一は南京、即ち最近まで黃興が革命の本部として居た處である。しかし黃興、一たび去りて其の勢力の幾分かを衰へしめて居る事は事實である。一は武昌即ち黎元洪の勢力で立つて居る處である。一は廣東即ち廣東派の根據地。一は奉天、即ち形勢に制せられ已むを得ず共和に贊成したけれども內實は新政體を慊ばないものゝ集合せる處、この五の中心が屹立して居る次第である。而して袁は大總統と云ふ空名を擁して居るけれども河北各省に對する外は其の威力は勿論の事財政その他內政の整理に必要なる命令すらも行はれないのである。各省とも皆財政に苦しむと颺言するけれども、其の實北京以外の四中心の各地においてはさほど甚しい窮乏を感じて居ないのである。元來財力豐富なる武昌、廣東は勿論、奉天の地と雖その地方の行政費を支辨するには十分なだけの收入がある。況や南方の三

中心地に於ては年々、北京の中央政府に送る可き租税を私に壟斷して居て新しく都督その他、官吏になつたものゝ腹を肥やして居るをや。借款の前渡しが出來るたびに喧しく兵費を要求するけれども、此は實際に困まるから要求するのではなくして、出來てある金を取らぬのは損であるから要求するのである。其を亦、袁は各中心勢力の機嫌を害ねまいとする所から、少々ばかりの借款前渡の中から皆、分捕らして居る、今日に於て北京は名前ばかりの總長がズラリ列席して居る外、中央政府に必要なる機關をも備へないから、苦しいながらも繼續して居るけれども、若し眞に中央政府らしい權威ある政府を建設せんとすれば一番眞ッ先に困るのは北京である。袁でも誰でも構はない、中央政府に立つものゝ最善政策としては外國人の財政監督權でも何でも構ふことなく、一時如何なる屈辱をも忍びて一遍に大借款を成り立てゝ、其を中央政府の手に掌握したらば、金の有ると云ふ强味を利用して喧嘩腰で以て、四中心に向ひ統一を迫るがよい。若し各中心が其の兵力を解散せず租税の壟斷を止めず、苟も統一を妨ぐ可き動作を止めないならば、何時たりとも手に在る金を以て戰爭をすると云ふ覺悟で威迫的に統一を强制したならば、統一は存外、容易であるのである。統一の容易なることは色〻の原因がありて、或は近來革命黨がドサクサ紛れに大部、金を拵へたので端なくも英氣を銷磨してしまつて何事もする氣力が無いと云ふ人もあるが、成程それもそうかも知れぬ。が、第一は支那人一般に久しく騷亂の味を知らなかつたので面白半分に革命騷ぎに彌次馬の仲間入りを試みてみたけれども、三四箇月も騷いでみるとナニがサテ其の恐ろしい事、損な事に懲〻してしまつて、モハヤ騷動に倦み果てゝ居る。何分にも早く統一して相當の安心を得たいと云ふ傾になつて居るから、誰か十分の威力があつて早く統一してくれる人があれば是迄、物好きに革

命黨などに金を注ぎこんだ商人なども皆、相率ゐて其の方に加擔するやうになるのである。袁が唯それだけの決心なくして革命黨にも良い顔が仕たいしソコラ中を都合好くしてやりたいと云ふ優柔手段からして是ほど容易なる統一も今日尚、成し得ずに居るのである。袁には妙に人を引きつける魔力があると云はれて居るので、若も北京に這入つて來たものは、誰も彼も袁に籠絡せられてしまふ。デ、あるから統一は出來ないまでもさして大亂脈にも至らないで濟んで居るのであるが、シカシ完全な統一は此の魔力位では成し遂げられない、此等の事は我が國、維新の際にもイクラか類似したことがある。維新の際、已に新政府が成立したのであるが其後、完全の統一が出來るまでには佐賀に江藤の亂起り、長州に前原の騷動有り、最も大なるは薩摩に西鄕の暴動起りたる次第であつて、之がために少からず兵力を費し、又、不換紙幣を濫發したので、甚しく財政を紊亂するの已む無きに至り、而して尙これを鎭定した中央政府の有力者が暗殺に遇ふといふことまでも犧牲にしてヤット統一の事業を成し遂げたのである。此の時における、岩倉、大久保などいふ政治家が毅然として自己の禍福を度外に置き、統一的大事業に身を獻げたる度胸は、實に驚くに堪へたるものである。實に此の事については岩倉、大久保の諸氏は一時、外國に對する屈辱即ち條約改正の見合はせまでもして、先づ國内の統一を謀つたのである。袁にして此の二君の如き度胸があるならば、支那の統一を仕遂ぐることは、蓋し甚だ容易の事であるのである。尤も袁の優柔は或は支那流に成功せぬとも限られない。自分の方さへ急に潰れなければ、革命黨などの樣な一時に勃興した勢力は日ならずして衰滅に歸するといふことを見越して居て、骨の折れる威壓を加へないでも可いと云ふこともあらう。シカシ今日で革命黨が縱し衰滅に歸したところで、地方割據の勢ひに慣れて中央政府に

金を出さずとも濟むといふ味を占めた南方各省は結局、多少の威力を用ゐずしては之を統一することは頗るムヅカしいのである。

支那人は近年勃發した利權回收熱の結果外國に對する不面目を囂々するけれども、六國の銀行などゝいふものは必しも政治上の意味を有する譯合のものではない。勿論、政治上の意味が絶無であるとは吾輩と雖斷言はせない。ケレドモ日本とか露西亞とかいふ國はドチラカと云へば只管、既得の權利を保護するために六國借款同盟に加はつたもので新しく得る利益といふ考は殆ど無いと云つて可い位である。從來海關稅さへも外國人の手に任かして何の不都合無きのみならず、却つて支那人が爲すよりも復に好成績を收めて居る點から考へても、寧ろ今度の大借款を利用して外國人を或る程度まで使用して、鹽稅その他稅制整理をする方が、支那財政の將來のためには非常な利益を齎すかも知れない。一體支那見たやうな國は自ら自分の位地を眞正に知悉したならば、政治も經濟も世界各國に共通して開放する方が、却つて自分の獨立を確保する所以であるので、些々たる體面論などを喧しく言ふのは、全く日本などのヤリカタにカブレた最も愚なる政策である。其の所謂大借款なるものも六億などゝ仰々しく言うて居るけれども、實際は一億五千萬位で急場の始末が就くのである。此は吾輩が或る標準からしてソウいふ風に考へたのであるが、近頃、北京から歸つた人の話によれば熊財政總長の意見なども丁度、一樣であると云ふ事である。勿論使用の方法については熊總長の考と吾輩の考とは少しく相違して居るやうである。シカシ熊總長などが責任ある地位に立ち且平素大に財政の事に注意して居たものであるからソウいふ風な考へも出るのであるが袁の腰が定まらないために貸したがつて居る銀行團も全く貸し得ない、出來る統一も出來ないところを見ては袁の老猾なことは十分わかるが其の

度胸の無いことも又、明かに知らるゝのである。ソレで近頃に及んでタイムスなどが借款反對論を唱ふるやうになつてきた。若し此が愈ゝ手切れになるといふことだと即ち曩に云ふ通り眞ツ先に困まつて驚るゝのが北京の中央政府である。其から先き誰か支那統一の大業を成すものかと云ふ事は今の時これを豫想することは出來ない。外國人なども金を支那に貸したがり今迄少しばかりの前貸しをして居たのは、金を貸さなければ兵隊が騷動をする、其のために經濟組織が紊亂せらるゝ、ソコで此の騷動を鎭定せしむるといふ事になると最も平素毛嫌ひをして居る日本と露西亞とが支那に於ける勢力の增進を來たすといふので危ぶみながらも前貸しをして來たのである。サレド今日は支那人民一般に亂を厭うて居るから、間違つても決して目覺しき大騷亂を惹き起すやうなことは無い。袁その他の人物の盛衰には關係は有らうけれども、外國貿易などの上に大影響が無いと云ふ事が外國人に呑み込めるやうにすれば、外國人の非借款論は段々と勢力を得る事になるを免れない。タイムスなどが慥かに其の兆候を示して居るのである。ソレで借款がドウしても出來ぬといふことになれば支那人は支那人自身で支那の統一問題を決せねばならぬことになる。此の事だけは今日に於て言ひ得らるゝのである。

以上の論は支那の立場からして見たのであるが、元來、東洋の大勢から達觀する時は非借款が大に宜しいのである。外國人が慾い少しばかりづゝの前貸しをして、ソレを又、袁が各中心地に分けてやつて居たから、恰も死ぬるか生きるかわからないといふ際どい病人を注射で持ちこたへて居るやうな鹽梅で、之がために問題の解決を無理に延ばして居るといふ有樣である。支那統一問題の一日も早く解決を告ぐる方が世界平和のため——特に日本などのやうな貿易關係の密

接な國のためには大に利益ありとすれば、問題の解決するまで一文も金を貸さずに、袁などのやうな只從來の經歷からして信用を得て居た人間の箔が早く落ちてしまつて、裸一貫の實力で以て統一事業を完成する人間の出現することを速めるのは實に望ましき事の限りではあるまいか。支那のやうな國は近頃云ふやうな五族共和などいふ清朝が殘して來たところの版圖を其のまゝに持續して統一せねばならぬ必要もあるまい。蒙古とか西藏とか、支那の財政を維持するためには損にこそなれ得にはならない各地方は寧ろ此際切り離して、純粹の支那だけを統一する方が、支那に取りて幸福であるかも知れないと思ふ。

此の非借款が好いと云ふ考へは自分は去る三月頃に滿洲日日新聞の記者に話をして其の新聞に掲載せられて居たことがある。早晩支那が屈辱を忍んでも金を借りて統一を早むるか、或は借金なしに北京の中央政府が斃るゝのを犧牲にして統一を來たすか、孰れか一方に此の問題の歸着を見るべき運命に遭遇して居るのである。此の時に及んで確乎たる考が無いといふと、日本政府などはモウ一遍、失敗の上塗をするのである。過ぎ去つたことは仕方が無いが、一番の捷徑は南京に革命政府が起つたときに、僅々千萬兩も金を世話してやつたならば、夙に革命政府の手に統一が出來たかも知れないのであつたのである。ツマルトコロ金で以て統一するか、金無しに人物の出るのを待ちて統一するか、列國は其の統一に達する道行を見物するのにドコまでの辛抱が出來るであらうか、此が今日支那の將來について注意すべき事柄である。（大正元年八月一日太陽）

支那現勢論

余は、一年程以前に、本誌上に隣邦支那の時局に關し、聊か卑見を開陳したことがあつたが其後支那の形勢が恰かも一年前に述べし通りに運移して往つて居るのは、事の當然であるとは云へ、我ながら其の不思議に驚かざるを得ない次第である。

當時余は、若し袁世凱にして統一を成し遂げやうとするならば、一方には、條件などを喧しく言ふを休めて、一時屈從に甘むじ、左に右に借款を成就するに越した事は無い。其頃、借款の豫定高は、六億と云ふ事であつたが、右様な大金は必要が無い、一億五千萬位で澤山であると云ひ、ソレカラ其の金が出來たならば、袁は之を握つて、箇々に分立して居る各中心地、即ち武昌、廣東、南京、奉天などに、高壓的に統一を强制するが善い。支那人は、第二回の革命には決して人氣が無い第一回の革命騷亂で、實に懲り果てゝ居る。乃で、袁さへ强く出れば、統一は事甚だ容易であると謂つておいたが、爾來、支那の形勢は寔に其の通りに運んで來たのである。借款の高も、吾輩の豫定よりは少し多いけれども、ヤハリ實際に於て、六億など大金は要らなかつたのである。ソレで其の前渡が出來るや否や、袁は倏ち尻を捲つた態度になつて、ドシドシと南方に壓迫を加へて居る。之は勿論、袁に對する南方の反感が、漸を以て增加し、又袁の內閣に於ても、倍〻國民黨を排擊する事になつて、到頭孰れの邦にも革命後には必然起る所の暗殺時代を生じて來、宋敎仁暗殺の一件から、袁に對する國民黨の反對が、激しく成つて來て、否應無しに、威力を以て壓迫せなければ、袁自身の地位さへ危險に瀕する所から、袁も已むを得ず度胸を定めたのであるが、政治家の德義などゝ云ふ上から云へば、袁の態度は固より憎むに餘りある點が多いのであるけれども、袁の如き眞の度胸なき政治家の取る方法と

しては、餘儀無き事であつて、假令その事は陰險であらうと、不愉快であらうと、此でなければ切り拔けることがムツカシいのである。袁の人物論としては、種々の感情から立論することが出來るけれども、支那が到底統一せらるべきものとして考ふる以上は、袁の態度は必然來たるべきものと見るより外に致方は無いのである。日本でも、維新以前に既に已に幕府の新徵組などが、民間の志士に對して暗殺を行ひ、維新後になつても長州の廣澤其他の志士の暗殺に遭ふたのは、其使嗾者は恐らく政府部內に在つたかと疑はれて居る位である。唯維新當時に於ける日本の當局者は、自分でも、赤裸々で生死の境に出入して、暗殺時代を衝き拔け、決して袁のやうに宮中の島に立て籠るやうな、見苦しい態度に出でなかつたと云ふ相違はあるが、其の代りに、岩倉公は危い處を免れたが、大久保公は遂に暗殺の禍に遭つたのである。民間に於ては、板垣伯も危險な目に出會つた。斯う云ふ危險時代は、森文部大臣が殺され、大隈伯が怪我する時まで、繼續したのである。支那の暗殺時代も、朝と云はず、野と云はず、此處數年間は、繼續するものと諦めねばならない。南方の裁判所が、趙秉鈞を喚び出し、北方では、亦黃興を召喚するなど、日本で惡口に云ふ、上方者の喧嘩のやうに、煑え切らないことをしてゐるが、日本では、維新當時、氣の早いだけに、米澤の雲井龍雄など片ツ端から斬つてしまつた。氣が早いだけに、日本は早く纏まつたが、支那はモ少し纏まりが遲いものと見ねばならぬ。併し昨年に比しては、今日のところ大分、箇々分立して居た各中心地の勢力が、衰へて來て居る。武昌の黎元洪なども北方の兵を自分の土地に入れ、殆ど城を明け渡さむばかりにして、自分の土地を通過せしめて、江西に向はせた。恰も德川家康が、豐太閤の北條征伐に、居城の全部を明け渡して、御用に立てたと同じやうな態度であつて、自己の勢力を全く認めない仕方である。此で武昌の中心と云ふものは、八九分

通り消えてしまつたのである。廣東に於ても、商人が借款に贊成するがために、國民黨の都督が其の勢力を失つた。宗社黨が勢力を失ひつゝあるがために、奉天は都督も代り、一の中心たる事實が無くなつて來た。只江南の三省卽ち江蘇、安徽、江西の三省だけは、今尙袁に反對の態度を維持して居る。此は云はゞ、薩州の老西鄕が、明治政府に對して居たやうなものであるが、其の中の江西都督李烈鈞が、若手であつて、最も强硬に袁に反對するなどは、宛がら薩州の私學校派に似て居ぬでもない。明治政府はドチラかと云ふと、自ら進みて薩州の反對派を誘き出して、騷動を速く起さしめたやうな形があつたが、袁も近頃李烈鈞を免職したが、そこが支那だけにそれが爲に形勢が破裂しさうな模樣もない。此の如く反對黨といふものも、意氣地がないが、袁の政策も依然として無方針である。第一、借款の使ひ途からして、其日暮しのやりかたで、基礎の立て居らぬことが解かる。借款の約半額は、既往若しくは近き將來に期限になつて居る未拂借金辨濟に當てるのであるがこれは致しかたが無いとして、其他は本年四月から九月までの行政費が五百五十萬磅、各省軍隊の解散費が三百萬磅、鹽務、整理費が二百萬磅で、それで畢りといふ次第である。此中將來の財政の基礎となるのは、最後の鹽務費の一項のみで、其他は皆大きな借金を片ツバシから湯水の如く使つてしまふのである。第一各省軍隊の解散費などに三千萬圓も要する。それだけの未解散軍隊が果してあるか、名目ばかりで實際ありもせぬ軍隊に大金をかけるといふのは、つまり依然たる各省の分取り策に應ずるので、此の分取り金があれば、各省は又それだけ、中央政府に對する反抗力を持續し得るので、卽ち實力統一の延期を招くのである。此の分配金の豫算が不正確なることは、現に袁に反對するだけの兵力を備へて居た江西に向つて最少額の解散費を宛てがつてあるのでも明らかで、結局これは解散費でなく

つて、中央政府から各省への賄賂である。袁にして眞に財政の基礎を立てやうといふならば、內國に使用する一億萬は之を積で置て中央銀行を立て、兌換制度を確立して、ソコから發行する紙幣で、軍隊の解散も行政費も、鹽務費も生み出すべきである。これだけの借金で、九月までに使つてしまひ、その後はどうする積りか。袁の政策を揣摩するにこの借金で一時の急を凌ぐ間に國民黨を叩き潰し、反對派さへ一掃してしまへば、何事をするにも容易だからといふのでもあらう。シカシ是は機會主義の極端なもので、第一其の政策の腹案もないやうな政治家が、いかに反對派を一掃したからとて統一を成し遂げ得らるゝものでない。袁の現在のやりかたでは借金は使ひ盡す、政府が持てなくなる、投げ出すといふに止まつて、統一が又延びるかも知れぬ。統一も出來ず破裂もせぬ結果として、暗殺時代が更に繼續することは、毫も疑はれない。自體、暗殺といふ奴は微細な仕事で以て一時に、大勢を轉換することがないでない。譬へば、身體の健康不調和を、服藥とか按摩とかで治すかはりに、針か灸かで治すやうなものであつて、日本などでも、世の中の秩序が恢復して、人間が漸々と臆病の度を増して來るに從つて、暗殺の效能が漸々と加はつたのであつた。岩倉公の遭難や、大久保公の罹禍などでは、大勢を變化せしむるまでに至らなかつたが、其後の條約改正に於ける、大隈伯の怪我などは、忽ち其の事を中止せしめたのである。支那人の如く、元來臆病な人間には、暗殺の利き目が一段と烈しいから、今後も隨分と爆裂彈で以て、大勢を變化せしむるかも知らぬ。袁の島籠りも頗る策の得たものであるかも知れないが、この處一年ばかりは、借金の效能で左に右袁世凱の政府が急に顚覆するやうなことは、先づないと思はれるのである。

日本にもあつたことであるが、明治の初に、集議院と云ふものを開いて政府は隨分手古摺つた。其の結果として、雲井龍雄などを、虐殺する

やうになつた。袁の政府が參議院に苦しめられて居るのも頗る此に類似したところがある。國民黨に寃罪を被せて、捕縛しやうとするなども同一の行きかたであると云つてよい。當時の日本と、今日の支那とは、外國との關係の密接の度が異る所から、袁の政府も、或は極端なる手段を取る事が、出來ないかも知れぬとは思ふけれども、支那に駐劄して居る外國の大使や公使などは存外支那化して、袁世凱の行動が全く正義に背反して居るのでも、平氣で見逃がす傾きがあるから、モ少し目覺ましき虐殺をやつて、世間を驚かさない以上は、餘り大した苦情も來ないことゝ思ふ。尤も日本では犬養、尾崎などの民黨側の名士から、袁世凱反對の議論が出て居るが、此もやつて然るべき事と思ふ。或る一派の支那通の議論では、袁世凱の統一を見越して、犬養、尾崎氏等の議論を嘲笑ふけれども、假令隣邦のことたりとも、事の正義であるか非理、非道であるかと云ふことは、十分に論究して、然る可き事と思ふ。外國の非理非道を見逃がすと云ふ事は、是やがて、自國の非理非道を見逃がす端緒となるので、賴もしくない考である。只犬養、尾崎氏等が、此を日本の政策上の議論とするやうならば、それは贊成の出來ぬ所で、此は何處までも、世界の正義のため、人道の爲に堂々と論ずべきもので同時にこれによつて列國の警醒を促がすべきものである。一方、日本の外務省は、又此の民間人士の議論に對して、借款が支那の政爭を助長するに、何等の關係あるものでないなどゝ、愚にもつかぬ辯解をして居るが、此は一の强辯に過ぎないのであつて借款の使用の途が如何に定まつて居やうとも、金が支那當局者の手に入ると云ふ事は、政爭に影響するは無論の事である。併し此は影響しても已むを得ないのである。ソレで日本の政府も、支那に對して極めて公平の態度を取りたいと云ふ主意であるならば、支那の當局者が、議會に對し、反對黨に對し、正義に背反し、人道を無視したる行動を取るの

を、嚴重に忠告して、之を止めしむれば宜しいのである。借款は借款として別問題に考へても宜しい。借款は袁の政府で無くても、即ち孫逸仙や黃興の政府であつても、之を貸すべき場合になつて居るのは同一である。

此の如く論じ來たれば、一方には袁世凱が統一を延期するのは不都合であると云ひ、又一方では日本の民間人士が袁世凱に反對せるのも道理だと謂つて、如何にも矛盾するやうであるが、全體、近年の世界の大勢は、常に斯う云ふ矛盾を免れないのである。故に正義の叫びを以て多少は支那の統一が鈍らされると云ふ事も免れないのである。是蓋し文明世界の弊であり、又其の有り難いところである。要するに、袁の政府も世界の正義の聲に顧慮しつゝ、漸を逐つて其の統一事業を進めなければならない。其間に持ち切れずして、投げ出すまでも、又他人が代つて統一するにしても同一の徑路を進むより外はない。其の間に於て、時々正義も、非理非道も顧みない突飛な行動即ち暗殺が、折り〳〵現はれて、一時思ひの外な變化を來たすのである。而して不愉快に、不活潑に、統一事業が進歩して行くと云ふのが支那の將來である。

ソレから、支那の外國關係を考へて見るに、余は曾て革命騷亂の起つた時に、或る集會の席上で、革命は結局成功するものとして、其の後に、直ちに來るものは、外國の勢力に對する屈從時代であると云ふ事を謂つたことがあるが、是とても、亦日本にも其の例に乏しからぬ事である。即ち日本では攘夷說で以て德川幕府を倒したのであるが、其の後に立つた新政府は、墺太利に對する最も不利益な條約を締結し、條約改正を仕やうとして岩倉大使などが世界を巡遊して其の考が一變して、樺太をも割讓し、殊に木戸公などは琉球の處置さへも、延期して斷行せないつもりであつた。中には國權論を主張した老西鄕一派

があるけれども、即ち内治專門、外國屈從と云ふ政策が成功したのである。支那の革命前後も亦大に之に類して、革命前には、一時利權回收熱が盛であつた、即ち變形した攘夷論である。トコロが、近頃では先づ第一に借款條約で屈從し、第二には蒙古問題で屈從しかけて居り、孰れ次ぎには、西藏問題で屈從するであらう。之は勿論、西藏とか蒙古とかいふ所は、之を失ふた方が、支那の利益かも知れないけれども、左に右其の將さに屈從時代に這入りつゝあるのは事實である。日本政府は、公平なる態度を持して、南北の政爭に超然たる代りに、此の屈從時代を利用する考へが有るかどうだか、恐らく有るまい。利用と云へば、少々語弊があるが、要するに、支那が自ら其の懸値なき勢力の極めて薄弱なることを自覺して居る時に、相當なる手段を施して平生ならば口喧しく云ふ事も、言はずに控ゆるときに、最も平穩に日本の東洋平和の政策を決定し、尤も安全に之を實行すると云ふことは、甚だ必要であらうと思ふ。併し、今の日本政府には、斯ういふ考の有りさうにも思はれない。ソレで日本では、朝野共に支那の政爭を彌次馬的に眺めて、ワイワイと騷ぎまはるものゝ、自分の國でも、其のために政府と民間と互に理窟を言ひ合うて、自分の國で、大に爲す可き事のあるのを遺却して居るかと思ふ。併し、此位外事に就て氣樂でなければ、近頃の大問題である、財政行政の整理は出來ないのであらう。（大正二年七月一日太陽）

革命の第二爭亂

支那の騷亂が又始まつた。是は大勢の上から言ふと、革命亂の內の幾つかの小段落の一つに當るのであつて、其の效果が大きいと云ふことは出來ない。併しながら其の戰爭は、或は却て第一の革命亂よりも激烈であるかも知れない。日本の維新の時でも、明治元年に於ける戰亂は局面が大きかつたけれども、敵味方の間に憎惡心が割合に緩やかであつて、戰爭の禍は割合に慘烈でなかつた。所が明治十年の西南戰爭に於ては、局面の小さいにも拘らず、其の戰亂の禍の慘烈なることは殆ど近來にない位のものであつた。是は明治元年の朝廷對德川の戰爭でも、それから支那の第一革命亂でも、敵味方の間に互に讓る餘地がある。さうして讓りさへすれば穩かに結着がつくのであるけれども西南戰爭若くは今度の第二の革命亂の如きは、個人的憎惡心が非常に激しくなつた結果であつて、何方も後へ引くと云ふ譯に行かない、それで其の戰亂の禍は、どうしても非常に慘烈になる譯である。時日の永引く點に於ても今回の方が永引くかも知れない。其の積りで今回の戰亂を觀察することが必要である。戰爭の局面から考へると、今回の騷亂は第一革命亂に比して、南北ともに各利不利の所がある。假に南方の立場から考へると云ふと、其の不利な點は武昌、漢口と云ふやうな支那中部の大都會を占領して居つて、其の上に騷亂を惹起したのが前回の利益な點であつたが、今回は其れが北方の手にあるのであるから、非常に不利益である。併し一方には前回には南京と云ふ重要な地點を、革命亂が起つてから後に戰爭の結果として之を占領したのであるが、今度は初めから無事に之を占領して居る。それは利益である。併し是は單に地勢上から考へることであつて、其の他に於ては南方の人心が既に戰亂に懲りて居つて、前回の如く革命

と云ふものに對して興味を持つて居らぬ、各地の商務總會などが戰亂に反對の意見を發表して居るのでも分る、それで前回の如く然う云ふ財源になる人々から援助を得ると云ふことが難かしくなつて居る。さうして北方では借款が既に出來て、各國の代表者なども兎に角現在の袁世凱をして統一せしむると云ふことを希望する點に於て一致して居る傾きがある。それで借款の費用は約束の文面があつて軍費に使用は出來ないと云ふけれども兎に角袁世凱の手に金があつて、それを行政費其の他に使用することの出來るやうになつて居る際であるから、此の點に於ても南方は不利益である。是等の點を除いて其の外を考へると、或は北方の不利益な點として袁世凱の勢力の極めて不安固であること、それから宗社黨と云ふものゝ暗に隙を狙つて居ること、それから蒙古兵の南下すること等を數へるが、此の内蒙古兵の南下することだけは思つた程の勢力がないとは言つても、多少顧慮を要するものであるが、宗社黨などの事は一向顧慮すべきほどのものでない。それから袁世凱の勢力は、其の實際を言へば、却て清朝の末路の勢力よりかは安全であると云ふことが出來る。成る程袁世凱の一身上から言へば、爆烈彈などを投げられる處があつて、北京の宮中の島の中に立籠つて居るけれども、一身上の危險と勢力のないと云ふ事とは同一ではない。清朝の末路は天子は幼稚であり、更に一身上の危險はなかつたけれども、是は其の勢力の薄弱だと云ふ點に於て何の補ひにもならなかつた。それで一般の北方の人望を言へば、袁世凱の今日は寧ろ清朝の末路に優つて居ると云ふことが出來る。

それで詰り此の南北の利不利を考へると云ふと、前回よりは北方の方が幾らか有利であるとも考へられる。唯今日に於て疑問になるのは海軍であつて、第一の騷亂の時も海軍の去就と云ふものが重大な

問題であつたが、今日では尙重大な問題である。海軍も今日の處北方に屬しては居るが、若し假に其の海軍が裏切つて、南方に附くものとすれば南方の形勢には大變な利益になるのである。それは北方の陸軍は前回には、目的とする敵は詰り漢陽、漢口に居つて、さうして北方から汽車で到着したものが直に戰場に臨む、さうして船の力を藉りる必要がなかつた、それで土地としては大變な重大な土地であるけれども北方から來て戰をするのには必ずしも困難な土地ではなかつた。併し今回のは漢口まで下つて來た北軍が皆な船に據つて九江まで向はなければならぬ。それで現在でも既に幾らかの兵數が九江に到着して居るのであるが、若し是が海軍が裏切をしたと云ふ時には詰り九江と漢口との間の交通路を斷たれて、九江に居る北軍が敵の包圍中に陷つて全く死地に入る譯である。是は非常に危險な事である。併し若し又此の海軍が終極まで北方から離れないものとする

と云ふと、現在此の南方では長江の南の方には南軍に一つの根據地があり、それから江西の湖口、南昌あたりに一つの根據地があり、一方では津浦鐵道の沿道、卽ち安徽省內に一つの根據地があつて、長江を挾んで居る。之を海軍の爲に長江の通路を絕れて、江南江北の連絡を絕ち切られるとすれば、湖北の安徽卽ち柏文蔚等の率ゐて居る南軍と云ふものは非常な危地に陷るものと云ふことが出來る。支那の海軍と云ふのは格別有力なものではないけれども、兎に角長江の連絡を取る位の力はあるので、今日も其の擧動は南北の勢力を支配するものになる。

詰り是は戰局の上から見た話である。唯だ支那の事を考へる時と、他の文明諸國の事を考へる時と幾らか別な觀察の仕方をしなければならぬのは、文明諸國で軍備などの發達して、軍備と云ふものと國民と云ふ者と密接な關係を有つて居り、それから軍備と云ふものが戰

爭を技術として考へる上から缺點のない發達をして居る所では、言はゞ此戰術と云ふものが卽ち戰略と效果が一致し、戰略と云ふものが又大局と效果が一致する譯である。日露戰爭などの場合に於ても之を知ることが出來るので、旅順攻擊戰とか、或は遼陽戰とか、奉天戰とか云ふやうな戰爭に於て、其の軍隊の各部分が行ふ所の戰術は軍隊の全部が計畫して居る戰略に直接の效果を與へる。さうして此の軍隊の戰略と云ふものが、又和戰の大局に直接の效果を與へて來る。所が支那のやうに軍備の發達しない國にあつては、是は此の三つのものが夫れ程密接に關係しない。戰術に於て非常に勝れてあつて勝利を占めても、戰略の大體には夫れが大なる影響をしない事もある。戰略に於て優れて居つても、それが大局の上に非常な影響をしない事もある。それで支那でも昔から天下を統一した英雄などは皆な此の大局を第一に重んじ、愈戰爭となれば戰略を最も重んじ、さうして戰術はそれ程大なる値打を有つて居らぬ。

革命の第一回の騷亂の時でも、北軍に漢陽を取られたと云ふやうな事は、南方の戰術上の失敗であるけれども、一方に間もなしに南京を攻落したと云ふことは、戰略上の成功である。それから一般に各地方に同樣の騷亂を起さして、さうして、淸朝をして其の位地を到底保つことの出來ないやうにさしたのは、大局の上に於て勝利である、今日でも前から言ふ通り戰術に於ては何人も北方の訓練した軍隊が、南軍に優つて居ると云ふことを認めて居り、それから戰略に於ても總ての準備が北軍の方が優つて居ると云ふことは認められて居るけれども、若し大局に於て南方のすることが、うまく其の機宜に投じさへすれば決して全然失敗に終るとも斷言することが出來ないのである。唯今日に於て南方の爲に考へると云ふと、其の大局を巧に利用することの出來る大人物がありや否やと云ふ點に在るのである。詰

り此の戰亂の結果は、今日何とも之を判斷することが難かしいのである。戰爭の禍の前よりかも慘烈であると云ふことは、是は豫言することが出來るから、何方が失敗するにしても支那の爲に大變な損害であると云ふことは疑ふことを要せざる所である。

戰局の観察は大體右のやうなものとして、假に袁世凱の方が成功するものとして考へる。それで以て支那の統一が完全に確實に出來る見込があるかどうか、と云ふことを考へる必要がある。勿論今度は雙方とも殆ど妥協の出來難い地位に立つて居るので、若し何處までも戰ふとして、北軍が勝つとすれば、勢力、卽ち威力の上に於て南方を壓服することだけは前よりかは大變に都合が宜くなるのである。併し今度の此の革命の始末を付け、それから新しい共和國の基礎を安全にするのには、單に威力の統一ばかりでは出來るものでない。勿論財政の事も十分考へなければならない。それで長い年月を費さずして、今度の戰亂を平げ得たならば、今までよりかも一層列國の信用を增して、現在進行しつゝある五國借款の外に、更に第二の借款も出來、それに依つて貨幣制度の統一を圖り、財政の困難をも救濟することが出來るかも知れぬ。併し若し之が半年なり一年なりの間に戰亂の平定が出來ぬとすれば北京政府と云ふものは財政上餘程の困難に陷る譯である。今日でも借款の使途と云ふものは指定されて居るが、其の內行政費の如きは既に前渡を受けて是迄に大分使ひ込んで居る。まだ手の付かない金と云ふは、軍隊の解散費、それから鹽務整理費と云ふやうなものであるが、軍隊の解散費は解散を實行する時機にならなければ受取ることが出來ず、鹽務の整理費は實際其の實務に着手しなければ受取ることが出來ない。此の二つが今度の借款の內で北京政府の手に殘るものゝ內の半額を占めて居る。此の戰亂の間には其の前の行政費、半年間の行政費に當てる積りで借りたものを、巧

に運用して軍費を支へなければならぬ譯である。其の半年と云ふ期限は來る九月に到着するのである。實際其金は九月に至つて全部盡きるのではなけれども、モウ少し先まで延すことが出來るとしても今年中を支へると云ふことは難かしい。

それから北京政府の財政は勿論幾らか南北各省から租税の仕送りを當にして豫算を立てゝ居る。それが今回の戰亂で全く送られないとすると、それだけの收入を減じて居る。兎に角財政の窮乏と云ふことは目前に迫つて來る。それだからと云つて北京に於けるあらゆる行政機關を停止して、さうして軍費の方に夫れを繰入れると云ふことは、袁の政府が列國に對して信用を維持するに取つては餘り都合の好い方法ではない。北方の方から考へると云ふと、第一に恐るべきのは戰爭中に財政の爲に自ら轉覆しなければならぬ危險に陷ることである。縱し此の戰亂を平定し得て第二の借款を起し得たにしても、既に今回の戰亂で軍費を要した以上は、其の塡補をすると云ふと第二の借款の大部分も、之を財政の基礎を立てる所の基金に使用すると云ふことは難かしいやうになつて來はしないかと思ふ。それで擔保のあらん限り借款をして、借りるべき餘力が無くなつて投出すと云ふやうなことになるやうでは、袁世凱一人の爲は兎も角、支那の爲に由々敷大事であらうと思ふ。

一體袁世凱の人物を日本の當局も買被つて居るといふ評判が專らであるが、是は日本のみならず、列國ともに大分買被つて居る傾きがあると思ふ。支那で李鴻章は文明國の軍隊を學び、色々文明の事物を輸入することに熱心な人であつたが、それでさへ文明國の組織の根本の意義を知つて居つたか何うかと云ふことは疑問であつて、單に有形上の文明國の利器を輸入して、それで滿足をして居つたのではないかと思はれる。詰り其の結果と云ふものが、日清戰爭に於て現れ

たのである。併し李鴻章は自分は西洋の文明を採用することに失敗はして居るけれども、之を上手に採用すると云ふ事の必要と、それから其の効能をば十分に知つて居つたかと思はれる。それは日清戰爭より十年も前に天津で我伊藤公と談判をした時に、伊藤公の政治上の事柄に通達して居るのを觀、其の才力を用ひてやつたならば十年內に日本は必ず著るしく盛んになるであらうと云ふことを、內々で北京の方に忠告をして居つた事がある。斯う云ふ點は自分では採用することに失敗しながらも、其の着眼だけは良かつたと云はなければならぬ。

袁世凱の西洋文明の採用の仕方は李鴻章よりかは、一段と組織立つて居るやうに見える。併しながら其の文明の意義と云ふものを十分に呑込まずに矢張り有形上の利器を採用しさへすれば宜しいと思ふ點に於ては、矢張り同一でないかと思はれる。それに其の人物が李鴻章のやうな誠實を缺き、李鴻章のやうな度胸を缺いて居るが爲に、何でも外見を都合好く見せ掛ける事だけに骨折つて、さうして根柢の仕事と云ふものは、一向之をする積がない。今度の共和國を組立てるにしても、本當の共和國と云ふものは、どう云ふ風にして組立てれば出來るものであるか、兎に角從來の朝廷を廢して、此處に新しい國家組織をなすと云ふ點に於ては、どうすれば安全なる基礎を定められるかと云ふやうな事を考へて居る風は更にない。さうして何うかすると日本などに對しても、或はそれ以外の列强に對しても其の國の狀態と云ふのを根柢から研究して、其の盛になつた所以を呑込まうとはせずに、單に一時自分一個の都合からして、それ等のものを巧みに利用せんとばかり考へて居るやうである。是は袁世凱の今日に始まつた事ではなくして、初めて袁世凱が新式の軍隊を組織し、それがうまく時勢に當つて、さうして北清事變の亂以後巧に其の位地を

上げて行き、さうして其の勢力を有つて來た時からして、既に其の心の用ひ方と云ふものは分つて居つたのである。是も明かなる例を擧げる事も出來るけれども、それは姑く省くとして、兎に角袁世凱は現在の地位に居ればこそ相當の人物に見えるのであるけれども、是は實は何等の經綸があつて、さうして自分が國の百年の大計を考へて居ると云ふやうな譯ではないのである。

其の點に於ては日本の維新の初めの豪傑、西鄕とか大久保とか岩倉公とか木戸とか云ふやな人々とは全く違つて居るのである。唯現在の地位に依つて之を有望と判斷するのは、猶德川幕府の末年に幕府の勢力と云ふものは殆ど之を維持することの出來ない程になつて居るにも拘らず、外國人から見れば尙之に依つて仕事をする餘地があるかのやうに考へられて、例へば佛蘭西の三世ナポレオンなどは德川政府を扶けて、さうして之を維持しやうとした位の事であつて、支那の國狀に對しても、從來の歷史、袁世凱の人物を根柢から研究して居ない結果であると云はなければならぬ。是は袁世凱の人物の信賴するに足らない事を言ふたのであるが、假令袁世凱の人物が今論ずるよりか遙に大きくて、さうして相當熱誠があつて改革を斷行しやうと云ふ考があり、新しい國家を美事に仕上げやうと云ふ希望があるにしても、袁世凱の手で之をやると云ふことに又一つの困難があると云ふことを考へなければならぬ。それも矢張り日本の維新時代の歷史を考へると分るのであるが、德川の末年に當つては、德川幕府と云ふものがどうしても自ら勢力を維持することが出來なくなつた。是は幕府の遺老たる勝伯なども後に至つて明言した事であつて、幕府は誰からも攻擊を受けなくても、自然と瓦解すべきものであつた。詰りそれは財政の維持が出來ないからであると云ふことを言つたが、財政も一つの問題であり、其の外の事情もある譯であるが、兎に

角自分でも到底維持することが出來ないと思つたから、それで後藤伯などの勸告を聽いて、さうして大權を奉還した譯であつた。併し大權を奉還したけれども、當時の德川方に於ては詰り從來の將軍職を奉還したのであつて、朝廷の御委任が德川家に來るものと思つて居つた。勿論最初將軍職を奉還した際に、朝廷からも然う云ふやうな思召の勅語があつたのである所が時勢は其の政權の奉還に依つて急轉して仕舞つて、さうして今度は政權の奉還丈に止まらずして、德川の勢力を悉く轉覆して始めて維新の事業を成し遂げると云ふことに傾いて、日本ではそれが成功したのである。是が若し當時さう云ふ朝廷の方に果斷がなくして將軍職は辭退し大權は奉還したけれども、矢張り政治上の仕事は德川家に御委任になると云ふ譯であつたならば、其の德川家に伴ふ所の三百年來の弊害といふものは到底之を一掃することが出來ずして、さうして又朝廷の財政も德川家の收入の十分の一とか五分の一とかを奉つた所で、それで朝廷の維持が出來る譯でもない。諸大名からもさう云ふ風な割合で徵發しても、日本を統一した政府を維持するには、到底不足であるから、新しく興つた朝廷と云ふものは、矢張り其御委任を受けた德川と共に又失敗して仕舞はなければならぬ筈であつたのである、幸ひに德川家を倒すと云ふ果斷を行ひ、さうして德川家の八百萬石の祿を七十萬石位に減じ、それに引續き廢藩置縣を斷行したので、それで統一事業と云ふものが完全に出來た。

今日清朝が位を退いて、さうして共和國が成立つて袁世凱が假の大總統になつて居ると云ふのは、其處に日本の如く萬世一系の天子こそないけれども、名義上はともかく、事實は前に政權を有つて居た系統のものが、矢張政權を維持して居ると云ふのであるから、德川幕府が政權を奉還しつゝ、矢張り實際は德川家で權力を握つて居ると云

ふのと同じ姿である。それが爲に支那の數千年來の積弊を掃除することが到底出來ない。支那の數千年來の弊害は色々あるけれども、兎に角政治上の事總てが尾大掉はざる形に陷つて何處にも責任を持つと云ふ人間がなく、それから官吏となると、一種の貴族生活をなして、非常の收入を得ると云ふ事、あらゆる官吏の無能にして然うして私を營むと云ふことは、日本の德川時代に於ける弊害よりかも尙除きにくいのである。是も細かに其の間の狀態を論ずると云ふと、餘程興味のある事であるが、是は又他日に讓ることゝして、兎に角一口に言へば官場の習氣と云ふものを一洗しなければ、如何なる政體であつても、如何なる政府であつても、決して完全に支那を統一すると云ふ事は出來ぬのである。

それは從來官場に生立つて、さうして又名義上共和國の大總統であるけれども、實際上は新しく、興つた政治上の權力を代表するのではなくして、從來からある所の淸朝の政權を承け繼いだ姿にある袁世凱をして、其の弊害の掃除に任ぜしむると云ふ事が、到底出來得べからざることは日本の維新史の例を以ても知ることが出來る總ての事が北方に都合好く行つて、さうして威力上の統一が行はれても、結局根本の改革と云ふものは出來るや否やと云ふ事が其の最後の大問題であつて是が出來なければ共和國になつても、結局支那と云ふものが益衰滅に向つて行くより外ないのである。

以上の所論は北方が成功したと假定した上から見て尙斯う云ふやうな困難があると云ふ事を論じたのであるが、南方は案外に早く挫折したやうである、萬萬一南方が成功したと假定して、それで果して新しい共和國の基礎が安全になるや否やと云ふことも考へる必要がある、勿論財政上の事は兎に角威力の統一に於てさへ成功すれば、南方でも袁世凱位の便宜は得られるものであつて、且南方のやうな

支那の財源と云はれる地方を根據として、さうして其處から興つた者が政府を取つた場合には、其の資力を以て中央政府を組立てるから、袁世凱が北方に居つてやるのから見れば幾らか便宜でもあり、それから今のやうな官場の習氣と云ふものは、南方の革命黨の人間などには比較的乏しいと云つて宜いのであるから、其の方の改革も幾らか斷行が出來るものとしても宜しい。併し兎に角新しい國家を組織して、それを成立てゝ維持して行くと云ふのには、第一にはそれを遂行するだけの人物を要する譯である。自分は嘗て革命亂の初めて起つた時に、支那の留學生などに對して次の如く言ふた事がある。日本では明治の維新を成し遂げる迄に維新前亞米利加の黑船が浦賀へ來てから十五年の間があつた。其の間に各藩の志士若くは浪人のやうなものでも互に交通し、又諸侯などにも勝れた人があつて、それ等は自分の國の人物をも多少見分け、或は他藩の人物までにも注意して、さうして日本中人物の交際と云ふものが盛んに行はれて、其の間に自然に人物の選り分けがついたのである。殊に西鄕などはそれ等の事に最も注意して、自分の日記には色々自分の會つた人物の評論を、極めて簡單に書いて居つて、何某は奸物、何某は眞成の人物と云ふやうな事を書いて居つた。それから又人物を見分ける標準として金の欲しい人間は金に依つて動く、それから名譽の欲しい人間は名譽に依つて動く。併し金も要らず名譽も要らず、命も要らないやうな人間が世の中にある。さう云ふ人間は何に依つても動かされない。斯う云ふ人間でなければ、眞成の事業は出來ぬものだと云ふやうな意味の事を書いて居つた、此の如く書いて居ると云ふのは、即ち自分も其の意味で修養し、それから他人も其の意味で鑑別したのである。さう云ふ風にして十五年間詰り人物の淘汰と云ふか、選擇が十分出來た上に、明治の維新を愈決行すると云ふ時には、唯一箇の貧乏武士と

云うても、薩摩に西郷吉之助と云ふ者があり、長州に桂小五郎と云ふ者があると云ふやうな事は、天下一般に知れ渡つて居つて、此の新時代の事業と云ふものは如何なる人物が負擔すべきものかと云ふ事が分つて居つたのである。それで容易に維新の改革が出來たのである。それで今支那では此の革命黨が勃發して居つて、色々な人物が居るのであるが、日本の如く支那の國を負擔して、さうして大改革を遂行すべき人物の選擇が付いて居るかどうかと云ふ事を話した事がある。所が支那人もそれは十分に付いて居らぬと答へた。

是は今日の革命黨に取つて頗る缺點であらうと思ふ。さうすれば是から後色々な境遇又は經驗に依つて選り分けられて、始めて人物が出るのである。更に今日までの人物と云ふものは十分に當にならぬと云つても宜しい。さう云ふ人物が現れるまでは、幾度か此の支那の局面が轉換して、さうして最後の落付を見る譯である。佛蘭西の革命の時などでも、最初殆ど偶然に發して、それに連れて長い間の人民の憤激が突發して、準備なしに騷亂が起つたのであるが其の代り革命の政府と云ふものは到頭成功せずに、さうしてナポレオンのやうな大なる野心家の手に歸して仕舞つた。準備なしに突發した事はどう云ふ所に結着するかと云ふと、なかなか判斷が付きにくい。それで兎に角判斷し得られることは、尙數年間局面の急變と云ふものが屢起つてさうして其の後に善く落付くか惡く落付くかと云ふ事は分るけれども、兎に角愈よ騷動に草臥れた時に、已むを得ず落付くと云ふやうな事になるかも知れぬ。

併し今日の時勢は佛蘭西の革命の時、又日本の維新の時とは違つて外國の壓迫が一層激しくなつて來て居るから、斯う云ふ內部の混亂、即ち局面轉換と云ふ事は何時でも內部の原因からのみ來るものと思はれない。其の間に外部の原因も伴ふものとすれば、支那の前途と

云ふものは益以て危險を感ずる譯である。兎に角今日に於て革命黨の方から考へても、今の革命黨の立物になつて居る人間の手に依つて其の仕事が成功するかどうかと云事は、餘程大なる疑問であることは右に述べた通りである。

是は詰り今度の戰亂の主なる事情を南北の雙方から見たのであるが其の外に今云ふ外國の關係と云ふやうな事も今日既に切迫して居る事柄があつて、多少の注意をしなければならぬ事がある。是も日本の維新の當時に既に經驗のある事であつて、日本の維新の時には倒されたる德川幕府と云ふものは開國論、倒した新政府と云ふものが鎖國論であるべき筈であつたが、愈維新が出來て見ると鎖國論と云ふものは實際には行はるべきものでなくして、矢張新しい朝廷も開國說を取ることになつたは宜いが、開國論で自分の地位を失つた德川幕府は其の當時、上は朝廷から、中は列藩、下は民間の志士から色々と攻擊を受けて、さうして外國に對する關係を何うしても强硬にしなければならぬ傾になつて居つたが實は外國に對して甘くやつて居つたのである。最も世間の評判の惡かつた安藤對馬守など云ふ人も、外國人を扱ふ點に於て最も妙を得たと云ふ人であつた。それで其の時は又一つは折好くも亞米利加の公使として來たタウンセンド、ハリスなどゝ云ふ人も、日本の爲に親切に色々指導して吳れた爲でもあるが、日本が嘗て經驗したことのない通商條約を結ぶに就ても世界一般に行はれて居る國際上の慣例を叮嚀に敎へて、さうして日本一國の不利益にならぬやうな條約をしたのである。

所が朝廷で組織した新政府はそれ等の事に就ては、殆ど無經驗であつて、直に鎖國論を改めて開國論としたが、どうして之を處理するかと云ふ事は當時の憂國志士の間にも薩張り解決が付かなかつた。其の結果として一時は德川幕府よりも新政府の方が外國に對して遙

か軟弱の政策を取ることになつた。さうして墺多利に對する修交通商條約に於て德川幕府が締結した條約よりかも遙に不利益な條件を加へた、領土に於ても樺太を失つたとか云ふやうな事などは、德川幕府に於ては見事に切り拔けて居つた外交問題である。それを新政府は却て失敗して居るのである。袁世凱の現在の政府でも常に此の外交に對して清朝の末路よりかも遙に軟弱に傾いて居る。蒙古の問題に就て露西亞に讓るとか、又西藏問題に就て英吉利に讓らなければならぬやうになるとか、是が尙將來姑くの間は益軟弱の傾きである。日本でも條約上の權利を回復するとか云ふので二十餘年を費した、支那も段々盛んになるとしたら、先づそれ位の年月を費さなければならぬものと考へられる。

所でどうかすると滿洲問題の如きも其間に加へられて、日本が對支那の行動に就て何か容易ならぬ野心あるやうな議論を出す者がある。支那人は勿論、西洋人にもある。之に就ては日本の立場としても日本の態度、意見を判然表明しなければならず、支那としても對日本の態度と云ふものを自覺しなければならぬ、西洋にあつても其の間の關係を知らなければならぬのであるが、日本は勿論依然として支那を保全すると云ふ主義に於て渝りのないことは當然であらう。あらうけれども是は日本が自分の利益上已むを得ずして支那保全を唱へるものと考へると、それは誤りである。或は日本の政府なども、それ等の問題に就き確然たる自信がないかも知れぬけれども、吾々の觀る所では、日本は自分の利益上已むを得ず支那を保全しなければならぬと云ふものではない。實際今日の支那に對する列國の勢力と云ふものを校量すれば、日本と露西亞、此の二國は其の勢力に於て明かに支那の運命を支配し得べき實力を有つて居る。それから英吉利の如きは貿易上明かに支那の内事に對して發言權を有つて居ると云つ

ても宜しい。是等の三つの國が支那保全を唱へると云ふ事は是は自分の已むを得ざる立場と云ふのでなくして、詰り自分の權利として之を發言することが出來るのである。保全しやうとすまいと、自分の意志に依りては如何樣にでも出來るのであるけれども、色々な關係から自分の權利として支那の保全を主張して居るのである。外の諸國が自分の利益上支那が保全せられなければ困ると云ふやうな立場から、支那の保全を發言して居るものとは立場が違ふのである。それは諸外國にも其の事を認めさせ、又支那人にも其の意味を呑み込ませ、日本人も自ら其の意味を明確に自覺する必要があるのである。日本は自分の利益上支那の保全をしなければ困ると云ふことは更にない。支那が保全せられない場合には自分が最も大なる權利を有つて居る。其の分け前に與るべき實力を有して居るのである。發言權をも有して居るのである。支那に對して然う云ふ分け前を要求しないと云ふのは卽ち其の國の言はゞ道德上の見地から出て來て居るのであつて、決して單に自國の利益問題ではない。

それを此の際十分に明かにして置いて、さうして日本の態度と云ふものを極めたいと思ふのである。是は支那の如く今後とも屢局面の轉換を經て、其の度每に何等かの損害を其の交際して居る國が蒙ると云ふ事があつては、其の自分の立場と云ふものを十分に自覺する必要が確にあるのであつて、殊に外交の局に當る者などは、其の意味で支那に臨まないと大なる謬見に陷り、又大なる自分の不利益をも來すのであると思ふ。（大正二年七月廿九日―八月五日大阪朝日新聞）